

版四十第

ホネムシ

内藤千代子著 博文館發賣



ホネームーン

内藤千代子著

目が覺めたのは六時頃だつた。そつと起きて銘仙の寢まきの上に羽織の袖を通しながら障子を開けたら、母家ではもう初やがせつせと清ぶきをかけてゐた。スリツバが見えないので、ふきこんだ廣縁に冷たい素足を瓜だてゝ、

『初や』

『お早うございます』

つて頭を下げながら、イヤに人の顔をみるので、

『早く洗面のお湯をとつておくれな、何をしてるの？』

と大聲おほこゑできめつけると、

『ハイ只今ただいますぐ……』

つて其そのくせそろ／＼立つて行つた。

澄すみ切つた空そらの碧瑠璃へきるり、さわやかな秋あきの日光ひかりは美うつくしうきらめいて、身みにしむ朝風あさかぜ。
さわ／＼と木この葉はをわたる。

ぐつと襟えりをついて鏡臺きやうだいの前に坐すわる。昨夜ゆうべの高鬚たかまげ少しみだれて、首筋くびすぢに細ほそい後れ毛おくれがそよいである。ベツタリと白粉おしろいといて、念入ねいりにお化粧けいようした。ことしの秋あきを頬ほに紅くれなゐと光澤つやう失せて、たい粉このふいたやうに白しろく……クツキリと曲線きよくせんを引いたやうな眉まゆが、我われ乍なら憎にくらしかつた。

母様かあさまがこれを着きよと有仰おつしやつた白茶地しらちやぢのお召縮緬めしちぢに、緋繻珍ひしゅちんの丸帶まるおび、うす寒さむいので大だい好きこいきな濃茶地こいちぢ矢飛白やがすりの被布ひふをはおる。眞紅まつかな亂菊らんぎく模様ようの青磁色せいじいろの半襟あんりをきつ／＼合あせて、一寸後姿ちよつとうしろすがたをうつしてると、何なんだかお離れはなの戸とをガタ／＼させてゐらつし

やるので、いそいでかへる。

『お目ざめ？お早う御座います』

手をつくし、

『お早う、寢過しました』

『いゝえ、まだ、私が早かつたんで御座います』

そつと立ちそふてお羽織の襟を直して上げる。

『和様だつてひくい方ではないんだけど、私とあまり背がちがはないんですもの。』

可笑しいわねえ』

洗面所に御案内して、タオルをもつて立つてると、

『もういゝですよ』

つておつしやる。

『私、この眼鏡をかけたなら似合ふでせうね、何度ですか』

とつて棚の上におのせになつた鐵ぶちのを見て、ふと口をついたが、『十七度です。ほれどこの眼鏡は強過ぎて眼がチカチカするんで……』ゴシ／＼と冷水摩擦してゐらつしやる。道理こそ妙にめがねの上からチラ／＼人を御覽になるくせがあつて……。

『ヤーお母様』

茶の間へはいつて快活に御挨拶なさる。私も一緒に叩頭する。

『お早うございます』

つて母様はもう鐵瓶のちん／＼とをどつてる長火鉢の前に新らしい郡内のお座蒲團、銀のべのお煙管に莚をひねつてゐらしたが、にこやかに二人にお出花をついで下さる。私は何だかきまりがわるいから、新聞を引よせて、膝の上でよみ始めた。

三人揃つて朝御飯いたゞく、新調の食卓かこんで……。

母様も妙にお行儀よくしてゐらつしやるし、私もかたく坐つて、何だかよその家

へでも行つたやうな心もち、お給仕の初やお盆をみつめ乍らも、そつと私ばかり
みます。イヤな初やだよ。和さまはめづらしいかも知れないけれど、私どうしたと
云ふのだらう。この着物だつて被布だつて度々着たこともあるぢやないか。負けぬ氣
になつてデロ／＼見返してやつたけれど、根まけがして、初やの方をみるのはやめて
和さまの方を向く。濃いけれどもまだ立てたての八の字髭、滑稽で仕方がない。鼠
羽二重の襦袢のお衿や、焦茶色の鶉縮緬の無双のお袖、いゝ薄花色の兵古帶、随分氣
取つてゐらつしやるわねえ。お醬油つぎをとらうと手をのばしたはずみに、つい袖
口に引かけて、母様のお味噌汁のお椀を引くら返した。和さまは笑つてゐらした。
食後に林檎をむく。紅く輝くスキートな色よ。匂ひよ。和さまも御自分で一つとつ
て、する／＼とナイフをあてながら、

『僕等は五高の寄宿舎時代にねえ、二階の窓から林檎をむいて、その皮を下までぶ
ら下げちや喜んだものだつた』

『ウソ！ウソばかり！そんな長い皮があるものですか！』

『いゝや、細くく一分ほどにむくんですよ。長くつなありますよ。この頃は下手になつちやつた』

白玉のやうにまあるくむき上つたのを、

『上げませう』

つて母様にお渡しなさる。

『私達は柿をむきましてね。その皮を肩ごしに後へ投げるのですよ、さうすると未
來の良人の頭字が出るとか何とかつて大さわざでしたけれども、ウソよ、私なんか
つとも當らなかつたの……』

三人顔見合せては、笑む。

藤岡夫人御來訪、私は失禮してお離れへ引き下つて來た。六疊の方を和さまのお
書齋ときめたので、疊の上に緑色の絨氈を敷き、銀金具のピカ／＼した机や、大さ

なく本箱や、まだみんな錠をおろしたまゝである。床の間の白菊を一寸直し、南向きの椅子に腰かけて、デスクの上に身を投げかけた。障子ごしにのぼせるやうな日光のあたゝかさ。氣まぐれな蠅がポン／＼豆大鼓をうつ。

芭蕉布の襖にさら／＼と袖のふれる音がして、

『艶子様、こちらにゐらつしやいますの？』

『はい』

『御免遊ばせよ』

にげるにもにげられず、さうかつてこんな場合、何と御挨拶申上げてよいものやら。たい座を退つて顔も得上げず一禮すれば、

『昨日は……』

『いろいろ有がたう御座いました』

とまた耳の根が熱くなる。

藤岡の叔母様はお仲人でした。白袷黒紋附の御盛装で引裾に遊ばした叔母様は、近づきがたいやうに氣高かつた、わななく足をふみしめて、ひしと叔母様のお手に絶つてたことを思ふと、御轉婆なまねは出来やしないわ。おとなしく俯いて袖を重ねた。

けふは素みな大島に濃鼠地の裾まはし、古代織の巾着まなのを少さくいゝ格好に結んで、水ぎは立つた奥様ぶり。金子子爵夫人式のお丸髷に金足の五分玉珊瑚、玉を延べた頂長う、中高顔を少し傾げるやうにして、

『何してゐらつしやるの、和雄さんはお母様とお話してゐらつしやいますよ。あちらへいらつしやいますな……』

『はい』

『いゝお日和ですこと、丸木へお出掛になりませんか。お仕度のお手傳ひいたしませうよ』

『私一緒に寫真なんか撮るのはイヤ。もう先日獨りで撮しておきましたから、あれで澤山で御座いますわ！』

『オヤ、まあ、御挨拶ですこと。ですが、あのもう何處かおきめになりました？』

『エ、鹽原へ』

『結構ですね、お羨ましいこと』

『……………』

胸に手をやつて、せん方なさの手すさみに、靨色の絹絲ぶさを五本の指にいろいろからめる。

『艶子様、お髪を撫でつけて上げませう』

『どうせもうほどいて了ふのですね、旅行にはこんな髪してゐられませんから』

『まあ、また束髪に……』

『エ、ですけれど大學の方は日本髪がお好きなのですつてね。束髪なんぞ生意氣

で、後からつき飛ばしてやりたいほどなのさうで……』

『和雄さんがおつしやいましたの』

『いゝえ』

叔母様つてはお人の悪い「和雄さんのことを何てお呼びになりますか」だつて。

『それはお名があるんですもの』

『和雄さんて有仰るの？』

『エ、和さまつて』

『和雄さんは貴女のことを何てお呼びになりますの』

『存じませんわ。まだ呼ばれたことは御座いませんから……』

藤岡の叔母様の切なる御盡力によつては、流石の我儘者も服従せざるを得なかつた。あんまり早くお話がきまつて了つたので、私は和さまとお目にかゝつたのもなつた二度きりでした。そしたら和さまは昨夜、私をまだ通學時代から知つてゐたの

だと有仰つた。毎朝青木堂の前で行き合つたのだと有仰つた。松屋で筆を選つてゐた時、一緒にはいつて買物をしたこともあると有仰つた。神山の令嬢と云へば僕の友達だつてみんな知つてゐましたつて有仰るのですもの。根上りの束髪にして紫袴始終前かゝみになつて道のふちばかり歩いてゐたつて艶にちがひないわね。私もあの頃行き逢つた大學生をあれかこれかと考へてみるけれど、和さまに似た方は思ひ出せないわ。

こんな者でも強いてとのぞんでくれるものは、十六の春からこのあひだまで、私の耳にはいつた分だけ二十八人ばかり、中でも秀才のきこえ高き騎兵中尉の△△さま、海軍大學の○○様、農學博士の前田さま、三井物産××支店長の青山さま。惜しいゝつて母様なんぞ泣いてゐらしたけれど、みんなゝ私の駄々で打ちこはしてしまつた。もうゝこんどと云ふこんどばかりは何と口實のつけやうもなくなつて了つて……、きつとお友達は笑つてゐるでせうね。あれ程お高くとまつてた艶

さんが、たゞのヘッポコ法學士ぐらゐにつて。

私寫眞と云ふと、あの雛嫁様のやうな文様をおもひ出すわ。あの方のお寫眞で素
的なのよ。海岸の背景で誠様は角帽かぶつてマント着て腕ぐみをして、岩によりか
かつてゐらつしやる、お被布召して文様はその足元にひざまづいて、高島田の首を
かたげて、ちつと振り仰いだところ。まるで新派のお芝居にでもありさうだわ。

叔母様は母様としばらく何か話しておかへりになつた。早めにお晝餐をすますと、
お風呂が湧いたと云つてくる。母様は、いゝから和雄さん先へおはいり、つて有仰
る。いゝえ、どうぞ、と云つても、いゝえまアいゝさつて頭おふりになるので、和
さまに申上げ、ベシんだの石鹼だの、私持つてまゐりませうつてお手にからまつて
も、

『かまはんです』

つてずん／＼先へお立ちになる。仕方がないからお後にくつゝいてお湯殿へ行つ

て、

『お熱か御座いませんの』

『否、結構です』

どうかわかりもしないのにと思つたけれど

『では御ゆるりとお召し遊ばせ。初や、お加減を伺つて頂戴よ』

つて小走りに出て來て了ふ。

『あゝ私顔がほて／＼して……』

入浴して逆る頬の色、露滴らん髪の光澤、鏡臺の前に座り直して、二番目の抽出を開けやうとすると、何か間かへてゐて、無理にガタ／＼ゆすぶると、瓶にさしたコスモスの花がハラ／＼こぼれる。やつとぬき出したら、まだ封の切つてない手紙がはさまつてゐた。さう／＼、きのふの朝受け取つて、ついそのまゝ筆筒の上にのせておいた——あの子からのだ。

「神山御姉上様、敏男」

と男らしい筆のあと。

私は馬鹿ね、ほんとにどうしてあんなことをしたんでせう？いつか汽車中で知り合になつた中學生があつた、小倉の袴、マント着て、年は十七だと云ふけれど、小柄で言葉つきのハキ／＼した、それは／＼可愛い子だつた。乞はるゝまゝに住處を書いてあたへて、御きげんようと云つて別れた。

その後手紙をくれたが、私は馬鹿らしさに涙が出た、あんな可愛い子にこんなことが書けるのか、どうしても信じられない。あゝ私なんだつて優しいことなぞ云つたのだらう……。

風紀のみだれてゐる寄宿舎ときくからには、上級の不良少年等の入智恵であらう。恐迫されたのだらう。とは思つたけれど、いまもなほ懲りずまたこんな手紙を——封のまゝビリ／＼と引さいた、むしりむしつたその片々は室中に散らばつた。眞面

目になつてくれゝばいゝけれども。あの花の様は少年の前途が思はれて……

初やが手をついて、お俣がまゐりましたと云ふ。二人はこれから天王寺へお父様のお墓参り。

和様はフロックコートに眞白の立襟凜々しく、昨夜御披露會の時のまゝの御服裝は高浪縮緬の二枚袷、薄金茶地七子つゝれの丸帯を、背筋高ききりゝと結んだ横矢の字、襟のあたりとハンケチに、ヘリオトロープ淡くしまして、和様のポケットに入れてさし上げる。

母様のお室へ伺ふと、

『おゝお立派に出来ましたね、御苦勞さま』
つておやさしい。

立ち出づる玄關に、和様のお靴と緋ビロード表の私の草履と、ならんでゐるのも恥かしくて……。

この日はじめて俤夫に「奥様」と呼ばれた。うなづいて會釋しながらお先へ乗りうつたものゝ、思はず火と燃ゆる耳たぶを、後の車上から和様は何と御覽遊ばしたであらう。青磁色ぬひとりのバラソルばつとかざせば、青々として秋晴の町を、ゴム輪の銀輪音もなくひらめきつゝ……。

X

チエスターフキールド式のオーバコート、薄ねすみのソフトハット、薄手なラクダの膝かけ小わきに、そとお後から引そふ私は刺繡入鹽瀬の手提袋もつて、秋の日薄き西那須野驛に下車た。

直ちに腕車を驅つて鹽原にむかふ。さすがうれしさに胸はをどつた。瑠璃色の空から寒い風が吹いて、から／＼と落ち葉が舞ふ、手袋なしの手は冷たいので洋傘をつぼめて了ふ。柿の實が赤々と日光に照り榮えて、稻をつけた馬が、イサ／＼ボカ

ホカといゝ音をさせて通る。和さまがふりむいて、

「大切なお顔が焦げますよ」

づておつしやる。

「御心配になりまして。ホ、、、、」

鳥森の櫻紅葉の中をぬけて、砥の如き迫途、行けども行けども、茫々たる那須野ヶ原に、すがれゝた秋草よ。ゆくてにはさばてんのやうに重り合つた鹽原の山々、ゆられゝて千本松を過ぎ關谷村に入る。

秋深ければにや水やせて、溪に淙々の音かすかなれども、白羽坂、紅葉谷あたりの風景、谷間もわかず老楓枝をさしかはして燦然と夕日の色に輝くさま、木の間がくれの箒川は、折々白光のひらめくかとはかり。翳せば其の手に紅の、山も峰も映りさう。

金色夜叉の續々編や、森田學士のことなど思ひながら、石につまづく度左右にゆ

『林間酒をあたゝめて——』

をおもひ出す。

俵夫は流るゝ汗をふき、息をしいく一々説明してくれる氣の毒さに、前へくと身をかゝめれば、コートの襟なんぞ帯がみえる程後へすり落ちて了ふ。その代り少しでも下り坂のところは、がらくがらくがらから、走つてゝ走りぬいて痛快だけれど、髪に手をやつてゐなければ、ピンでも櫛でもふり飛ばすばかり。

大綱おほあみの湯ゆを過すぐる頃ころは、鳥井戸山とりいどやまに浮ういてゐた十日とつかの月つきの、やゝに光ひかりをはなち
初め、山氣身さんきみにしみて冷ひややかなり。九回くかいの瀧たき、宛轉橋えんてんはし、龍門りゅうもんの瀧たき、潜龍せんりゅうの瀧たき、路みちの
曲折きよくせつせんとするところ、岸きしせばまりて紫紺色しこんいろの水みづをたゝへた稚兒ちこケ淵ふちの物ものすごさ。
心こころありてか夕紅葉ゆふもみぢ、ハラ／＼と二人ふたりの肩かたに散ちりかゝる。

いまはもうたい恍惚として了つた。俣のゆらめきに身をまかせつゝ、白雲洞のトネルをくぐり、御用邸を右にみて、福渡戸の町は燈火に美しく輝いてゐた。勢よく和泉屋別館へ引こまれる。

『お着き様で……』

ばら／＼と出迎へた番頭達に取りまかれ、夢の覺めたやうな氣がして下りたてば、左右から手を取らぬばかり、みちびかれて二階を上るとき、段子の中ほどで、パタリと片足けつまづいて了ふ。

室はまだ疊の色の新しい八疊間、火がよくおこつてゐるので、風に吹かれてきた顔がぼつとする。女中がコートを脱がしてくれたり、ふく／＼した友禪の座布団直して。洋燈を明るくして、火鉢に炭つきをへる。

『艶さん、これ外して呉れ給へ。何だか引かつゝて外れない』
頸をさしよせなさるので、

『不器用な方ね、ほんとうに!』

立つてカラーを外して上げる。脱ぎすてた洋服みだれ箱におさめて、座にもどれば、和様は座ふとんの上に座りこんで、火のついた巻蓑でしきりに火種をついてゐらつしやる。

私は少さな急須をふつて、丁寧にお茶を醒みながら、

『和様が去年ゐらつしやいました時は、どちらのお室で御座いましたの?』

つて伺ふと

『こゝは何番かね、三十四番? あゝそれちや此室ではないね、エ、去年は春です。

四月の十日頃、春季休暇だつたから………。考えてみると夢の様だ、やつぱり學生時代はなつかしい!』

『私だつて昨年の三月までは、まだ學校へ行つてたんで御座いますもの』

川村様がこゝからお手紙下すつたのも丁度その頃であつた、同じ大學の方が同じ

旅館に泊り合せて、きつと御存じでゐられたかも知れないと思つたけれど、お問ひする勇氣はなくて、口許まで出たおん名をのみこんだ。

詩繪の食籠の蓋をとつてみると、大好物の栗羊羹………羊羹の好きな人には、私のなつかしい人が多くある。

『和様はお嫌ひ？』

つて云ふと

『羊羹ならば御飯のお菜にでも食べるよ』

『ホ、、、、、』

襟のピンぬいて、二切ほど刺して差上げる。

宿の主人が挨拶に来る、私の方へも、

『奥様はえ、當地はお始めてゐらつしやいますか。へえ、へえ、左様で、それはどうも、よくこそ』

「いゝとこね、鹽原^{しほはら}つて」

とばかり、何^{なん}と云^いつていゝのか、ほんとに困^{こま}つて了^{しま}つたわ……。

『すぐお風呂^{ふろ}にお召^めし遊^{あそ}ばしますか』と云^いつてくる。

『あゝ、ぢや一つはいつて來^こやう、艶^{つや}さん』

『一緒^{ししょ}にですか』

つて云^いふと笑^{わら}ひながら

『それやどうでも。しかし艶^{つや}さんのはいつてる時^{とき}、他^{ほか}の人^{ひと}が行^いつたつて知^しりませんよ』

『あらイヤだ、ぢやお待ち遊^{あそ}ばして頂^{ちやうだい}戴^{だい}よ』

紋織^{もんおり}鹽瀬^{しほせ}の被布^{ひふ}ぬぎ捨て、伊達^{だて}卷姿^{まきすがた}のまゝ、

『和^わさま、こゝの温泉^{おんせん}は白粉^{おしろい}や石鹼^{せきけん}よう御座^{ござ}いますの』

『えゝかまひません、早^{はや}くいらしやい』

と大きなどてら着てふところ手なすつた影法師。

『こちらが空いて居ります』

つて云ひながら女中が戸を開けた、天井にさびしくランプが輝いてゐて、立ちまよふ湯氣はもや／＼と二人をつゝんだ。

長湯にのぼせて、はてつた頬をおさへながら室へもどると、お膳の用意は悉皆しである。お給仕はいゝからと云つて退げさした。

鮎の鹽焼、松茸の三杯酢、椎茸と玉子のお汁なんかであつたけれど、お腹が空いてたので美味かつた、和様がつけ合せのジャガ芋きんとんを、大根おろしとましかへて、どぶろお醤油かけて了はれた。

椽に出ると、うつくしい月、月下にきそひはやる霽川の水勢！

少し寒いけれど散歩しないかと仰有るので、袖かき合せながら町を歩いてみる。丁度獨逸協會の生徒がたくさん来てゐたので、長いマント着た背の高い生徒達が、

三々伍々と語り合ひつゝ、挽物細工の店なども賑はふてゐた。何處からか、ゆるいペ
ースを入れたハーモニカの音がたいよふて来る。

* * * * *

私達もエハガキを三十枚ほど買ふ。

宿へ歸つたら九時過ぎであつた。一閑張の卓に二人顔をさしよせて、ペンを走ら
せる。

和様はまたゝくまに十五六枚書いてお了ひなすつた。番頭がいろんなスタンプも
つて來たので、私は片つばしからボン／＼おしてゆく。

「さア、もうよしにしやう、艶さんは何を書いたのかい、ドラ一寸拜見」

「私、いやよ、いやよ、いやー」

うばはうとなさる御手を、くいつて發作のやうにビリ／＼ビリとかみさいて了つ
た。あなやと驚かるゝをながしめにかけて、

いゝ事よ、『あした、箒川に流して丁ふわ』

つて云ふと、

『ほんとと病的、いや狂的だね、誰へどんな事を書いたのです』

裂かれて片々をつぎ合せて讀まうとなさる。

疊にころげた萬年筆を拾ひ上げて、

『忘れ得ぬ昔の戀の、

美しき筋にこそあれ。

ゆくりなくけふ、けふ、こゝに……

玉かつら絶えぬゆかりの、

なつかしく身にも泌むかな』

『もう寢ませうね、和さま』

『あゝ』

と身をそらしてベルをおす。

金紗縮緬を二枚重ねたれば、裾さばきも重たき上着を脱ぎ捨て、裳引く友禪繪子の長襦袢、灯火を恥ぢて袖打ちかざしつ。

「和さま、和さま、これでやすみませうか。お芝居のやうでせう。美麗ね」と云へば、

「左様だね、猿芝居のやうだ。赤い着物で……」

だつて随分な方!!

さあ——と溪流の音、まるで大雨のふつてるやうにもきこえる。

「さびしいわね、和さま、となりの室はまつくらね、今夜は帚川の水音が耳について寝られますまい」

「もうホームシックがおこつたのかい、歸りたければ一人でお歸り!」
眠さうな聲して頭をかへて、あつちむいてお了ひなさる。

少し細めにして洋燈を枕に近う引よせて、布團の上にノートをひろげた。ふちにぬつた金泥が指につく。

×

望原の一夜は瀬の音に明けぬ、ふるへながらスリツバ引ずつて浴室へ行く。和様はもう洗面場で楊子をふくんでゐらつしやる。

『あら、どうしやう』

『何です』

『私、楊子を忘れて來て了つて……』

『これでよければおつかひなさい』

つて御自分のを、ライオンはみがきの大袋にそへてお出しなさる。

『さうねえ』

ためらつたけれど、思ひ切つて拜借した。

うがひ茶碗にくんだ水を一口含めば、清冽水をとかしたやう。ぞつと心からちり毛だつて齒の根にしみわたる。

和さまと わかれ／＼の湯どのへはいる。

弱々しい日光が玻璃ごしにさしこんでしづかに湯氣の立ちのぼるばかり、流しもまたかわいてゐた、寒さに粟だつた身をしづめると、氣持よくざーアと湯漕をあふれるおと。

きのふ五里の山路を夕風に吹かれたせいもあらうか、ふだん薄過る顔の皮が、つツばるやうな氣がしてたまらない、目の下なんかビリ／＼する。いくら念入りに化粧したつて、ちつとも白粉がのびないんですもの。温泉をなめてみても無味無臭きれいに透きとはつて居るんだけれど、水道の水で産湯をつかつた肌には合はないんだわ。

袂の先を一寸くもへて、手拭すぎ出してると、からり戸を開けた方があつた。

「あゝ失禮を……」

「かまひませんのよ、おはいり遊ばせ」

「御免下さい」

しとやかに一禮して緋博多の細帶をとき始める。

長い襟足をうつむけて、かゝり湯を浴びる姿、十八？九とはなるまい。やゝ前髪をつめて束髪、細面の鼻筋の通つた、眉の濃い恐ろしく口許の締つた女だ。横むきに、その真白いふくつりと大きくふくらんだ丸い乳房。乳頭がばつちり薄赤う、肉置ゆたかな肩から胸から、紅さしたマーブルのやうで、片膝立てゝむつちりした臍のあたりの美しさ、女ながらもみとれて了つた。骨つばい、そして螺羸蜂のやうな私には、肉體の美は得られない。母様もそればかり氣にしてゐらしたが、乙女の春をとう／＼肥らずに終つて了つた。蟪蛄と云ふのは私にもつともふさはしい異名

である。

床の間の鏡臺を下しながら

『和さま、髪を結びますから、御覽になつてちや厭、私猫が傍にゐたつてうまく出来ないんですもの』

『ではすむまで椽に出て居るからいゝでせう』

『きつとで御座いますよ』

と念をおして、はたと障子を閉めて了つた。

『前田夫人、第二世』

と評判な私の髪結び方、何もあの方のお真似と云ふわけでも何でもないんだけれど、皆様がさう有仰る、今更のやうに鏡に見入つて……。

つかむに餘る黒髪も、この頃の減り方と云つたら心細いほどで、どうしてこんなに脱げるんでせう、病みもせぬのに……。

櫛の齒にからむだ抜毛をぬきとりながら、

『お待遠様、すみませんでしたわね』

と立ち出づれば

『あゝ寒い、く、出来たのですか。其方むいて御らん。女つて厄介なものだね

エ』

つて有仰るから、

『どうせさうよ。泣き蟲で甘つたれで、わからすやで、そして……』

丸めたぬけ毛と、ボンと投ると、地には落ちずにもみちの枝に引かゝつた。

『さゝもうおはいり遊ばせよ、堪忍して頂戴、ね、ねエ』

兩手を重ねてつとおん肩に――。

昨夜白菊と思つた花瓶の花は黄菊であつたので、一輪つまんで髪にさす。

朝御飯の時、嫌ひなあたり芋があつたけれど、和さまが平氣で召し上るので、私

も目をつぶつて食べる。主人や番頭が朝の挨拶に來る。鹽の湯の方に行つてみるからと云ふと、ちやお履物は何に致しませうと云ふ。草履だからあのまゝでいゝではないの。いゝえどうしてあんな結構なゴム裏なんぞは、すぐ、ズタ／＼に切れてしまふと云ふ。

出かけに母様へ手紙を一本書いて、筆をなめた唇眞黒にしたのを、知らずにハシケチで口のまほりをこすつたら、顔中墨だらけ。和さまに笑はれて泣きたいほどに興ざめる。

×

天よく晴れて風もなし。欄によつて、伏せば霽川の淙々玉の如く、仰げば峨々たる満山の紅楓、まばゆいばかり朝日に輝く。

しづかに／＼白い雲が南へうごいて……。

きのふ枝にかゝつた落ち髪は、ゆふべの風にゆくゑも知らず。

今日は和様をすゝめてくすゝめぬいて、やつと天狗岩へ引っぱり出した。落ちつきはらつて、純銀製巻簀入に新しい敷島を移しながら

『しやうのない花嫁さんだな、ストームのキャブテンよりネイ猛だ！』
ですッて。

丁度いゝおつれの方があると云ふので、しばらく玄關で待つてると、出てゐらした紺飛白の羽織と着物召して、ズボン下のだぶくした學生風の若い方、犬ころしのやうな太いくステツキ下げて……。

お供の番頭は赤い鼻緒の麻裏草履を櫻紐で後がけにしてくれながら、お洋傘はよしてこれをお持ち遊ばせて、ステツキを澤山出して来てくれた。いゝえこんなもの澤山よと云ふのに、あまり小さな聲だったものだから、聞えなかつたとみえて和様がその中で一番細いのを取つて下すつたので、イヤとも云はれず仕方なくそれを持

つてゆくことにきめる。

一寸足袋の間に小石のはいつたのをとりのけて居る間に、二間ほど後れて了ふ。何だか町の人が手をやすめて、みんなこつちをみてゐるやう。

『おい／＼若山ぢやないか』

本意に升屋の表二階から聲が降る。

驚いてふり仰ぐと、黒木綿の紋附羽織着た、髭ダルマみたいな人が。

『ヤア！』

『どうした』

つて室内へはいつて、ミシ／＼梯子を下りて来るらしいので、

『僕は一寸失敬する、艶さん、先へ行つてくれ給へ。番頭、奥さんをたのんだぞ』

『先へまゐりませう』

私は初めて口をきく。先方でも初めて私に目をうつしながら、

「お一人ではおさびしいですね」

「え、一人ですつて？」

「ピンがぬけます」

つてそつと後からさしこんで下さる。

行途の半空をさへぎつて、凄じう突立つた天狗岩、數百仞の絶壁、白雲をめぐらし、青松とところ／＼に地を攫んで、見上ぐる眼もくらむばかり。あゝあの絶頂へぼるのかと思ふとうれしくてたまらない。

「こゝで少しお待ちして居ませう」

つて有仰るので、

「いゝえ、おかまひなく——、お邪魔でも私つれてつて下さいまし。兄はもう二度目なんですから、上らなくなつていゝんで御座いますわ」

適當な代名詞がなかつたので、口から出まかせに兄と云つてのけた。自分ながら

ハツとしたけれど。

『さうですか、ちや僕が後を承はりませう』

つて——かりにK様と名づけておかう。

『ゆつくりいらつしやい、滑ると危ないですよ』

『お氣をつけなすつて——なアに、そんなに峻しい場所もないんですが、これでもなか——奥様には……』

と番頭は先に立つて登り始める。

蛇のやうな小路は朽葉に厚くうづもれて、日光冥く、灌木密茂し、足にからまる熊笹、千草。ざわ／＼と木の葉を渡る微妙な風の音、栗のいがやどんぐりが澤山落ちてゐるので拾つて袂に入れる。

『少し、待つて、頂戴な……やす、みませうよ、あゝ！』

四五町も進むと、もう我慢にも息が切れて／＼、その木の根に縋りついて了つ

た。右も左もさつたてたやうな崖と壁、はるかの下から審川の水音がひびく。

「水が飲みたい」

と云ふと、

「弱つたなア、苦しいですか、えゝ引返しませう」

「いゝえ、さうでも、ないけれど。ヨラ、この動悸ね」

無理におん手を引よせて胸にあてる。

「ひどく躍るでせう。ね。まるで馬が馳ける様だわ」

「清心丹を上げませうか、歩けますか、え、大丈夫、おぶつて上げませうか」

K様はもうあはてゝ了つて、懷中から人魚のついた袋を出して、私の手のひらへあげて下さる、指の間をもれて金珠銀珠きら／＼と地面に輝きこぼれる。

傍の石に腰うちかけて、K様が四本目の莢にマツチをすられた時、ふらつく足をふみしめて立ち上つた。ほつと一息大きくついて、

「さア、参りませう。ね、もういゝのよ！」

袖にまみれた朽葉のちりをはらふ。

「大丈夫ですか、ほんとに。後でまた肋膜でも悪くしたなんて云はれると大變です」

『あら、そんなこと』

ハツとどぎもをぬかれた様で、下を向いて了ふ。誰やらが、肺病美人だつて？ 私
はくやしい。これでも學校時代には、運動部の幹事にあげられた事さへあつたもの
を……

古松、老杉、幾千年の蔦柱、羊腸の小逕、小さい心臓はトツ／＼と割れるやうに、
湧き返る。冷たい汗を流し／＼、口も利けぬ。たゞひた攀りに登つた。

冷やかな山嵐に面を吹かせて、天邊にすくと立つた時、頬に紅のみなざるのを
おぼえた。やはらかな秋の日光が心地よく三人を照らして、名も知らぬ小鳥の聲が
かすかに……

四山爛灼^{ざんらくしやく}としてところ／＼に常磐樹^{とこはず}の美^{うつく}しさ。箒川^{ほうがは}の流れは銀と輝^{かがや}き、眼下^{した}を行くガタ馬車^{ばしゃ}が、丁度^{ちやうど}おもちやの汽車^{きしや}ぐらゐにみえる。

「あれが和泉屋^{いづみや}で御座^{ござ}います」
と指さゝれても箱庭^{はこには}の家のやう。

オペラグラスを手^てにとれば、三階^{がい}の此方向^{こうちか}きの廊下^{ろうか}に二三^{さん}人の人^{ひと}が立^たつてゐる。
私達^{わたたち}がわかるかしらん。

『御覽遊^{ごらんあそ}ばせ』

とK様^{ケイさま}にお渡^{わた}しする。

そこらに澤山^{たくさん}名刺^{めいし}が落ちてあるので、一つ／＼拾^{ひろ}ひ上げて讀^よんでみる。一人^{ひとり}も知^しつてる方^{かた}のはなかつた。K様^{ケイさま}も思^{おも}ひ出^だしたやうに名刺^{めいし}出^だして下^{くだ}すつたので、私^{わたし}のも小形^{こがた}のに、和様^{かさま}のお名書^{なな}きそへて差^さ上げる。早稲田^{わせだ}の商科生^{しやうくわせい}でゐらつしやるとか。

「貴君^{あなた}のお年^{とし}あてゝみませうか、お廿二^{にじふに}？」

つて云ふと、

どうしてわかります。そんなら僕も當てみませうか、神山さんは二十七でせう。

艶子さんは十九でせう」

「あら、誰かにお聞き遊ばして……」

「誰にきくものですか。またピンが落ちますよ」

とそつと髪にとまつた木の葉をとつて下さると、リボンがお袖にふれてさや／＼云ふ。風の音かとびつくらした。

あまり崖のはしの方へ出て、袂の振をつかまれる。

「だつて私、天狗岩の上から野立石を見下してみたくつて、それで／＼此處へ立つたんですわ。ね、ね、どれが野立石？」

『野立石は丁度この天狗岩の下になつてますから、ここからは見えません。奥様、御危なう御座います』

落葉につるりと草履がすべつて、よろめいたはずみに蹴落した石くれが、ころころかさ／＼と下の方までころががつて行く音がするので、面白くつて幾つもの投つてみる。

記念のために私の紅いハンカチを、松の枝に結びつけて貰つた。

このあたりは生えしげつた躑躅や山吹が一入多い。春はさこそと思はれる、野州躑躅の紅葉したのは、楓にもましてはらしく美しく、丁度手近に薄紅のそれはそれは可愛らしいのがあつたので、青苔の上に膝をついて、一生懸命根本からねち切らうとすると、急にもさ／＼と紅葉の木が動き出したと思つたも道理、K様と番頭とが一間もあるやうな枝を引かついで來た。

『あぶまア、亂暴ねえ、どうするの』

『歸つて室へさしませう。貴女にも半分上げますよ』

『私ね、こら、いま此様に手をすりむいて了つて』

『僕に有仰れば取つて上げたのに……』

焦れつたいほど優しい方とおもふ。下りには私が先へ立つて三十分もかゝらずに麓へ出て了つた。

もうこんな物いらなと思つて無暗とステッキ振つたら、ビシリと二つに折れて了つた。

『あら！』

『これは驚いた、獐猛ですねえ』

さうすると面白い番頭で、

『こんな事は滅多に御座いませぬ。あまり何ですから鹽原十六名所にもう一つ加へまして、奥様が杖掛の松と致します』

つて道傍の松の枝に曲つたところを引かけた、全く馬鹿にしてゐるわ！

K様が草の中から野菊の花をみつけて出して下すつたので、ついでにさして頂戴

と髪さしよせると、ビンぬいて、はさんで下さる。毛がつれて痛かつたけれど有がたうと云つておいた。露と泥とににじんだ紅緒、白足袋をしょいによごして……。

×

書齋をすますとK様が遊びにゐらした。

『あら、今お迎ひに上らうかと思つてましたこと、氣が利いてゐらつしやるわねえ。さ、どうぞ』

『先刻は失敬しました、お邪魔ぢやないですか』

ひよつこりとなさるお叩頭が可笑しくて！

『艶子様、先刻僕の室へ来て下すつたのぢやないですか』

『あら、どうして』

『ハテナ、それぢや誰だつたらう』

『ホ、私ね、二階と三階とまちがへて、他の室をがらり開けて了ひましたのよ。びつくりしたの何のつて、失禮、つて大いそぎで逃げて來ましたわ』

『僕はあわてゝ出てみると、もう誰も見えなかつたんですもの』

『そゝつかしい奥さんだねエ』

嫌！和さまはお弄かひ遊ばすんですもの。

お茶をいれながら、

『これいゝでせう』

と袂をあげて見せる、被布の裏の白紋綸子に、ある色あざやかなスタンプの紅葉

散らし。

『奇抜なことをやつつたものですねえ』

つてこれから三人の親しみの絲口が開けて、和様つてば。

『この人はね君、もう天狗岩、／＼天狗岩、で僕はすつかりあてられちやつた。流

石は冒險世界の愛讀者だけあつて君、天狗岩の頂上に立つて飽くまで、煙嵐の氣を吞吐したいと云ふんだから』

『天狗、く天狗、テ、ンのグウ!』

つてお二人して大笑ひ。

『實際先刻は驚いたですよ。艶子様の顔の色と云つたらありませんでしたよ。あゝ止せばよかつたと思ひました。大切なあづかり物に、それこそ指一本でもいためたせたら申譯がないですもの』

『何に、そうしたら代りを貰ふからいゝんです』

『艶子様の代りと云つたらむづかしい……あゝさうく、妙雲寺に高尾の木像がある……』

『いゝわ、どうせ私木像よ』

あつち向いて了ふ。

明日は御一緒に番頭を一人つれて、お握飯をぶら下げて、瀧めぐりをするお約束がきまつた。先刻の番頭が、

『絶景の佳いところで……』

と云つたのを思ひ出すとぶつとふき出して丁ふ。

『艶子様、瀧の湯へお出でしたか』

『はア、須巻ね、まわりましたのよ。あすこのお團子はしやれて、美味しいのね』

『源三窟へいらしたですか、あすこにもお團子がありますよ』

『源三窟へ行きました時にはね、私茶店で着物を借りて、あの窟の中まではいつてみたいと云ひ出しましたね、叱られて了つたんですもの。それから八幡様の逆さ杉には驚いて了ひましたわ、この頃の枝はみんな普通に上向いて居るところが不思議ですね。我家の庭にだつて逆さ松もあれば、逆さ梅もあるのよ』

『だから七不思議歩きのお供なんか御免だつて云ふのに。艶さんが何でもみたいみ

たいと云つたんぢやないか」

『夫れ達人は大観す。』

抜山蓋世の勇あるも……』

K様は火鉢のふちと指先で調子をとりながら、小聲で城山か何か歌つてゐなさる。毎朝隣の浴室で脱線式の琵琶歌なんかうなつてるのはこの人かと思ふと可笑しくつてたまらない。

『K様きのふ、私達が鹽の湯から歸りますとき、紅葉ヶ岡の邊で、私たちの前の方をぶら／＼歩いてゐらしたでせう。あの烏打帽かぶつて、お袴はいて、マント召して……』

『え、左様です』

『私、あの時ねえ、長いマント着た人の後姿と云ふものは、まるで、その化物のやうであると云ふことをしみ／＼發見いたしましたわ』

「お口が悪いですなア」

つて苦笑ひ。

「艶子さん」

と呼んで、

「いや、奥さんと云はなければ、悪う御座んしたね」

「いゝえ、けつかうで御座いますわ」

「どうぞ神山さんも艶子さんも、僕の室へもお遊びにいらして下さい」

「エ、有がたう」

障子の外までお見送りする。

岩つばめと云ふのかしら、背の黒い腹の白い小さな鳥が、水の上を飛びまはつて
ゐる。

嵐と風一陣、落葉がひらくとして紅の蝶の舞ふやう。

『秋玲瓏の夕紅葉、山の端近くかぎりへる、血潮の色の夕日影、岡の紅葉にうつろへば、錦榮ある心地して、入相の鐘暮れて行く……』

×

『君と手を執り、さまよひゆけば、

人がみるよな、逢ふ人が……』

鴛鴦の夢濃かに、淹留こゝに五日、鹽原の秋色を探りつくし、あくまで煙嵐の氣を吞吐したれば、あかぬ名残を惜しみつゝ、明日はいよいよ歸京の途につくべく候。あはれこの好景に引るゝ、良友に別るゝよりもつらく、去らんと欲して幾度か躊躇、誠に可笑しなたとへながら、捨子する人の心もかくやと思はれて……けふも一日紅葉ヶ岡に遊びくらしした。

何かお土産を買はなければなりませんから、一緒にいらすて頂戴、とお願ひするのに、笑つてばかりゐらしやるので、とう／＼疳癪玉を破裂さして了つた。

晩御飯の時には口もきかねば、和さまは御自分の方へおハチ引よせ、御飯よそつて召し上つた、私がだまつて手を出しても渡して下さらないのですもの。

お一人でお出掛けで御座いますか、と云ひ／＼履物をそろへてくれる番頭に、

『え、邪魔だからあんな人はおいてくよ』

つてさつさと出る。

さみしくつてたまらなかつたけれど、白雲洞の方まで散歩してみた。四邊は森として、玲瓏たる月光にうつろふ清流、玉を轉ばす水聲のみ淙々と、山聳え、天高く、せまり来る夜氣と寂涼に得堪ず、逃げるやうに歩を返した。

明るい挽物細工の店に立ちよつて、いろ／＼選り散らかしてると、宿の若い者が提灯つけてやつて來た。私を迎ひにと云ふ。

「イヤね、迷子になりやしないことよ。誰がそんな事云つたの」

「でも旦那様が御心配して居なさりますで」

「どつちの旦那様がさ」

「へえ戦場の旦那が……」

だつて。

いろ／＼な物買ひこんで、

「どうも大變なお買上げで御座いましたな」

つてお世辭笑ひにむかへられながら、大いそぎで三階へ上つて室の障子を開けると、

寢ころんでゐたのが起き直つて、

「もう歸つて来ないかと思つて心配してたよ」

つて眞面目くさつて有仰るので、釣り込まれて思はず失笑して了ふ。

『御覽遊ばして頂戴ね、みんないゝでせう』

風呂敷いろ／＼其處へならべ立てれば、

『これは何です。ナニ寫眞立て？まるで位牌みたいなかつかうぢやないか。ハ、ハ、好いよ／＼、そんなに身體をゆすぶらなくつたつて！だがね、僕のなんかはさまれるのは願ひ下げにするよ。縁喜が悪いからね。そのひいだらかなおさんの手の皮みたいなのは？ 硯箱。ホウ、燭德利を買つて來たね。これは氣が利いてる』

『和さまつたら、私の買つてきたもの、一つも賞めては下らないで、そうして位牌だの、おさんの手だの、花活のことを燭德利だなんて……』

『え、花活か、これが。申談ちやありません。併しいゝさ、花をさしたきやさしとさなさい。一舉兩得だ、入用の時には燭德利にも使ふし……艶さん、火消壺と骨壺の區別がわかるかね』

『知らないわ、もう！』

「そつちのは何だい、拜見」

まるでお隣家のお祖父様が骨董でもひねくるやうな手つき遊ばしてゐらしたが、智恵くらべの寄木細工をいぢりまはして苦心慘愴。とう／＼お膝の上にぶらまけ、了つた。

そうして切角買つて來て上げた巻簾入は、

「おぼし召しだけ頂いておきませう」

て有仰るので、歸京てから「様」にも上げることにした。

「艶さんにこんなもの貰つた男は、さぞ大切にすることだらう」

つて有仰るから、

「それは昔のことですわ」

「お安くないね」

「それはさうと、あの、升屋にいらつしやる方、お出になりました？」

「山本かい、来るものですか」

「何故」

「誰だつて艶さんがかう駄々をこねたり、甘つたれするのを見せつけられちや、やり切れないからね。しかも山本は他の夫婦の仲よくしてゐるのをみると、イヤな氣もちになるのだと云ふよ」

「イヤな方、まアやさもちやさ……」

「やさもちやさか、ハ、ハ、ハ、」

聲高うお笑ひ遊ばす。

お茶を飲み、お菓子を食べながら、下らないお話してゐたけれど、何だか眠くなつてきたので、

「面倒くさいから今夜はお湯を失敬して丁ひませう。和さま、召してゐらつしやいましな」

「そんな、追ッばらはなくつたつていゝぢやないか」

「まあ、和さまは！」

こゝの宿では無暗と早く雨戸を閉めて了ふけれど、お便所に下りると、手洗ひの窓から仰きみる月のうつくしさ。雲もなき中空に玉と照りかゝやいて、月下におどる金珠銀珠。

あゝなつかしい箒川の水音を、枕にきくのも今宵かぎりよ。

×

ダリヤ日和の麗かさ。茶の間に裁板出して二時間ほど自分の長襦袢を縫ふ。障子を開けると、空は眞青に晴れて、何處からか菊の薫りが芬と匂ふ。丁度土曜日だし、こんな日に家にちつとしてゐるのも惜しいので、和さまのおかへりを待つて上野をおねだりした。

『これは驚いた、僕はもう三度目ですよ』

『だつてわたくし、文展どころではなかつたのですもの』

水色リボン蝶と結んで、飴色の髹櫛、金紗お召の薄綿入れ、初やに手傳はせてクリム色京華織の丸帶力一ぱい締める。和さまは私の好きなオーバー召して、新しい中折帽とステッキ片手に、もう玄關に出てまつてゐらつしやる。

若紫のカシミヤのコートに、裏葉柳の千草シヨールまきつけ、千代田草履の音もかろくお供する。

ちら／＼光る水、蓮の枯葉、池畔の秋も深いけれど……おろしたての足袋が塵埃で茶色にそまつて了ふ、風が冷たい。去年美音さまと歩いて、こゝの石段の上から寫真にとられたことを思ひ出す。

ずつと展覽會へはいつてみる。

大抵はすん／＼と素通り、場内は思ひの外に空いてゐた。榊原さんが池田蕉園と

なられたのは、當然の事ながら何だか可笑しいやうな氣がする。あの方いつまで高
鬚にばかり、結んでゐらつしやるおつもりだらう。束髪はお嫌ひだと有仰るし、ま
さかおばこや銀杏返しも……まア二十代の中はいゝけれど、いまにどう遊ばす
のかと他人事ながら氣になつてたまりませんでした。お丸鬚におなり遊ばしていせ
うねえ、私もやつと安心いたしましたのよ。

私、何かと思つたくらゐ、池田さんと蘭香さんの前には一番人だかりがして居ま
したわ、女と云ふものははかないのね。

大下さんの油畫の前に花輪が黒い紗のきれで結んであつたのは、悲しく心をひい
た。休憩室へはいつてお菓子とお鰯を食べる。

『ちつとも振ひませんのねエ。和さま、まだ昨年の方がよかつたわ』

『去年は誰と見に來たの』

『昨年はね、私も三度もまゐりましたのよ、書を見るよりも、お友達とあそんで歩

くのが面白かつたので……』

一度なんか糸子様が、丁度お宅へ來合せてゐらした大學生の方に、御案内して頂戴とお願ひした。えゝ行きませうと云ふので、つれて來ては下すつたが、どんなに御迷惑なのであつたらう。先に立つては振り返り／＼、女連れの足のゆるさに立ち止つて、頭や制服のお尻ばかり搔いてゐらした。あの方虱が生いてるのではないでせうかつて絲子様と失笑しちまつた。

さうしたら今年の高等文官試験及第者の中に、あの方のお名前がちやあんと出てゐたのですもの。驚いて了つたわ。それだから繼の當つた制服だつて、膏藥張のお靴だからつて、馬鹿には出來ませんわね。

『どうも日本畫は物足りなくつてたまらない、油畫の方が趣味に合つてますわ。けれど何ですのねえ』

コーヒ―をすゝり乍ら、痛快な氣焔をこゝろみたので、

『艶さん、注意現されると困るよ、岡本の二代目ぢやないか。黒汁を懐にしておけ。』

なんて冷かされました。

出口でばつたり百合様に逢つた。

『あ、お姉様！』

『まア百合さん！』

思はず突嗟の間に手を握り合つて了つた、振り仰ぐ少女の輝ける瞳よ。お納戸の袴胸高に、二尺二寸の袖長う、すらりと高く細やかな肩のあたり、たくしきに胸が一ぱいになる。

『貴女、どうしたの？ エ、しばらくでした。ちつとも家へ来て下さらないのね。學校では皆さんおかはりもなくつて？ あつさう、貴女元氣がないのね。お羽織も召さないで寒くはないの』

「私、私、お姉様にお目にかゝりたくつて、たまらないんでしたけれど、伺つたつて逢つては下さらないだらうと思つて……」

「まあイヤな方ね、今までついね、多忙しくつて御無沙汰ばかり、手紙の御返事も差上げなかつたり、悪かつたけれど、勘忍して頂だいね。もういゝんですからこれから以前のやうにちよい／＼遊びにゐらつしやい。エ、よくつて？」

「エ、」

ともう震えて、觸れなばこぼれん黒き葡萄にやどる白露。

「だつてお姉様、もう私を、やつはり私を、愛して下さるか。それもわからないんですもの」

「何を云つてらつしやるのよ、貴女、貴女こそ――」

矢庭にあの細い柔かい手を引よせてキツスしてしまつた。氣がついて、私はそつと身を引いて和さまをみると、笑ひ乍ら、

「艶さん、貴女のおメですか」

「え？」

昂憤してたので、つい學生時代の態度にかへつてたの……、

「御紹介いたしませう、上野百合子さんです、私の學校の方なの」

「よろしく、僕が神山です」

つて有仰つたのでうれしかつた。百合さんも二三歩進んで紅リボンの頭を下げる傍を通る人がみんなちろ／＼と此方へ見てゆくので、

「百合さん、お一人？ お友達と、あ、さう、ぢやね近いうちにきつといらつしやいよ。待つてゐますからね、左様なら、お氣をつけて」

雲のやうなお下髪を撫て上げて、そのまゝ右と左へ――。

動物園へ河馬を見にはいりませうか、つて和様に笑はれる。

ひらめく落葉を浴びつゝ音楽學校の前を通つて天王寺の方へ出た。大好だつたこ

のあたりの秋景色を見るにつけても、また鹽原へ行つてみたくて／＼たまらなくなつて……。

濃鳩羽の絹を張りつめたやうな空の色、神秘の森に滴々と鶉がみだれる。

母様へのお土産に、ふくらんだ手提袋をぶら下げて、家の門をはいると、湯殿の窓から淡い湯氣が白う立ちのぼつてゐた。暮れゆく公孫樹の梢がサラ／＼鳴つて、ヒラリ／＼と舞扇のやうな黄金色の落葉が空に輝く。

×

けふ母様は中村の奥さんに誘はれて、帝劇へお出かけ遊ばした。お倅がお門を出ると引ちがひに、和様がかへつてゐらつしやる。お友達と御一緒であつた、まだお立關にゐたのでかくれるまもなかつた。

『お歸り遊ばせ』

つていつもの様に帽子とお包み受取ると、手早くお靴を脱ぎ捨て、

『さあ上り給へ、遠慮はいらない、君！』

『どうぞお上り遊ばして。初や』

『艶さん、井上君ですよ、無理に引ばつて來たんです、今夜は精一ばい御馳走して下さい』

『よろしう御座います。ホ、ハ、ハ、』

これをしほに走りこむ。まア私つたら、こなひだ和様と静波様のお下宿へ伺つたとき紹介された法科の方だのに、もう忘れてたんですもの！

お書齋へお通りになつた後、茶器もつて改めて御挨拶に出る。

『井上さん、けふはあんまりお氣取遊ばしてゐらつしやいまするもので、つひ御見外れ申して丁ひましたのよ。さ、ずつと此方へおより遊ばせな。貴郎、失敬してお召替を……』

『うむ、一寸失敬する』

次の間へお立ちになつたが、すぐついて行くのも何だかへんなので、そのまゝ火鉢の灰に和さまゝと何度も書きながら、

『どうぞ御遠慮なしにあそばして、今晚は御ゆつくりね、丁度母も他出いたしましたして、寂しくつて……』

『とんだお邪魔しますね』

皮肉な笑をふくんで、ほんとにお人の悪い方、眞黒なお髪をふつさりと、少し左へよせてわけて、白いお顔に金縁眼鏡もうつりよく、羽織の襟を後へはねて、一寸居住ひ直しながら、ずーつと室中を御覧なさる。

今夜のお茶は茶碗むしと鯛のフライ。栗きんとん。あの外にハムエッグスと、アツプルサラダでもしませう。井上様は少しは飲ける口だし……食卓に純白のクロスかけて、順々に運び出す。

紫もゆる炭火の焰、晝活けたダリヤの花が電燈の光りで一入に見える。私の分も一しよにならべて、つゝましようお相伴する。

鹽原みやげのかなめ焼は、お袴つけてまかり出たが、そと取り上げてお酌する手つきのおぼつかなさ。井上様は中指にインキのしみた手で、お盃をうけながら、

『奥さん、丸髻に結びましたね、いつから？』

『まア、お目の早い方。可笑しいでせう』
つてそつと手をあげてさはつてみる。

『すつかりマダムらしくなりましたよ。先日はね、下宿のおかみが、和雄さんの令妹で、静波君と約婚の方だと云ひ出してね、静波はありもせぬ財嚢をはたかせられて……奥さんも飛んだ御迷惑だが、静波は可哀想に、天ぶら蕎麥の大振舞さ』

『まア何でせう。井上様は、御串談ばつかり——。さ、召し上つて頂戴な。ソースはこゝに御座います。貴下は淺漬が大好きでしたつけねえ』

『奥さん、何ですね、奥さんのお手料理は、三十日間の講習會仕込とはおもはれませんか、専門家もはだしですよ。併し何だ、料理の奇抜なのばかりはよはるからなア』

『ほんとに何と云ふお口なのでせう。もう御座いますよ。さう井上様、お熱いところを？ あら何ですねえ、もう引こめて？ 私、承知ない。和様、和様、ついで上げて下さい』

『これは厭制だ、僕まつたくそんなにいけないんです。和雄さんぐらゐしか飲めはしません』

『うそばかり、お顔に書いて御座います』

『鼻の頭が赤いつて云ふんでせう、それよりも奥さんは一つどうです、さ』

『あら、不調法で……』

『そんな不愛想なこと云ふものぢやありません』

徳利を引たくつて注がれて了つた。和様とさしつ、さうれつしてゐらつしやる間に、せつせときんとんを平げる。

『飯にしやう、艶さん』

『はい。あらまだお爛がついてます』

『あゝ煮立つてふきこぼれてる。不注意な奥さんだ。僕にもう飯を食べさせて下さい』

食後には先刻お隣家から頂いた枝ながら鈴なりの見事な柿と、パイナップルの鐘を切つておすゝめする。ほろ酔きげんのお兩人は、今夜の記念のためにエハガキを書いて友達に送るつて大さわぎ。

『これは和雄さんの奥さんが、樽柿を十食べて笑つてるところだ』

なんて大丸髷の、それはく妙な顔ですものを、ほんとにく情なくつて……。それからお二人はアルバム引すり出して、私の寫眞を有つたけ見てお了ひなさる。

式の一週間前に丸木で撮らせたの、これが最近のだわ。お定まりの高髷立矢の字、黒のお振袖の裾長く引いて、緋ぶさのお扇子手にもつて澄まして立つてゐる。これは實物よりすつと美人だつて、穴の開くほどみつめてゐらつしやる憎らしさに、

『これが實物ならば、早速お見合の御用に立てるんですけれど……』

『もう賣約すみでしたからねえ』

『えゝゝ、けれどお望みならば、大見切や店ざらしなんて云ふのも澤山御座いますよ』

つて大笑ひ。

和さまが、僕が藤岡の叔母さんに寫真をと云はれた時、わざ／＼中古の角帽のを渡して上げたのは、もし艶さんに見おぼえがありはしないかと思つたからで、馬鹿なまねだつたつて苦笑なざるから、一體その時分はどんなに氣取てゐらしたのだらうと可笑しくつて、笑つて了ふ。

「艶さんだつて随分納り返つてゐたではないか。僕等の仲間で口の悪いものは、お伽噺の女王つて云つてたよ……」

『艶子様』

と初やが呼ぶから立つて行くと、井上様はまじめで、

『僕は君、きのふ須田町で買たての薩摩下駄がね、線路に食ひついちやつたんだ、いくら引ばつても取れないんで、そこへ電車が來たもんだから片足はだしで逃げちまつた』

なんて云つてらつしやる。

ヴァイオリンをひけの、琴をきかせろのと有仰りながら、とう／＼お二人とも寝てお了ひなすつた。

紅絹うらの小搔巻ふはり着せかけて、戸締りを見まはりながら母様のお室へお火をいれ、お茶器をふいて揃へておく。

はら／＼と落葉が窓を打つ。

×

時雨もよひのものの悲しい晩だ。風邪でもひいたのか、寒くつてたまらないので羽織と被布の重ね着をして、水色ハンケチ頸にまきつける。

お書齋を明るくして、栗さんとんやメンチボール、お好きな品々を食卓にならべさ、待てども／＼和さまはおかへりなさらぬ。私のかまはないけれど、お待ちして下さる母様にすまないの、お先へ失禮して、お風呂をすまし、御飯も頂いて了つた。こんな事は結婚後始めてである。

シンとした、鐵瓶の湯がひとり沸々と音をたてゝゐる茶の間の火鉢にもたれて、指環を脱いたり簪めたりしながら、いろ／＼な瞑想にふける。けふM様の御結婚なさることをきいた。M様は二三日前に我家へいらした、私も一寸御座敷へ出たが、

あとで初^{はつ}やが、

『あの方はうちの旦那様のお名ばかり有^{あつ}仰^{やう}つて、お羨^{うらやま}しさうで御座^{ござ}いますよ。きつと御自分^{ごじぶん}がそんなおつもりでゐられたんぢやないでせうか』

なんて云^いふので、大聲^{おほこゑ}で叱^{しか}り飛^とばしてやつた。御自分^{ごじぶん}の御結婚^{ごけっこん}のことなんぞ、おくびにもお出^だしにならなかつたので、何^{なん}だか出^だしぬかれたやうで口惜^{くや}しい氣^きがする。

夫人^{ふくじん}はどんな方^{かた}でせう。

富田^{とみた}の政子^{まさこ}様^{さん}は、旦那様^{だんなさま}がそれは／＼氣^きむづかしくつて、何^{なに}かと云^いへば、直^すぐお手^てがあがるんですつて。夜^{よる}なんぞ九時^{じゅうじ}になつても十時^{じゅうじ}になつても、御飯^{ごはん}も食^たべずにお待^{まち}ちしてゐなければ大^{だい}へんなので、お腹^{なか}が空^すいてたまらないのを、ちつと辛抱^{しんぱう}してゐるつらさ、お母様^{かあさま}がみるにみかねて、そつとお握飯^{にぎうり}なんかこしらへてお上^あげになる事^{こと}もあるさうな。朝夕^{あさゆふ}の御送迎^{ごそうげい}もお玄關^{げんくわん}に三指^{ゆび}のうや／＼しさ、それでお酒^{さけ}を一升^{しよ}も召^めし飲^のると云^いふ、藝者^{げいしや}におなじみもあると云^いふ。

けれど仕方がないわ、政子様は年來の戀を結婚と云ふ命題のもとに解決されたのだし、私は、私は、ちつとも自分の意思でかうなつたんぢやないのだから。たとへばもし和様にいけない事でもあつたなら、母様や藤岡の叔母様の苦情をもちこんでいゝわけなのだわ。養子娘の身はつらいもの、親と良人との板ばさみになる苦しさは『不如歸』の浪さん以上だつて云ふけれど、私の家ではそんな事はありません。ほんとに私は幸福ものであると思ふ。アラ何をお笑ひなさるの。

『奥様、郵便が』

とそろり襖を開けて、初やが手紙と寫眞を持つてくる、岡山の松子様から

『まア』

と云つて早速拜見する。

坊ちゃん抱いてゐらしやる。すつと反り身に横むきで、黒のお模様のらしいのを召した七分身、お髪は束髪で……まアおやつれ遊ばしたわねえ、私と一つちがひに見

えやうが、お廿四五と云つてもいい。

可愛いお子様、二百日の記念とか、あらい矢飛白に、私のお送りした友禪縮緬の袖なし着せて……お父様をつくりよ。私、女の兒より男のお兒が好き。

『私の氣取りやふ、鼻の下の長さ、いまさらあきれ果申候』
なんていろ／＼面白くことばかり。

二年前の松子さん……學校時代から小説に筆をそめ、非難の聲を浴びせられつゝも、一方では天才とはやされて、天晴明治文壇に咲くべき名花一輪。あの松子さんが、松子さんが、何と云ふかはりやうであらう。

好きな文學もパンのためにうらねばならぬを悲しんで、我から進んで文筆を捨てしはれた。あゝ艶さま、處女の操は天帝もうばふあたはず、けれども／＼それを守り通したとして、最後に何がありませう、童貞が何の誇りでせう、と泣いて嫁がれた。爾來中隊長夫人としての活動ぶりは、花やがであるときいたけれど、感心と云は

ふか、退歩と云はふか……あの紺カシミヤの袴を裾長にはいて、よく似合ふ紫銘仙の羽織の襟をいちりながら、グラウンドの櫻の木によりかゝつて居られたサブライムな面影は、いま何處にもとめやう。お手紙にもある通り、まつたく糠味噌くさくなられたものである。お髪のお召の着方も、さもく歩兵大尉の奥様然として。電音に驚いてふりむくと、和さまが初に外套を渡しながらはいつてらつしやる。

『まアお歸り。いつの間に？』

『すまなかつた。中山の家へよつたものだから』

いつになくお酒の香がして、あらくしい息づかひ。靴下の爪先で座布団引よせて、どつかりとおすはりなさる。

火鉢のふちにそと指をかけて、

『紅茶でも差上げませうか。果物をむきませうか』

『冷水を一杯貰はう。……もう一杯。あゝ好い心地！』

ついで様に仰いで、

『可哀想なことをした!!』

つて有仰るので、

『何かで御座いますか』

『僕等の知つてゐる女がね、華嚴の瀧へ飛びこんだのです。何か新聞にも出て居たさうだが——』

『まア、女學生ですか』

『さう、女學生と云へば女學生……』

『和様のお友達?』

『いや、中山の細君の友達でね、だから知つてたのです。然し死ななくつていゝぢやないか』

『どんな事情があつたので御座いませう』

『詩的な話だよ。二三日前にね、二三人の女學生が日光へ見學旅行に行つたんだ。もう雪が降つてねえ、華嚴の瀧あたりは吹雪と紅葉が一しよに舞ひ上つて、實に壯觀をきはめたさうだよ。その中で、一人が巖頭の木の根で桃色の絹ハンケチを拾つたんださうだが……』

和様のお話はかうであつた。

一人の女があつた、〇〇女學校の卒業生、某家の家庭教師をしてゐた、年は二十か二十一、血色のよい、丸顔の愛らしい上品な女だつた。

その女が二十日ほど前、一寸家へ行つてくるとて姿をかくした。そのまゝ何處の家にも便りがない。無論故郷へもかへらない。

机のひき出しを開けてみたらば、遺書がはいつてゐた、持物なども一切整理してあつた。覺悟の上の家出と知られたか、まるで心當りもなければ、手のつけやうもない。

「ところが日光へ行つた女學生ですね、そのハンケチを抛つた人が、清子さんの友達であつたので……」

泥にまみれ、雪によごれたハンケチは、見る影もなかつたが、桃色絹に手づから白薔薇のぬひとりをほどこしたものであつた。それで華嚴へ投身したらうと大さわざになつた。

どうして死ぬ氣になつたのか、この頃からぶら／＼病氣で顔色が勝れなかつた。小供たちは、みんなが近藤先生は肺ちやんだ／＼つて云ふから、もう一緒に居るのはイヤだと云ひ出した。けれどもそんな事ぐらゐが原因となるわけもなければ、或ひは主人公に節操をやぶられたからとも、或ひは失戀の結果とも、いろいろなことを云ふけれど、何如なる秘密を胸一つにおさめてか、中山さんの奥さんとは親友であつたのに……

『いざとなると友達の信なんてものはたのむに足らないでせうか』

つて奥さんは泣いてゐらつしやるさうな。

私は俯うつむいてきいてゐたが、そつと顔かほを上げて、

「お召替めしかへあそばせな」

「いや」

と吸すさしの蓑たほこまづを不味まずさうに投なげて、

「どうも今夜こんやは頭痛づうがしてかなはん。母様かあさまに失禮しつれいする……」

「直すぐお寢やすみ遊あそばしますか？さう」

何なんだかもの足たりなくつてたまらないけれど、そのまゝお離はなれへ行いつてバタリ／＼

とお床とこをのべる。

和様かさまはネルを重かさねた糸織いとおりのドテラに、白メリンスのおみ帯おびくる／＼とまきつけ、

お布團ふとんの中から眼鏡めがね外はづしてお渡わたしなさる。それを机つくえの上にのせて、

「御機嫌ごきげんよう——」

つていつもの様に――。

茶の間へもどると、何だかもう悲しくて――ポタ――と涙が頬を流れた。我慢しやうと思へば思ふほど、後から――湧いて来て、たまらず畳に前髪をおつつけて了つた。

『初や、こゝへ床を取つておくれ。さうしてあとで母様にさう申上げといておくれね』

身をゆすぶれば、するりとひわ色の裏をかへして、更紗縮緬の被布が肩を落ちる。紫襦子の丸帯足もとにとき捨て、そのまゝ友禪の小掻巻にくるまつて仰のけにたはれて泣いて了つた。

その清子さんと云ふ女、もしか、もしか、和様を思つてゐたのではなからうか。和様が結婚遊ばしたので、それで――失望したんぢやないだらうか。かまやしない、かまやしないけれど、飲めもせぬお酒をあはらせたり、たとひ一瞬時でも和さまの

腦裏に影をさした女かとおもへば、にくい！妬ましい！死んだつてちつとも可愛想なことはありやしない。

ブル／＼慄へながら紫ビロードの襟を、額の上まで引いて、泣き寢入にいつかうト／＼して了つた。

『艶子、艶子』

とお呼びになる母様のお聲にびつくりして目がさめる。

『艶子、はいつてもいゝかね』

『恐れ入ります、母様ですか、おはいり下さいまし』

と此方へ寢返ると、半ば開けた障子に手をかけて、母様は私のはれぼったい眼を見て、笑ひたさうな顔遊ばし乍ら、

『餘り和さんに駄々をこねては不可ませんよ、どうしたの……』

『あの、和様は少しお酒を上つてゐらしたものですから』

「さうかい。今ね、藤岡の叔母様がゐらしたのよ。お目にかゝつた方がよからうと思ふが、何ならおことはりしとくけれど……」

「いゝえ、よう御座んす、起きますわ。直ぐ参りますから」

飛び起きて襟かき合せつ。柱に掛つた細長い鏡にうつせば、昨日結つたばかりの丸鬘も夜具の襟におされて……まアいゝわ、いそいそでお座敷へ行く。

叔母様、今日めづらしいお束髪で、意気な花色地の月花お召、黒縮緬のお羽織に撫肩を包んで、匂ひこぼるゝおん笑顔。

御挨拶がすむとすぐ、

「お丸鬘ね、お噂だけは伺つて居りましたけれど……」

ちいつとみつめてゐらつしやる。

鋪納戸地のぬひもやう、お品のいゝ半衿のあたり、ふつくりと濫い、紬錦のおみ帯に、少しこぼした金鎖。それはくいつ拜見しても、三越タイムスからぬけ出し

たやうなマダム振り。

香り高き玉露を一口すゝつて、

『ほんにお母様ももう御安心。和雄さんも艶子さんもお立派なおあとつぎで……何で御座いますよ。大分お二人の御評判もおよろしくつて』

『うそですよ、叔母様、若山は小糠三合も持たなかつたのかなア、養子に行つてあんな我儘な細君もつて、どうかだつて云つて居ますし、それから私はね、あの女學世界にあつた『良人を去らんとせし妻の告白』いまにあんなことでも云ひ出す人だつて……』

『まア、』

と叔母様も私の顔を御覧になつたが、

『それは仕方ありません、餘りお美しいからですよホ……、どうも羨望のあまりはきつと嫉妬、冷笑、陰口となりますのでねえ。何も今のうちですよ、和雄さん

だつて大切な／＼奥様のことですもの。ホ、少しはねえ」

「いまに幼さいのでも出來ますと、かへつてこんなのが意久地なくくすぶり返つて了ふもので……」

お二人ともホ、と笑つて私の顔を……。

『あら、そんなこと』

と云ひかけたけれど、妻となつたからには、母となるのも覺悟の上でなければと思ふと、あゝ人間は淺ましい！もう／＼私は永久に自由と純潔と乙女の誇りとを、奪はれてしまつた身である。いくら自分の氣に入つた人としても、缺點のない方とて、いざこれが自分の未來を共にする人ときまつては……云ひ知らぬ寂しさに涙も流れました。

叔每様の御相談と云ふのは、此間からお話のあつた、お故郷の方で御両親も大さうお待ちであるしやるのだから、丁度年末年始の休暇を利用して、歸省？お里がへ

りと云ふのかしら——あちらでまた披露の宴が開かれるのである。まさかもうお振袖も着られないのでせうねえ。

『もう艶子さんのことはお両親が御親類中への御自慢で和雄の嫁、和雄の嫁と有仰るので御座いますつて。お可愛くつてならないので御座いますよ、それもその筈ですわね。和雄さんは三男でゐらつしやるのですもの』

『どんなにか可愛い花嫁と思つてゐらつしやるに、こんなお轉さんを御覧になつたら、びつくりなさいますわねえ。お登美さん!』

と母様はボンと煙管をはたいて。

『お娘さんは村一番の美人だと云ふ。はづかしいこと私それまでによつてお琴でもさらつて置きませうや』

海路陸路を何百里、はるくと博多の海の浪枕、なつかしい。御両親や兄様方にお初の見参、未見の故郷! 私はい順なれとのみ心に誓ふた。膝を撫でながら、

畳の上の目をみつめてゐる。

『それや貴女、和雄さんも御紋服の方が……實際あの方が奥床しくお立派で御座いますわ、やつぱり日本人は日本服がねえ、艶子様』

うそばつかり、和さまはお洋服の方がよくよくお似合遊ばす。

『式の日ね、貴女、和雄さんは角帯がしめられないつてね、叔母さんくと私のあとばかり追ふてゐらつしやるのですよ、お衣裳つけの人達なんか、いくらもそこに居りますものを、どうしても私でなければ着せて貰はないつてもう、ほんとうにお口髭の生へた駄々つ子ちゃん、ホ、今度は艶さんのして上げる番ですよ』

まア耻しい。私は願みて他を言ふ。

『初や、お熱い紅茶でも持つておいで……』(をはり)

紅 筆

柳田さんへ（其二）

早速御返事有がたう。

まあ柳田さんは怖い方にお成りなすつたわね。私頭から叱り附けられてばかり、読み終つて情なく思ひました。恐れ入りましたよ。モウ一言も御座いません。併し柳田さん、ちと酷でせう。新ダイヤを光らすやうな浮薄なヴァニチーに胸を悪くして、頭痛を催すべければ——とは。どうせ女は虚榮のばけ物だわ。なればこそ乳姉妹の君江の様な人さへあるぢやありませんか。またなまなか脱俗でもされて、坊主臭くなられても堪らないですからね。何うして何うしてこの胸板三寸の中に疊まれた……婦人胸中の秘と云ふものは、なかなか殿方の考へて、被居しやるやうなものぢ

や御座いせん。ほほ、これや一寸雑誌の受賣よ。ですがね柳田さん、女學生が何うしたのかうであつたのつて何事です、これは餘りよ。頭へあればそれで十分ぢやありませんかつて、頭とは何の事だか知らないわ。私は女ですもの。感じやすく泣きやすい弱い女ですもの。よく新聞や雑誌などに何々女學校優等卒業生なんて同じ年紀の人の寫眞なぞ出て居るのを見てさへ、胸の血を吸はれるやうに感じます今日も海岸通りで美しい令嬢方に二三組も遇ひましたが、みんなマガレットだのお下げに結つて紋羽二重のお被布やお召の半コート、鹽瀬のお袴かなんかでぞろりぞろりと歩いて居られる。あゝ及ばぬ空想と返らぬ昔の榮華の夢を戀ふるのは、垣間見た天使の影を追ふやうなもの。が、何うしても斷念られません。柳田さん、一日でもいゝからあんな境遇に成つてあんな服裝して、本郷通りでも濶歩して見たいの遂に度すべからざるヴァニチーの結晶だと云はれでも仕方がない、否もう止しませう。頭が痛くなつて來た。柳田さんもまたこれを讀んで頭痛を催されるといよく

済すません。

花輪はなわさんは今興津いまおきつに被在あらずしやるんですつてね。お手紙てがみが参りますか。お間違まちがはしたてせう清見洞きよみどうの夕ぐれを。賞じつに詩的しできな事ばかり有あつるわねエ。三保みほの松原清見寺まつはらせいけんじ、美姫富士姫みきふじひめのお膝元ひざもとで美しい詩想しそう練り給ふ——あゝお作きくが拜見はいけん致したいこと、柳田つなぎたさんから願ねがつて頂戴ちやうだいな。ね、私が何か申上げると、一生しやうのお願ねがひなど、申されましても實際じつさい僕は困こまるんです。なんて憎にくらしいのよ。そして柳田つなぎたさんは私の事ことを吩咐いみづけてお仕舞しまひなすつたのね。それこそいろ／＼冷ひやかされて私が困こまるぢやありませんかほんとに餘計よけいな言仰ことおつしや有る！

おゝそよ／＼とよい春はるの夜風よかぜ、あゝ今夜こんやは何なんて好いい美うつくしい夜頃よころ下せう。新嫁様にひよめさまが嬌羞はじらひの色のやうな春はるの月つき、薄絹うすぎぬにつゝまれて、臙おほろに空そらに浮ういて居る。丸窓まるまどの障子しやうじに寫うつる影法師かげはし。玉たまを憂うつ蛙かはづの聲こゑ、柳田やなぎたさんはこんな宵よひがお好すき？ 私わたくしも。しかし秋あきの夜よも捨てられないわ。私はむしろ秋あきを喜よろこぶものよ。たい花はなは何どうしても櫻さくらですわね。

櫻は青野、武士は乃木？ 我家のも書がふくらみきつて居ます。モウ二三日すると咲きさうよ。あゝこの花また白雲とみだれて居た時分には……今夜はこれで失禮致します。御免遊ばせ。

卯の花月三日

千代より

松村さんへ（其一）

松村さん餘りではありませんか。其後何う遊ばしたの。そんなに御勉強でお忙しいんですか。御病氣でもして被居しやるんですか。それとも一本條の女學生にお友達でもお増に成つて、ははゝゝまさかねえ、でもほんとに少しはお恨み申して居てよ。第一お手紙も下さらず、春期休暇に何して被居しやる。私があれ程お願ひ申したのに、何うしても當地へは來て下さいませんのね。従妹さんと一緒だからつて一緒ぢや何故不可ないの。何も私がその方と喧嘩でもしはせまいし、が今更何と言つ

たつて仕方がない——夏休みにはまたお故郷へお歸り遊ばすんでせう。だから日曜に昇非一度来て頂戴よ。此頃は對江館へ澤山學生さんがお出に成るわ。私もウ大學の方のお通りなざるのを見ると、もし、松村さんもあの中にと思つて幾度胸を轟ろかすか知れませんか。昨夜も金色夜叉を読みましたらふつと去年のお正月の事が思ひ出されてなりませんでした。あゝカルタ會……あの翌日お別れしたつきりですわね。早一年半、嘸お變りなすつていせうねエ屹度角帽がよくお似合なざるわ。あの時はまだ二本線の帽子をかぶつて居らしたし、私も無心の乙女でした。毎晩あの霜牙ゆる夜道を、マントの中で手を握り合ひ乍ら、家まで送つて来て戴いて途中でよく口喧嘩を切めたのね。私高齋になんか結はせられて居ましてもほんとにお轉婆でしたから。ほらあの淺野さんをあんなに立腹して了つて……。あの方ね、また東屋に來ていらつしやるのよ。二三度見受けただけで先方ではもう見忘れてお仕舞ひなすつたやうだわ。

上野の花もいま盛りでせうね。あゝ毎日あの山をぬけてお通ひなさる、オーパコートにインキ提げたお姿が目に見えてよ。東京へ行きたいわねえ。

あれ花がちら／＼降つて来る。我家のは八重櫻、楊貴妃と云ふの。色の濃い大輪で見とれる程艶な……一たい當地は濱風があてるから櫻はめづらしいので、道行く人がみな振りかへつて行きます。わけて深い穩やかな夢のやうな夜、清く澄んだのではないけないけれど、薄すり霞むだ月が花たわなる枝にかゝる時など、實にかけねなしの一刻千金……私はいつも兩袖を胸に抱いて小松の中を散歩するのよ。考へるのは屹度松村さんのこと、東京のこと、そしてこんな時、何だか松村さんはミルクホールへでも入つて被居しやるやうな氣がしてならないの。妙なもののね。

あ、昨日由美子さんからお手紙が来てよ。貴方が事を何うなすつてつて聞いて居らしたわ。あの方いま上野の音楽學校に在學しやるの。もしかお遇ひに成つたらよろしくと有仰つて頂戴な。和さんも東京へ越してから本郷の學校にお入りになつた

と云ふし、お京さんも裁縫學校へ行つてお了ひなすつたし、あの晩の團樂の中で相變らぬのは私ばかり。でも母がね、此頃はもう肩揚げを下せ／＼つて困りますの。厭だわ、私まだ十七ですもの。

松村さん、お従妹さんで何んな方？ お茶の水きつての何だつて——あら私だつて知つてますわ。ちやんと人から承たまはつたわ。けれどお手簡頂戴ねえ。この一月と云ふものは、もう、朝起るから今日こそと楽しみ、暮れは必ず明日こそと望をかけて、毎日々々人知れずどれ程待焦れて居ましたが。とう／＼今日は何うしても我慢が出来なく成りました。これ御覽遊はしたら直ぐ御返事ね。煩さがられても好いわ。あんなに固く有仰つた事、當座の花をお持せなすつたのか知らぬけれど、田舎乙女の心利かす私はまだ一圖に信じて居りますものを。

得鳥初月八日

千代より

なつかしい

秀人様へ

△ 柳田さんへ (其二)

懐しいお手紙今朝拜見致しました。またお出掛け遊ばすの。花の吉野から京めぐりですつて、お羨しいこと。御機嫌好く行つてらつしやいまし。面白い事があつたらお知らせしますつて有がたいけれど、もう先日の様な言有仰るのなら澤山よ。私にまだに耳が痛いので、随分な方ね。人は見かけによらぬもの、それとも私等の見えないか、柳田さんばかりはあんな方ぢやないと思つて居ましてよ。それに何うなすつたの、此節のお手紙つたら些とも和らかい、あたゝかい、美しいところなんかなくなつて仕舞つて、まるで先生のお言葉でも承たまはつて居るやうですわ。あのままア。

「此月今夜江の島の酒樓をも照すであらう。片瀬の川にも宿るであらう……」

とか、

『今なほ夢中に鶴沼のまのあたりあること一再に止まらず、只さめて初めて身は南紀の村にあるを覺ゆるのみ』

なんて、嘘にもせよ優しい事有仰つたのとは、本當に別人のやう、それだけお齡おとり成すつたからだと私は申しますよ。もう私の申す事なんか馬鹿らしくつて、面倒臭いと云ふ御様子が見える。

間違つてゝ？。ほほゝゝ御免なさいよ。

二三日前思ひ掛けなく花輪さんにお目に掛つてよ、私嬉しかつたわ。が、ほんの三時間ばかりで本意ないお別れを致しました。話しは柳田さんのお噂で持ち切りさぞクシヤミを遊ばしたでせう。何しろお訪ねして見たら對江館の二階……曾て柳田さんの被居た室よ。私はこればかりでも堪へがたい懷舊の情に胸を痛くしました。共に欄に靠つて仰いだは去年仲秋の名月、いま一人筆執る窓を照すのは今宵この朧月、

誰の涙で曇つたか、花羞かしさに曇かざしたか……あゝ二百里の海山隔てた南の國で柳田さんのお眺めなさるのも矢つ張同じこのお月様なのねエ。過ぎた昔が戀しいわ。去つた以前が懐かしいわ。柳田さんまた鶴沼へもお出下さいね。『想起湘南三月晚、芙蓉夕陽共君看』の一句、まことお心から出たのならば。私ははかなくも待つて居りますから。

もう學問も入らないの、名もいらない。花に泣き月に悲しみ、遠く別れた君を慕ふて所詮……所詮此地の土となるべき運命なんぞでせう、私は。けれど……また叱るなら叱られてもいいわ。あまり精神的な生涯に傾かぬやう。何事も母の意見に従順なれと案じて下さるのは身にしてみても嬉しいですけれど、私泣かすには居られませんか。年毎に春は近く、花は散る、とり残されるのは私等母子、かくて我が世の春もいつか過ぎて仕舞のかと思つて……。でも斷念めますわ。どうせ私のやうに氣の弱い者は、烈しい東京などへ参りましたらとても生きては居られないでせう。決して行き

たいの出たいのとは申しませんから、またお手紙下さいよ。京都からも早く歸つて来て頂戴ね。

卯月十一日

千代より

△ 松村さんへ（其二）

まあ丁度二月ぶりよ、絶へて久しい御文を今日……。けれどやつぱり以前の松村さんだつたわ。私はもう嬉しくて安心して、思はず十餘頁の跡を四月二十日の日記に残しました。あれは朝の便ね九時過ぎ……。私は團子をこしらへて居りましたの。あら笑つちやアいや。これでも此頃はよく母のお手傳ひ致すんですもの。そしたら『郵便ツ』と怒鳴られて駈け出るはづみに井を覆くら返しながら、夢中に粉だらけの手でお手紙取り上げたまゝ室へ走り込んで了ひました。封じこめられた堇の花！あゝ松村さん、貴方はんにお墓まいりして居て下さるの。嬉しいわ、私嬉しくつ

泣いてよ。近くに居る親類の者さへよう詣つてはくれぬのに、松村さんが父のお墓へまゐつて下すつたつて……夢の様だわ。もの私等はこんな僻地に引込んで了つて三年も上京ませんのですからそればかり氣になつて居たのよ。その臺石に咲いて居た堇ですつて。可愛いねエ、私叮嚀にお佛壇へ捧げました。あゝ立のぼる線香の煙りさへ行方は都のへなびくの何うして私が……松村さんあんまり察しのない事有仰る。花なき里に住みやならへるつて春霞立つを見捨て行く雁ならこんな思ひは致しませんけれど、思ひ入つて捨てた浮世ではなし云はれなくとも東京は戀しい。まして我が初聲あげた故郷ですもの。たい私には母がある……あの母が……あゝまた眉刷毛とつて白扮をぬつてくれたり、千代には袴が縫へるつて他愛なく喜こんで居る母を見ましては、私氣が弱いよ、ついに一度口にした事も色に出した事もありません。さりとて何うしても思切れず青春十七、いたづらに高鳴る胸を……。

けれど松村さん、辛いつて口惜しいつてまだ……此様事申して居られる中が私に

は花なのよ。人並超へて延びた背丈をまで、母はもつと／＼引のばし度い程に思つて居ます。末を考へると情ない……の。

もウ何んな櫻もすつかり散つて仕舞ましたねえ。今朝庭掃いたら薄紅の雪がちり取りに五六杯。その代り八重山吹が目の覺るやう。七重八重花は咲けども、と云はれたこれが羨ましいわ。花も知られで實になるのは厭。お従妹さんや和さんや由美子さんはいま咲き出した花なのね。松村さん、あんなに女學生の事悪く有仰るもんぢやなくつてよ。私だつて女學生が理想だわ。だが其様にまあ廂がお嫌ひ？ 母と同じやうなことで有仰るのね。私はねえ桃割に結つてゐるの。あんな重い物年中頭へ載せて居られるものですか。あれはお正月ばかりなのよ。第一人に見られるわ。さう云へばこの前の日曜に海岸で横濱〇〇會社の大運動會があつてね、それはなか／＼振つたものだつたの。私もそつと覗きに行つて見ましたらね、近所の娘さん達がみんな模擬店の給仕女に出て居りました。その時松村さんも御存じの——ほら評判の

お優ちやんね、蝶螺の壺焼屋でしたが、艶な高島田に羽二重の帯なんか締めて、お揃ひの赤い太い襷で長い袂を二の腕までかゝげ、潮風に翻へる赤前だれ、こぼるゝ長襦袢。女でも見とれるやうでしたものを、妬かつたわ私。それにつけても何だかいよいよ松村さんにお目に掛り度くつてしようがないのよ。夏になつたら屹度行くつて少しあやしいものだわね。けどまあ好いわ。あ、ついお禮申後れました。リボンをやがたう。嬉しいわ。巾が廣くつて。あれ五時巾でせう。私あんな大きなのまだ手に取つた事もないんですもの。あの今度あれを掛けてね、お下げに結つて一ツ寫眞とつてお送り申し上げませう。でも弄かつてはいやよ。お従妹さんへよろしく。さよなら。

四月二十日

秀人様

千代より

△ 園村さんへ

お手紙有がたう。

絶えて久しき君が玉章！ うれしう拜見致しました。あのお手紙を受け取つた時

のこの胸は、なつかしさに高波を打ちましてヨ。

お目にかゝつたのは去年八月、あの楽しいまゝの時でございますわねえ、どんなにお變り遊したでせう。去年は未だ私も無心の處女でしたものを……。

此の頃はね、高齋に結つて居りますのよ、流行を追はぬ超然とした……なんてよく云はれますれど、平氣で居られる様になりましたわホ、ホ、ホ、お正月から肩上げもとつて了ひましたの。何だか、もうやたらに心細くつて……燃えるやうな眼紅のリボンでもバツとかけて見度うございますのよ。

十八と云へば未だ若いわ。同じ年頃の方はみんな名ある女學校に通つてゐらつし

やるのに、私獨りかうして居るのかと思ふと心細いわ。寂しいわ。

あゝ及ばぬ空想と返らぬ昔の榮華の夢を戀ゆるのは、垣間見た天使の影を追ふやうなもの。とかつて人はさゝやきましたたが此の頃は度々それを思ひ出しますの。

藤村さん、おひまがあつたらゐらして頂戴な、何だかやたらになつかしい感じがして……屹度ゐらして下さいねえ。

おゝ、こぼれるやうに星が輝いて……。寂しい宵、低いく尺八の音が、杜の方からきこえて來ます、思ひ出は泉の様に胸に湧く。

もう書けませんわ、胸が一ぱいになつて……。今夜はこれで失禮致します。御免遊ばせ。

星月夜

△湘南の人へ

東都城西にて千代より

滑なめからのお便たよりり、只今ただいま落手らくしゅいたしました。

封じ込められた梅の花!! なつかしい記憶は又しても胸に充ちてゐたまらなくなりました。

今宵はめづらしい良夜。

新嫁様が嬌羞の色のやうな春の月、薄絹につつまれて、臙に空に浮いて居る。丸窓の障子に寫る影法師、玉を憂つ蛙の聲——とおつしやつたNさまのお言葉も思ひ浮べられて……。

あゝ、〇〇樓の樓上にあなたもあの月を仰いでゐらつしやるのでせうね。

去つた昔が戀しいわ。

小田原は永久に忘れられぬ土地、行つたのはたつた二度きりですけれど、私何故か小田原はなつかしいのよ。あの砂の色、松の色!! 夕雲華やかな函嶺の峰や、夢のやうに見えた伊豆、熱海。深くく印されて未だにあのなつかしさが忘れられませ

ん。

先達て芳花さんの湯ヶ原よりをよみました時も、眞實に思ひ出しましたわ、『國府津で下りた時は日光雲間を洩れて、新緑の山も、野も、林も、眼さむるばかり輝いて來た。愉快！電車が景氣よく走り出す、函嶺諸峯は奥床しく、嚴かに、面を壓して近づいて來る！軽い、淡々しい雲が沖なる海の上を漂ふて居る。鷗が飛ぶ。浪が碎ける。そら雲が日を隠した、薄い影が野の上を、海の上を這ふ、忽ち又明るくなる。此時僕は決して自分を不幸の男とは思はなかつた』

此の一節は幾度もよみ返しましたわ。去年は全くこんな感じがいたしましてよ。私ももうすぐ參ります、けれど私の行く頃にあなたは御上京遊ばすんぢやなくつて！！

小田原にも飽きたくつておつしやるけれど、やつぱりお好きだと見えますのねえ。だつてゐにしつてからもう一月あまり、今度は割合お長いではございませんか

花なき里に住みやならへるつていつか私におつしやつたけれど、ホ、ホ、それはどなたの事ですか……。

ですがネ若杉さん。もうしばらく辛抱してそちらにゐらつしやいな、屹度参りますのすもの。御病氣がおなほり遊したからつて小田原をお見捨てになるのはあんまりよホ、ホ、ホ、。

小蜂の梅林!! 今頃はさぞ美しいでございませうねえ、例の御連中で度々御出かけになるんでせう。

あの東宮さんや三好さん、先日南總の方へ御出かけになりましたのね、お便りが参りましてよ。相變らず美しいペンの走り書き、よんで居て地心が好うございすわね。

去年八月の湘南は大分皆様に痛烈な印象を與へたと見えますわ。月明らかなりし彼の夜の様を夢見ては——なんて篤磨様まで書いておよこしになる程ですもの。

君杉さん！

今年の春はどちらへかゐらつしやるの？ 皆様して旅にばかりお立ちになつて、眞實に寂しうございますのよ。私獨りいつも都の月を仰いで……。

夏には又、思出多いあの濱で寮歌でも歌ひ度うございますけれど。
なつかしい落から、どうぞお便りを下さいねえ！ さらば君おん身御いとひ遊して。

二十三日夜

千

代

△旅の人へ

藤村さん！！ 昨夜は長い長い夢を見ましてよ。床を離れるとすぐ、なつかしいお便りに接しました。

うれしくて、しばらくは封も開かず眺め入りました。あゝ、けれど、けれど

よみ終つた時の私は、たへられないでとう／＼泣きましてよ。

行方定めぬ漂泊の身なれば……

又洛陽へゐらつしやいましたの!? 一言さうとお教へ下されば、せめて新橋まで

なりとお見送り致しましたものを、あゝ又當分はお目にかゝれませんかえ……。

早く歸つて頂戴な。

流れは空し法皇の、夢香かなる鴨の水、水にうつろう山城の、みやびの都ゆく春のかすめる姿見つくして……。

今宵西六條の街に、旅のつかれを休めてゐらつしやるのでせうか。

松の翠に細雨濺ぐ東山の朝、鴨川の流れに燈影ゆらめく四條五條の夕べ、あゝ私も、行つて泣き度い!!

春去り行かば青によし奈良の都にたづね入り……。

櫻散る春の夕べ南の縁に佇んではよく二人で歌ひましたわねえ。なつかしいあの

お聲は未だ耳に残つて居りますのに……。

三井寺の鐘の響に胸をどらせて、書筆手にした儘ちいつと行く雲見送つてゐらつしやるお姿があゝ明白と目に浮ぶ。

お目にかゝり度いわ、篤磨様！

くどい様だけれども全く早く歸つて頂戴な。

筆が亂れてもう書けません。

行方定めぬ漂泊の人よ、御身お大切に遊ばしませ。

さらば。

△湘南小田原の人へ（其二）

なつかしい若杉さん！

相變らず御丈夫でゐらしつて？！此の四五日大變お寒うございますのね。

いよ／＼明日小田原へ行く事に致しましたの、早くお目にかゝり度いわ……。

先達ね、私久子さんと二人で青山へ参りましたのよ、あの浪さんのお墓へおまゐりましてよ、

このしきみの葉は浪さんのお墓の垣のよ、お送り致しますからどうぞ大切にすつて下さいねえ。

浪さんのお墓も寂しうございましたわ。

浪さんと云へば、先日本郷座でありましたわ、私行きたくつて／＼ならなかつたの、けれど誰も家に居ないのですから駄目になつて了ひましたのよ口惜しかつたわ。せめてあの逗子海岸不動堂の所だけでも見たかつたんだんけれど……。あゝこんな事云ふと又誰様かにおしかりを受ける!! よしませうホ、ハ、ハ、ハ。

けれどねえ、私どうしても浪さんは好きよ!! 若杉さん。

此の間ね、向が陵の方まで行きましたのヨ。夕日うすづくたそがれ時でした。あの森川町から例の所へ出て高等學校と大學のあの間の路をあるき乍ら……色々の事

が胸に湧いてなつかしかつたわ。

あゝあなたも去年まではあの通りをおかよひなすつたのねえ……。

マントの襟をキュツと上へたてゝ、あの角帽に、インク下げてゐらしつたお姿！

あゝ、そゝり立つ向が陵の自治の城！！

あの帝大と一高とを眺め乍ら、自然と熱い涙が浮びました。

東宮さん、三好さん、藤村さん、大内さん、秀様、川島さん、みんな此察にゐら

しつたのかと思ふとなつかしさに胸は亂れて……。

實に昔は物を思はざりけり。相見てのけふの心の千々に亂るゝ！！

あゝ秀鷹様の御妹様ね、お片付き遊すんですつて、おきゝになつて？ 先方は何で

も海軍の青年士官、旗艦薩摩に乗つてゐらつしやる方だそうね、お望みどほりの海

軍士官、幸様のお心はどんなでせう。委しい事は明日お目にかゝつてから……。

御免遊はせ。

なつかしいく
 輝^{てる}明^{あき}さま
 御許に

千^ち
 代^{だい}
 子

若き日の戯れ

五月五日は土曜であつた。十日ばかり以前先生から御招待のお手紙頂いた、秀秋さんのお誕生日は今日である。裁縫退つてもう二月、餘り御無沙汰して居るから丁度お手傳ひがてら早めに參上らうと、朝飯後髪をなほして直ぐ家を出た。

花茨こぼるゝ半里の畑道、地藏堂の前で思掛なくお京さんと出逢たが顔見合すやまア貴女も……オホ出し抜かれちやつたわ。アラ何方が？ と直ぐ脊を打合つて笑ふ。薄化粧の襟元匂やかに、前髪の幅なやゝ下髪の粹な銀杏返し、結立の光澤美しくネルの單衣を裾長に着て、桔梗色の洋傘かついだ様は流石村一美人の顔ひ附き度い様な好い恰好。また裕を着て居る私なんかの意氣地なさつたらない。ア、せめて帯だけでも縮緬の方締めて來ればよかつたつけ……、まアよくお早くねえと先生は大變お喜びに成つた。今日はお客と云つても貴女方つきりなのです、久し振だし

ゆつくり遊んで行つて頂かうと思ひましてね。土曜日ですから秀秋も早く歸りま
まアお晝飯には何にもありませんけれど、御一緒に赤の御飯を……など、下へも置
かすして下さるので、是非お手傳ひもさせて頂戴と、用意の白前掛甲斐なくしく
面白半分二人共臺所へ立出た。すると先生笑ひ乍ら、ぢやこれを剝いて黄味と白
味を別々に分けて下さいと、水に入れてあつたゆで玉子を十四五取り出される。相
當なお役目だ、きそひ合つてむき初めると丁度魚屋が御注文の鯛を持つて來た。目
の下一尺ばかり、今朝曳上げた高網で此様の七十枚もとれたと云ふ。一寸鉢巻ね
じつて直ぐ料理に取り掛つたが、颯と洗つて俎板にのせたと見るや、たちまち霜を
吹く出刃にふれて、その銀鱗はバラ／＼バラ時知らぬ落花と打ち散る。

私等はしばらく手をやめて見て居たら、先生はやがて光る銀貨と共に皿を差出
して切身を受取り乍ら、うしほと鹽焼にするやうに、と鹽をふらせて、
『こんなのねエ、お刺身にするといふんですけれど、秀秋が鯛のお刺身をあまり好

かないんですよ。その代りお兩人に今日は大變な物を御馳走しますよ。豚のおさしみ……」

お京さんは吃驚して、アラまあ嘘ばかり！。

それから玉子に味を附けられる。白味には鹽を利かせて黄味には砂糖を利かせるのださうで、お京さん早速手帳取出し書止める。そして美濃紙を味醂でぬらして、蒸し箱の底から四方へ敷き、その中へ前の玉子を白味からさきへ裏漉で漉しながら入れるので、これはお京さんが引受けると云ふものだから、私には餡この煮かたを仰せつけられた。まあ先生いつの間に餡など漉してお置きに成つたのだらう。秀秋さんもほんとに可笑しいわ、男子の癖にお汁粉が大好きだなんて。併し食べくらなら私も負けない、など、意地のきたない事考へ乍ら一生懸命にかき廻して居ると初めの中はよかつたがだん／＼熱くなつて來て少しでも手を休めるとビチ／＼はねてやけどする。やう／＼ブス／＼煮え立つてかたまり掛けた時分には此方の腕が抜

けさうになつたが、我慢してなほ手を休めず、もうよう御座いませうか、と伺ふとあい、でせう、甘う御座んすかと聞かれたには困つた。まさか我家でやるやうに指の先で、一寸お加減見る事も出来やしましいね。

お京さんの係りの方も黄味もすつかり漉せたので、味噌を箸のさきへつけて平らにならし、今度は蒸籠に入れて十五分間程蒸す。これで二色玉子が出来上つたので少し冷してから箱から抜き、程よい厚さに切られたが眼のさめるやうに美しい。

それを見て居てふと思出し、

『先生、私の従姉に本郷で下宿屋をしてるのがあるんですよ。そして玉子……掻き玉子のを汁ね、三ツあれば二十人前出来るつて申しますの、眞實でせうか。』

『え、三ツで二十人前ですつて。まあ何うして？ 美江さん嘘でせう。先生』

『左様ですねえ、私にも五ツあれば出来ますから……なれた方は三ツでも出来るかも知れませんか』

『まア徳用だわねエ、何うしてこしらへるの、美江さん云つて頂戴よお願いだからさ』

『まあ何でもよくきゝ度がる人だつたら!』

『お京さんそれはね、鯉節の汁養をね、味噌とお醤油で味を付けてそれが養立つたときぐつ時葛を水で溶いて入れるの、そしてよくといいた玉子をその養立つた中へぐるぐる廻しながら入れて直ぐ火から卸すんですけど、普通玉子は一人前半分ぐらひの割がいゝんですとさ、ねえ先生』

『えゝ左様ですよ』

私が餘り早口で云つたので先生は笑つて被居る。

豚のお刺身つて何うするかと思つたら、もう、醤油漬にしてあるのを小口から刺身庖丁で薄く切つて並べられるお手ぎはなもの。

まづ豚肉の極く良いところを一斤でも二斤でも三斤でも大切のまゝ深い鍋に入れ

て、肉をおほふ程水を注ぎ、火にかけて杉箸の樂に通るくらゐにゆで、熱いところを生醬油の中につけて一晚置くと、翌日はもう食べられる。これを醬油豚と云ふのださうだ。この通りお刺身にしてもよし、薄く切つてざつと焼いたのもよし、野菜と煮てもお豆腐と煮てもどんなにか美味くつて、またお辨當にはバンへ挟むと立派なサンドウキツチが出来るし、第一使ひ残りの肉そのまゝ醬油に漬けてさへおけば四五日はもつし、私實は雜誌で見たんですけれど、此頃ちや絶やさすこしらへて置きます、貴女方もためして御覽なさいよと先生はしきりにすゝめられる。成程重寶で美味さうだが、我家では母様が肉類をお嫌ひだから、まして豚なんときいたら身顫ひをなさるであらう。

あらまし調つた午近く。私等まで何となくホツとしてるとお隣りの奥様が見えて一寸と先生を呼び出し、門口で立話しをして居られたが、

『みなさん、私は鳥渡お隣へ行つて來ますからね、何直き歸りますがもう秀秋がも

どりますから……濟みませんけれど跡をよろしくお任せしますよ、何うぞお兩人では、御飯を焦げつかさぬ様に」

と云ひ捨てられたまゝ一緒に出て行かれた。

後ではまた二人がゆづり合て大さわぎ、互に比較的責任の薄い御飯炊きにならうとてである。とうとう私が云ひ負けて了つて餘り口惜しいから、意地張でわざとお吸物の方が受けた。こんな間にいつか十二時も打つたのだと見え、制服姿の秀秋さん汗をふきくお歸宅になつた。ふいと臺所に入つて來て私達の居るのにひどく面喰つた様子、火吹竹片手に一生懸命お釜の下を炊きつけて居たお京さんは一たまりもなく吹き出して了つたが、私はあまり氣の毒になつたので、

「お歸り……遊ばせ！」

あの先生は若山さんへ被行いました？ 何ですの、お雑巾ですか」
何時までか突立つて居られる氣が知れぬから催促すると

『いや』

と初めて身を引いてつか／＼と座敷の方へ行かれるや本包をバツタリ投げ出す音がした。ほんとに妙な方、若い女は悪魔の化身だとも思つて居られるのかしらん三年越毎日顔を見合せて居た私等とさへ、口を利かれた事はまだかぞへる程しさやないんだもの。いまに一高へ入學んだつて、そしたら此上何んなパンカラが出来上るだらう。それでなか／＼の文學通でよく〇〇や文章世界に小説を投書たり、滔々と自然主義やら象徴主義論なぞ筆にされるのだから、思へば可笑しいより馬鹿々々しくなるわ。

潮はまづ鹽にしてあるあらをざつと水で洗つて沸騰湯の中へ投じ、生醬油を少し注して一寸お加減見ると何とも云へぬいゝ味だ。が不安心なのでお京さんに、何うでせう、と云ふとそれが貴女のかゝりぢやありませんか、私にやわかりませんよとひどく跳ねつけられた。仕方がないからお小皿に少し取つて、机の傍に持つて行き

秀秋さんお加減を見て下さいなと、頼む。と變な顔して振りかへり乍ら、でも吸つて見て、鹽辛いなア！

『鹽辛いつて、ぢやもつとお湯を注していゝんですか』

『何だか知らんがお母さんは此様しほ辛い物食べさした事アない』

私はホウ／＼の體で引退つちまつた。お京さんは人の心も知らないで竈の前にくすくす笑つて居る憎らしさ。とにかく仰の通りもつとお湯を注し、火から下して蒸らして置くと、美しい小豆の御飯をおひつにうつし乍ら

『ほゝ美江さん、貴女うしほはあたゝめ返すと味が損じるつてぢやありませんか。』

其様に早くからこさへたつて先生は何時お歸りになるか知れないに、冷めつちもうわ』

と云はれてると折よく先生が歸つていらした。まア丁度よいとこでしたね、何うもおそくなつて済みませんでした。さそお腹がお空きでせうから直ぐ、と大急でお

膳立が始まる。ご馳走は

豚のお刺身

(溶きガラスをそへる)

お茶碗

(鯛うしほ、茗荷たけ)

お口取

(二色玉子、乾杏の砂糖煮、鹽松茸)

鯛鹽焼

(付合せ蠶豆の青菜)

甘煮

(ふきと摺り肉)

右のうち摺り肉は鯛の骨を抜き摺り鉢にてよく摺り、メリケン粉と味噌と鹽を少々加へなほ摺り、それから油あげを二ツにはなして前の摺り肉を二分ぐらゐの厚さにのべ、小口より巻きて一寸兩はじを切落しざつとゆで、後味をつける

と云ふお献立、やがて風通しのいい中の間に四人が一ツ食卓をかこんだ。私は秀秋さんの隣席で飛んだ所へ坐つたものだと思ふ。いつも無言の會釋のみですましてる間柄が、斯う肩をふれ合ふばかりでは、折角の御馳走も氣がつまつて美味く頂け

やしない。

お目出度う御座います、と云つてみんなが箸をあげたが、私はまづ吸物を一口吸つて見て我乍ら驚いた顔したと見え、先生がふつと失笑されて、大分よいお加減です、ねと仰有る。ほんとになるでお湯の中に鯛の切身が泳いで居るやう。だから私は變だと思つたに秀秋さんがあんな事云ふんだもの、と恨めしく秀秋さんを見るとお京さんが皮肉な笑を含んであの話をする。先生はいよくお笑ひなすつて、秀さん、ちやその前に何か食べましたね。え、僕茶だんすにあつた羊羹を食べました、けれど……けれどちやありません、甘味の残つてゐる口でおあんばいされちや堪りません、がね、美江さんも美江さんちやありませんか、若様とお姫様とが差向ひで新世帯でもお持ち遊ばしはしましい……何心ない串誠にお冷かしなすつただけれど、私は思はず紅くなると秀秋さんも俯いて苦笑された。

然しこれから親睦の絲口が開けて、めづらしくも私等といろ／＼言葉を交し、學

校のお話しにお京さんとませつ返して散々笑つて了つた。食後ビンボンやカルタなども先生が出て来て下すつたが、ふとお京さんの發案で、百人一首中の歌の價値の批判が始まつた。

先生は『久方の』と『風そよぐ』と『あわぢ島』が好いと仰有るしお京さんは『淋しさに』と『花誘ふ』と『ちぎりおきし』私は『今はたい』逢見ての『來ぬ人を』だと云つたらはアセンチメンタルな人は矢張情の痛切なばかり選ぶつて、随分な方！

ぢや御自分はとせめると『僕ア吹くからだ』なんて憎らしくて仕方がないわ。其中いつか文學談にうつる。初めの中こそ新聞小説などの話しであつたが、秀秋さんも好きな道として私が少し語るに足ると見るやお居間から帝國文學など持つて來て見せて下さる。だん／＼圖にのつて生意氣な口を出し、とう／＼作家論で散々やりこめられた。

もう議論ぢやとてもかなはぬから透を見ていきなりその久留米飛白の肩を、びつ

しやり一ッ参らせようすると、早くも身を翻しならが私のマガレットに掛けたリボンを、引張るを此方は飛び退つたのでスルリととけて仕舞つた。ほつと色を變へ

『や、失敬々々』

とお氣の毒な程詫びらるゝ。私もまア調子づいて餘りな失禮、平常が平常の方なのに……もう些とつゝしんで居れや宜かつたと思ふと、居たゝまれぬ程きまりが悪くなつた。おまけに先生もお京さんもお臺所の方で聲がする。ア、何うしたら……ところへ襖を開けて笑ひ乍らお兩人がお汁粉の鍋を運び入れられた。そしてお京さんが面白さうに無理強する。流石のお好物も胸につかへたやうで、折角頂いても苦しみな程であつた。

秀秋さんはお箸を置くより例の帝國文學を膝の上のせて讀み初められる、モウ取りつく鳥もなく、袂の先をなぶり乍らちつと坐つて居る心苦しさ。先生とも何を

お話ししたのだから、たい顔が熱くて／＼気が遠くなりさうに思はれた。いろ／＼御馳走のお土産頂戴しておいとましたのは五時過ぎ、御門を出ると夕陽に輝く麥畑、はでもない中から

『お絹十八、さてよい標緻——』

鎌の音と共に穗末の浪を渡つて散つて来る。お京さんは洋傘の先をツツツツと輪にふり乍ら、

『白の手拭風ゆるゑなびく、手綱ゆるめて聲はり上げて』

小聲に鄙歌のあとをつけてはらり後れ毛かき上げる。私も氣が附いて帯の間へはさんでおいた先刻のリボン取り出し髪へ加へると、スーと飛鳥が袖をかすめて飛んで行つた。

華族系

一

立てこめし朝霧はいつか晴れ渡つて、水天髣髴の間に薄すりと伊豆の島山、赫奕たる日光は宛ら玻璃の如く輝き、立ちならんだ海水茶屋、ひるがへるフラフ。こゝ藤戸ヶ濱の一帶は今し人の出盛り、渚の賑ひ、笑ひ聲、浪にひいて熱砂吹く風頬にぬるし。

せゝらぎ亭のお葉さんは美しい女でした。花ならば濃紫の桔梗か、藤戸辨天とは漁に出る村の若者たちの取汰沙で、尤物だとか、いはくのありさうな代物だとかその容色はすぐ避暑客の口の端に上るのでした。

けふも清ちやんと云ふ小女を相手に、早くからいそがしく働いてゐます。紺地に

あらい横縞の縮みの浴衣に博多の帯をきつちりしめて、髪は引詰めの束髪、でも生
ぎはがいゝからちつとも可笑しくありません。やゝ面長の、ふつくりした願のあた
り、いかにも輪廓がいゝ。肉の厚い落ちついた鼻、眞紅な唇が凜と結んで眉は少し
薄過ぎたが、中肉の脊は思ひきり高く、黒縞子を打ち合せたお納戸のふつくりした
脇明けのあたりから、たら／＼見ゆるしよひ上げの紅がなまめかしい。

『いらつしやいまし、お掛け遊ばして？どうぞこちらへ』

お葉さんの聲はひくいので掛茶屋の姉さんなんかにはむきません。悠然と入来
つたのは牛蒡縞の熨斗目形、旅館の浴衣にバナマ帽、芙蓉の煙を吹かせつゝ眼鏡を
かけた二人づれ。一禮して麥湯くんで、行けば、

『姉さん、いつも美しいね』

と八字髭の二ツ三ツ年下とみえる三十七八の方が、巨蟹の脚のやうな毛の生え
た節高指に、指輪嵌めた手で煙草盆引よせ乍らニヤリ笑ふ。

『何誰様でゐらつしやいます』

お葉さんは眞面目顔、

『君の方ぢや知るまいがな僕等アとうつくから……まだ君が東京にゐた時分のこと
も知つてゐるんだ』

『おや、左様……』

『何は、相替らず御健在かね』

『はア、父はおかげ様で……』

『お父さんもお父さんだが、何さ、その例の——』

『お人違ひで御座いませう』

端然たる眼をあげて、沖の方を打見やる、その時あちらの方の縁臺で呼ばれたの
で『はい』と答へて空盆を下げたまゝその方へ行く。

『君!』飛びこんでゐたのは高山男爵の若様、お葉さんは嫣然してふりむくと、

もう脱衣場から猿股一つで右手を輪の様にふり乍ら、海邊をさしてかけてらつしやる。御きりやう美しの若様、お葉さんはこの若様を見るのがうれしかつた。

この方の御令妹様、お十六ばかりなのがいかにお腹ちがひとは云へ。それはく何と申上げてよいやら、ダイヤの指輪も錦の御帶も烏が雀孔の羽を拾ふたやうで、光る様なお兄様のお傍へならべては、まるで今戸焼のおかめさんみたい。

他人でさへさう思ふものを、お母様のお心になつたらどんなでせう。若様をおうとみ遊ばすは定のこと、このまた若様におつき申してる乳母さん、五尺三寸もある大きな方をいつまでもなめぬばかりに可愛がつて、お世話をやいて、これには流石の若様もはしたなくは有仰らぬけれど。

『ほんとに僕ア困つて了ふ。口隠に寄宿舎からかへるのだつて、彼奴が居るとうるさくつてね、無能のくせに下らない干渉ばかりしたがつて……』

なんて可愛いお口許からおこぼし遊ばす。

お葉さんは熱心に若様の行衛ばかりみつめてた。身を、どらして水煙立てると、もうどれもこれも同じ様な黒坊主ばかりで、どれがどれだか、見分けも何もつきやしない。

『お葉さん……今日は』

杉浦様のお嬢様はひつてゐらつしやる。バチンと白茶のバラソルつぼめて、あまり人が一杯なのに何處へ掛けやうかとためらう風情。思ひ切つては華族前髪、眞紅のリボンを左にさして、白絹の襟に緋博多の帶高く結んだ身じまひの正しさもなみならず。

『まアようこそ、今日はお一人でゐらつしやいますか』

いそくと坐をさうける。令嬢は笑ふ度少さい金齒が可愛う光る。

『ヤ、』と立ち上つたのは『送り狼』との綽名を取つた中木さん、オヤと思つてみ

『失禮ですが貴女は杉浦みち子様で……』

『僕は中本と申します、どうぞよろしく。いつ當地へお出になりました、御令妹もお一緒にですか。どうも御別荘の眺望は絶佳ですからな。恐らく當地第一でせう何でもすかお母様も……左様で御座いますか、かね、お名前や外ながらお姿はお見受け申して居ましたけれど失禮を……』

令嬢は困つて、『ハイ、ハイ』とばかり齒がゆい様なのを、

『ちとお遊びにお出下さい——、はアちき泉屋のそばで井東と云ふ家に居りますから……』

なんて稻の徽章の帽子をいちくる。

清ちゃんはお茶をはこぶに暇なく、サイダよ梨よと呼ばれてはこまねずみの様にかけまはる、お葉さんもひわ色の襷かけて如才ない調子であちこちと動きづめ。かつては朋輩とはり合つて、園遊會の接待係に客をひいたる事はありたれ、いまかゝ

る實地に應用しやうとは……。

折しも脱衣場から走り出していちじろく視線を引いたは、めづらしくも眉を落してあと青々とした二十五六のおかみさん。雪のやうに白い身體を黒白龜甲形のメリヤス水着に包んで、丸鬘に經木の海水帽、兩手で帽のはしをおさへて、はねる様にして浪打ぎはへかけて行く。

淑女に對する禮義を守つてか、毛脛の大男がしほらしうも黒の水着をつけたもあれば、帽子もかぶらず廂髪ふり立て、猿股一つの女もある。

また向うの縁臺を占領してさわいでゐる十人あまりは、二三人の若い女もまじつて、姫御前の身のあられもない、多勢の人も居る中で、曲線美を惜しげもなう赤いお腰巻だけになつて海風に吹きなびかせつ水瓜をかじり、ビールを飲んでゐる。お葉さんは見るに得堪へず顔をそむけた。

随分酔漢につかまつて仕末におへぬ事もあるので、お葉さんの嫌ひなものはよつ

ばらひと縁談と牡丹餅とは毎年茶屋の手傳ひにたのまれる清ちやんの名言。毎日潮風にさらされ乍ら、色も黒まぬ素顔の美、ことしも某館に滞在のなにがし富豪の若旦那が、心も空に憧れてゐるさうなですけれど、相手がお葉さんでは橋渡しする人もありません。柳眉たちまちさかしまに、額に黒雲が湧きませう。大ていなものはその意氣込に驚いて引下つて了ひます。

その中高山の若様が上つてゐらしたので、お葉さんは後の井戸端へ行つて、甲斐しくつるべをしごき上げ、お頭から水を浴びせ申す。お十八にしては大柄のお脊も高くて、お二十くらゐには見える。毎年片瀬の天幕生活にきたへ上げられて、泳ぎも達者になされば細いけれどもしまつた肉づき、病ひ氣のない青年の美しさ。やがて、ビショビショにぬれた光澤のいゝお頭からタオルかぶつて、

『君、お茶を一杯くんないか。ヤー君の顔どうしたんだ』

ふき出しなさる。お葉さんはあわてゝ、手の甲でこすると、鼻の頭が砂だらけ。

『あら、若さまだつてこんな召し方して……お襦袢の襟が折れて居りますわ。ま、ちつと遊ばして……』

おとなしく脊をおかゝめ遊ばすを、直してお上げ申しながら。

『若様のお身體のお立派でございますことねえ、若様も軍人におなり遊ばすので御座いますか、私は海軍が好きで御座いますよ』

ほゝ笑むと。

イヤ僕ア帝大の工科へはひるんだよ、造船の方へとまじめでおつしやる。

『まア若様のやうにおきれいな方が船大工のおまねなんぞ……金鎚でもおもちになつたら、お手の皮がやぶれて了ひませう』

と笑へば、

『ウソ云へ！』

つてひろげてみせられたあたゝかいお手を、お葉さんは一寸さはつてみて、その

まゝかるく握りしめ。

『まあどう遊ばしたので御座いますの、タコだらけ……まるでかたいつたら角のやうでございますわ。あらこんなにおけがのあとが……』

『これはね、ナイフがすべつたんだもの。こつちの手は火薬が破裂してやけどしてね』

ボートのチャンでベースのチャンで評判の運動家、ボールを受けるために左右の指が關節から屈まつてゐて、しかも不似合なほど大きい。

『午後からは釣に行く』

つてさつ／＼とかへつておいでになる白飛白の後姿、飽かず見送つて、似てゐらつしやる、とまた思つた。

人なつかしさうな物の云ひ方、黒い切長な眼をみはつてちつと相手を仰がれる時、可愛い若様、お美しい若様、あんなおきれいな方の奥様におなり遊ばすのはまあど

んな方だらうと考へて、お葉さんは肩を打たれるまで知りませんでした。びつくりして向き直ると、

『魂ぬかれたやうに何をボンヤリしてるんだい。いま歸つて行つた田舎源氏の主人、公みたいな奴ア一たい何だい』

赤禪組と自稱する五人づれ、本郷邊なら間がいく節でも歌つてゐさうな麥稈帽かぶつて、日に焼けた顔にまつ白な齒を出して笑つてゐる。

『まアいらつしやいまし、先刻から田口さんのお嬢さんがお待ち兼で……』

『え、來てる？さうか。おい今のあれ誰だい、何、高山……華族系をひいた顔だなア、君は華族さん好きだらう』

『好きで御座いますよ。若様たちは皆さんのやうにお人が悪くないから。あ、竹田さんいらつしやいまし……』

ゴムの水帽、足袋はだし、板子かゝへてし美しい腕までひだでくゝり上げた黒の

海水服、人もなげなる令嬢はにつこりして、一寸帽子をかたげて、

『河野さんゐらしたの』

『いえ、まだお見えになりません。ま、お掛けあそばして……けふはお暑うございませうことね』

『象』と云はれてる農科大學の伊東さん『和尚』とはその帽子の恰好から。栗鼠の様に肥つた鈴木さん「薬罐」の中村さん（之はすぐ熱しすぐ冷めるから。頭のはげるわけではないので）いづれも一騎當千の人物がどや／＼と御入來。空はいよく深碧に輝いて、雪とくどくる浪がしら、磯の松原の中をルイザに結つた女が、の洋傘かたむけて行く。

二

長い夏の日も山もあなたへ沈みはて、いつか夕づきは空にきらめく。名残をと

めた夕映の雲の色、臙脂の海も沖合からたそがれ初めて、轟々と鳴るは浪の音。

お葉さんは店をしまつて山かげの家へかへつて來ます。駄菓子蒸菓子いろ／＼入られたガラス箱や、ビールにサイダ、梨、まくわ、葡萄、残り少なのふかし、大きなしよひ籠に入れて、清ちやんと二人でせおつて、藥罐や急須を手にかけて、折から散歩の人の出盛の中を、伏目になつていそいで行く。

かぼちやや西瓜のごろ／＼とつんである土間にはひれば、燃木の煙にくすぶつた家の様、奥の間には母が、かたみの總桐簞笥、この家には不似合な鏡臺や針箱やお葉が秘藏のアルバムも光つてゐる。黒い疊、黒い天井、お葉さんの顔のみが夕闇の中にはの白う。

つかれ切つた身體でまた行水の湯も沸かしたり、夕餉の支度もせねばならぬ、明日の朝の米をとぐ、お汁の實の里芋をとん／＼とんと切る、鍋をまく青松葉の蚊いぶしに、家の中に息もつまる様。

やがてその煙りの薄らいだ時分には、ほの暗い三分心の洋燈のもとで、無言つた父親とうまいお菜もなく、お茶づけさく／＼とかきこむ自分の姿が、たまらなくあはれに見えました。

心持のちがつた父親と、こんな暗い家でわびしい儂い生活をついけることは、お葉には堪へられないのでした。自分の身一つであつたらば／＼と思ふたび、父親にすまない様な氣がして空恐ろしくもあつたが、父親さへ見送つて了つたならば、お葉さんはもうこんな土地にある氣はありません、たい花やかな、賑やかな、侍女時代がおもはれてならないのでした。しつかりしてる様でも世間見すと云へば云はれるお葉さん、子爵家戀ひしの念の外には、何の餘裕もないのでした。

お葉さんの母親は土地の人ではありませんでした、縁あつてこの家に嫁入りしましたが、先夫の忘れ形見……その時の連れ子がすなはちお葉さんなのでした、三味線が上手で聲の優しい、骨細な美しい人でありました。

生れは東京の神田とばかり、くはしいことは人に語らず、誰も知りませんでしたけれど、何でも長らくある華族様に御奉公してゐたとの事で、行儀正しく物しづかな、品ある様は昔の上も惚ばれました。

浪風あらし漁村のすまひ、秋につけ春につけ、折々はよい女氣に堪へかねる懷舊に伯爵邸の榮華の夢は我が一人子の耳にもらされるのでした。

感じやすい少女の心は母と同じ様にいつか都の空をかけめぐるやうになりましたが、花恥かしき十七の春、お葉さんは麻布の某子爵家に、行儀見習として上りました。白丈長の高島田、肩上げのあとも初々しく。その頃から才はちけた人見知りませぬ、キビ／＼した子であつたので、夫人の御寵愛も淺からず、朋輩達にも可愛がられて、初奉公の泪も知らず、たいうか／＼と寢覺こひしき故郷の空もいつよりとなく、忘れ行くに、水道の水のきゝめは有がたいもので、天成の麗質はいよいよ光りをまし、紫矢飛白など着た時は、何處のお嬢様と、申上げたいくらゐ、氣高う立

ち勝つて見えるのでした。

かくて宏壯な子爵邸の奥深う、三年の月日が無事にすんだなら、今頃はお葉さんも緋の手柄に、可愛いので抱いてゐるのでせうけれど、夫人のおめがねで、相當のところへ縁づけて頂きたいと云ふ母親の願ひはあだとなりました。

よくある習ひなど、お笑ひ遊ばすな、お葉さんの初恋人、それは子爵家の若様でした。

清様と申上げて二男の君、その頃江田島に在しました。

羽左衛門に似てゐらつしやるとやら、話判の方でね、丁度その年夏の休暇に御歸省の、白の制服制帽に、短剣ガタつかせた凜々しいお姿、一同と共にお玄關に居な
らんで、お靴をぬがせまゐらせたその時から、あはれお葉は物狂ほしいまで思ひつめて了ひました。

御足音をきいてさへ身體も打震ふばかり、もし朋輩から清様のおん上でも話しか

けられ、ば、息もとまるかとおもはれました。

一方の清様はまだお二十に満つや満たず、淡白な軍人氣質のそんな感じは夢にもなくて、馴るゝにつれてはお言葉の数も増せど、お菊をお葉とお呼び遊ばしたりお葉と、信とまちがへて叱言を有仰るやら。その花のやうな、顔も可憐な風姿も、御眼にうつつて居るや否やおぼつかないものでした。

いよく明日は御歸校ときいた前夜など、氣が遠くなつて高いお廊下からすべり落ちたほどで、里心が出たのであらうと、優しくなぐさめて下さる夫人に對してもたい泣くより外はありませんでした。

思ふて思ふて思ひぬいたとて、とても甲斐なき思ながらに思はじとすれど尙思はるゝ。

結婚を意味する戀でないだけに、お葉はどうしてもあきらめられませんでした。いやしい育ちの田舎女、大それた事は願ひませぬ、たいく此方で思ふばかりもし

もこの心通じた時がありましたなら、清様―可哀想とおぼし召して下さいませ。形は捨てぬ影を追ふ泪は君も許すらむ、と、勝氣の女なれば色にも穂にも現はすまじの用心固けれど、その後清様は御歸省の度犯しがたい威容さへ加はつて、ますます近づき難い人となるばかり、御飯のお給仕申すのさへ手がふるへてそのお茶碗や碗のふたを取つて投り出すやうになさるお癖などは、はら／＼して坐にも堪へぬほどでした。そのくせもし外の朋輩が御用をする時は、すぐ妬ましますに胸は燃ゆるやうでした。戀しい君の本邸に居ます間はたい／＼嫉妬の炎と羞恥の念に身を焼かれるやうで、夜さへ安眠は出来ませんでした。

あはれ頬もやせ、悲しみに曇る瞳はけしう輝けど、召し使はるゝ身のはかなさは空蟬のからばかり、つとめて立ちはたらいて居るのでした。

その中に清様は兵學校も御卒業です。お葉さんは丁度十九の厄年でした、故郷の母親の大病!

可愛い娘に抱かれて、薄倖な母親は逝きました。お葉さんは泣く／＼も親類達のですゝめを入れて、子爵家からは一まづお暇をいたゞいて下りました。

優にやさしい都ぶり、折目正しく父親に仕へて、光るやうな美人なのですもの、たちまち村中の自慢の花となりました。子爵家の夫人も御心配して下すつて似合の縁邊や、また村一番の名家から縹緞好みでは非との懇望もありましたけれど、お葉さんの頭はいつも横にのみ振られました。

誠に感心な女で……よろこんだのは伯母なる人で、彼女はあと取りの一人娘、私がいまによい婿持だせてやりますと吹聴してゐましたが、二十二のけふまでまだ獨り身、はねつけた、縁談の數はいくつでありましたらう。

清様は少尉に任官するとまもなく肋膜炎を病んで、いまはもう軍職もしりぞかれ自暴自棄のおん身を逗子の別墅に養なうて居らるゝ。

夫人へ御機嫌伺ひは絶えず出せど、清様のことは氣がとがめて御見舞一言申上げ

られませんでした。

三

夜毎よごと日毎ひごとに浪なみの音おとが高たかくなり、海松みずなばかり打ち上げられて、海邊うみべに秋あきが立ちました。お葉えふさんの顔かほもさみしくなりました。

金線きんせんまばゆき芙蓉ふようの峯みねに落日らくじつの夕映ゆふはえ、椽えんの柱はしらに凭よつてばいやり外そとをながめてゐると、大きな行李かきりを前まへにしてゆられ乍はじら走はしつて來る車くるまがある、それとみてお葉えふさんは頭あたまを下さげてニツコリした。

『御ごきげん好よう』

とふり返かへつて、車しやう上じやうの令嬢みとは云いひました。

『お近ちかい内うちに……』

とお葉えふさんの聲こゑにまたふりむいてうなづいたが、白しろいリボンのマガレット、青磁せいじ

色の矢の字は山蔭にまがつてかくれ去つた。

お葉さんはホロ／＼と子供の様に熱い涙が頬をつたふた。

東京へ行きたい、東京へ。お邸が戀しい。私は／＼いつになつたらこの村を出られるのかしら？

軒の低い煤けた家で朝から晩まで賃機や人仕事。人にとやかく云はれ乍ら、聞くに堪へぬ蔭口をつかれながら、何が樂しみ、何かのぞみでかうして居なければならぬのだらう。

好人物の父親はお葉のことについては何とも云ひませんでした。三つの年から手しほにかけたのを、一時は人も羨むまで、孝行娘などと評判されたものが、今では人の變つたやうに、他人の子なんか育てるものぢやないと、二言目には引合に出される位になつて了つたのですけれど、強ひては娘の氣にさからひもせず少しばかりの畑でも作つたり、縄でもなつたり、二合づつの晩酌が何よりのたのしみ。

避暑^{ひしょひかん}避暑にはする分都^{ふんとじんし}人士も入り込む土地故、すねて立ちたる女郎花^{むすめななし}、金にまかせて我が手活^{ていけ}の花とこゝろみた人達も一人や二人ではありませんでしたが、お葉^{えふ}さんはそんな時、いつも口惜^{くやく}しがつて泣きました。あんまり。氣の強^{つよ}さにあきれて、この頃では誰も手をひいて了^{しま}ひました。男嫌^{をとこきら}ひだとか不具^{かたわ}だとかいふことを云はれるのも、もうさまざまな噂^{うはさ}をしつくされてから後でした。村人は憎^{にく}しみの眼をもつてお葉さんを見て居るのです。

さすがのお葉^{えふ}さんもだん／＼世間^{せけん}がせまくなつてゆくやうに思はれて……この凋^{しう}落^{らく}の秋に對しては燃ゆるが如^{ごと}き胸の血も、流石に平靜^{へいせい}たらざるを得ないでせう。詩^しの國の建設、感懷横逸^{かんわういつ}の境地に正にこの時……。多感^{たかん}なる、お葉^{えふ}の眼底に映^{うつ}ずるものは、そも何^{なん}でせう。

初秋^{はつあき}の空清^{そらきよ}く澄^すみて、ほの白^{しろ}い新月は夢^{ゆめ}のやうな光^{ひか}りを投^なげてゐる、といろ／＼とといろく濤聲^{たうせい}、サラサラと風が鳴ります。病葉^{わづら}が二つ三つ舞^まひ落ちました。

逝く春の乙女

七日。

春爛漫の花の色、散り来る花も光あり。毎朝八時、包み抱へて家を出る、インキを下げた角帽さんや、美しいお袴ひるがへして行く女學生達の、そろ／＼通る本郷通りを、私は枝もたわ／＼に咲きほこつた大學構内や、高等學校の櫻をながめ乍ら歩くので、幾度足もとがお留守になるかわからない。一高の○寮の二階の窓の羽目板ね、まっ白く洗ひ出したやうになつてるところがあるでせう。あれは寮前にさらされたものだつて……まさか。

叔父様の裕羽織を縫ふ。マチなどつけをへて、
『先生如何で御座いませう』

とお目にかける、山を引ばつて打返してみて、

『結構です』

と言葉少なに。それでも私はかぎりないうれしさを覚える。年甲斐もなく……。けれど今日はそれどころぢやない。午後二時から一高對三高の野球戦、其時刻になると何だか氣がワクワクして、皆様はちつともそんな事御存じなく、談笑してゐらつしやるけれど、あのワアーツ、ワーツと應援の聲、拍手の轟き、

『勝つた方がエー、勝つた方がエー』

なんかきゝつけるとたまらなくなつて、鐵砲附けの襟を縫ひ乍ら、心は何處かへフツ飛んで居た。

お當番すまして五時頃歸宅。行き交ふ行人、みんな野球見物のかへりのやうに思はれて仕方がない。△子様からお返事が來てゐた。

『千代様！何故もつと御話遊ばしませんでしたの？私もつと、花やかな君とのみ御想像申上げて居りましたに……。御自重か、はた御慎しみ深く在すか……。』

何だか悲しくなつてくる。

晩食のおかずは茶碗蒸、三ッ葉のおひたし、ねぎのぬた。

夜、義兄様がおより遊ばしたので、いきなり、

『兄様ア、マツチいらして？どつちが勝つて？どうしまして？』

と伺つたら、

『三、對四』

『一高萬歳。うれしい！』

と叫んでみんなに笑はれた。

はる／＼遠征の三高の選手は宿にかへると、重なり合つて口惜し泣きに泣き倒れたと云ふ。可愛想でもある。いゝわ、その代り明後日、ペンとの腕くらべには、きつ／＼私も、かげ乍ら祈つて居りますよ。

だつてもねえ、三本筋に櫻の徽章、白のユニホームの上からマントはおつて、群

をなして潤歩して居たのを二三日前から見かけて居るんですもの。まんざら他人のやうな氣もしませんわ。

寝しなに夏みかん一つ食べたたら、すつばくて苦くて、すつばくてにがくて、憤然として口をそぐ。もう水道の水もイヤに生ぬるくなつて來た。

八日。

紅雲榮ゆる春の水、墨堤十里、オール持つて手にヨウ花が散る。今日こそ待ちこがれた帝大ボートレース。行きたくて／＼たまらないけれど、あの意地を張り通して、切符もとう／＼引さいて了つた。私にお金があつたらば、來年のボートには、青の洋傘さして青の紋羽二重きて、リボンも鼻緒もハンケチもみんな青づくめ、ホ……人が狂的だと云ふでせうか。え？ キリ／＼スの化物みたいだらうつて、随分よ土曜日で裁縫は十二時まで、バラッソルたげていそぎ足で歸つて來ると、森川町へまがる角で追ひ絶つたのは、お納戸のお袴に編み上げ凜々しい紅リボン、あら香

津子様、ともう無意識のうちにかたく手を握り合つて居た。

肩すりよせて歩き乍ら語る。ふと先刻早退なすつた山田様に出合頭、あわてゝお叩頭なすつたので、

『あら今お出掛?』

と云つたら、

『まあ、羨しさうな聲してゐらつしやるわねえ』

つて香津子様に背中をたゝかれた。

だつて、しやなり／＼と氣取つて、兄様らしい方や弟様らしい方達とつれ立つて電車通りの方へ行く人達をみると、つひ決心もぐら／＼して……。何しろとてもちつとしては居られないから、香津子様とこへ行つて半日も暮さうときめた。羽織だけ着替へて御飯も食べずに出かける。さなきだにポツと上氣してるのをバツとかざした肉色の琥珀が、まつ白い顔に映じて、香津様のお頬は櫻花のやう。

お茶を飲みカステーラを食べながら、南向きの四疊半、小ぢんまりした香津子様のお室で、皮表紙や金文字の背をならべてぎつしりつみこんだ書棚から、手當り次第にぬき取つて、冷かして上げる。夢二畫集の春の巻に、『試験に囚はれて』花は咲けども、鳥は歌へど、頭抱へて居る學生さん、これA様のところへ書いて上げやうかつて大笑ひした。大切な卒業試験、この七月には學士にならうと云ふ瀬戸際ですもの。青息吐息で……お察し申上りますのよ。

ぱつと花瓦斯の光りを浴びて、肩にそよぎし下げ髪や、女神のやうな香津様はキイ打つ度にきらめくダイヤ。

『光まばゆき春なれど、道行く人の面をみよ』

二人よればおきまりの寮歌が始まる。家の方達には内しよでデツカンシヨをどなる。

『月はかくるゝヨウ、航路は亂るヨウ、たどりくゝてヨウ、エトロ島ソカヨウー

『あひはせなんだかヨウ、向ヶ岡でヨウ、二本ラインの……』

姫御前の身のあられもないソカヨウ節、私も一緒になつてピアノをたたく。

お鮎を平げバナナをむき、うなぎで御飯戴いて、徴發した『やどり木』をかゝへこみ、須田町のりかへ、十一時歸宅。

九日。

朝直ぐに新聞をみる。あら、敗けた、敗けた、青が。口惜しくて投げつけた。樺も駄目だつたのねえ！

あまりバタ／＼はたきでなぐつてお室の障子をやぶいちまつた。

風が吹くと本郷通りはたまらない。ほこりがバラバラと頬に痛い。一日机の前で過す。吉原が晝火事だつて、二階に上ると煙を見えるさうだけれど腰もあげなかつた。母様からお手紙が来た、マア、母様がお筆おとりになるなんて何年ぶりでせう、代筆先生上京して了つて、困つてゐらつしやるだらうと思つたら、なかなか名文

でいらつしやる。妹の書いたものもはいつて居る。

『あのあやめのそばのクロージュアね、いま青々大きくなつたことよ、お庭の八重櫻もいま満開できれいです、お姉様、おからだをおだいじにして下さい』

これでも尋常六年生。

夜、鰯パンが食べたくて仕方がなくつて、買ひに出たけれど、どうしても店にはいりきれず、ぐるりとまはつたけで歸つて來た。手には十錢の銀貨を握つたまゝ……。

十日。

傘をかたげて足駄カラ〜。道行く人を見下すやうでほんとに氣がひける。背の高さまさに五尺六寸。

お晝のおべんたうのお菜がてりごまめで、なまぐさくて困つた。雨はやんで花ぐもり、紅筆に水ふくませてふるつたやうな大地の落紅、一高の小使の爺が鳴らす鐘の音に、濃艶な八重櫻がハラ〜散る。

歸宅後、唐人髷をといてウキンナに直す。その方がよつほどよくお似合なると女中達が口々に云ふ。

十一日。

父様の御命日、大奮發の早起きして割引電車でお墓まゐりする。徒町で金杉行きにのりかへたら、乗るわ、労働者が、しらみのこぼれさうなボロ／＼絆纏、膝のぬけたもゝ引、鯉口、どろ足袋、異臭ふんぶん、肩を細めて我知らず眉をしかめた。すると兩はしの奴が笑ひながらわざと寄つて来る、たまりかねてまだ進行中に飛び下りて了つた。

お線香としきみを片手に、青柳の絲ゆるうみだるゝ下に立つ。生垣の八重椿がボタリ落ちる。

歸途に上野の山をぬけて、落花の雪をふみ分けやうと云ふ心ぐみであつたが、何だか空があやしいのでまた電車に飛び乗つて、叔母様のお家へ行く。八重さんが學

校^{かう}なのでつまらないけれど、髪^{かみ}をとかして真紅^{まっか}な四時^{いんち}のリボン^{リボン}を結^{むす}ぶ。それから足^た袋^びと肌襦袢^{はだじゆまん}のせんたくする、雨^{あめ}がポツリ／＼と落^おちて來^きた。

お晝餐^{ひるごちそう}御馳走^{ごちそう}になつて傘^{かさ}を拜借^{はいしゃく}して。松屋^{まつや}へまはる。

紅絹^{もみ}一反^{たん}と白^{しろ}の縹子^{しゆすい}入^いりモスリン八尺^{しやく}と、洋傘^{パラソル}一本^{ほん}買^かふ、オレンジみたいな白茶^{しらちや}地^ちの、共糸^{ともいと}でぬひ入^いりの……柄^えは白^{しろ}くて曲^{まが}つたの。昨年^{きょねん}買^かつたのは紫^{むらさき}が、つた海軍^{ネビーカ}色^{いろ}。食堂^{しよくだう}へはいつておすしとお汁粉^{しるこ}を食^たべた。

三丁目^{ちやうめ}で電車^{でんしゃ}下^おりると、急^{きふ}に雨^{あめ}がふりつのつて横^{よこ}さまの大^{おほ}しぶき。家^{うち}までに後半^{うしろはん}身^みびつしより、クリーム^{クリーム}の裾^{すそ}も何^{なに}もめちやくだ。氣^きの利^きかぬ事^{こと}をしたとなきたくなる。

机^{つくえ}の上^{うへ}に主待^{ぬしまた}ち顔^{がほ}の手紙^{てがみ}が三通^{つう}。

學生の都會

母様がお留守の一週間、疊敷玄關まで入れて二十枚に足らぬ家ながら、主婦代り、大きな兄様の母様代りも——あら何誰……素的なマダム振りさなんて有仰るのは。この頃は兄様とさへ云へばあやしまれるんですもの。失敬な、私と兄様、この蠻聲や眼元から齒ならび、がつしりしたスタイルまで、これ程似てるのがわからないでせうか。華奢だちな母様にはちつとも似てないで、兄様が丸顔の恐ろしくお鼻の高い達磨様の様な眉毛の横顔など見ると悲觀しちまふ。清子さんは武者繪のやうだつて云はれてあきらめもしてる。

うちの兄様は今年法科を出るのです。今まで四年間一度も落第せずの延期なしでしたから、試験期にやかましく我まう云はれる位は仕方がありませんけれど、それにしても五月に入つてからと云ふもの、お琴の袋にはちりがたまつたまう、英語の

おさらひも許されず、いつかも親子様と調子にのつて、あまり大きな聲で談笑してたら、雷様の落ちたやうにどなられた。お氣の毒でお友達に遊びにいらつしやいつて云へませんわ。

清は引ずつて歩くからつて臺所のスリッパさへ取り上げられて了ふし、御飯だつて試験中は糊のやうなのを炊かせられるし、毎日圖書館へつめきる頃にはおべんたうのお世話ばかりもほんとに割のわるい役でした。兄様は何故か母様よりも清々つて私にばかり何か有仰るのですもの。

けれどねえ、二時頃ふと眼が覺てみるとまだ電燈があか／＼と、さら／＼とページくる音、走らすペンの響、私もう何だか泪がこぼれて了ひますのよ。エ、試験前の一夜作りは日頃の不勉強を證明するものだつて？そりや酷よ、法科大學の制度がわるいのだわ。うちの兄様なんか凡人ですもの、大精力をもつてせねばオツつかない。やせました、神經が病的になるのも無理はありません。

今朝は武様がおより遊ばして二人でお出かけになつた。お鞆のひもを結び直しな
がら武様、

『成功を祈つて下さい』
つてにつこり。

『エ、しつかりやつて頂戴ね』

兄様は無言、ひしやげた角帽の後姿。

マガレットに手ぬぐひかぶつた風つてないわ。緋のたすき十字にせつせとお掃除
する。兄様のお室にはうつかり足をふみ入れる事も出来ない。お火鉢などは火箸で
ゴス／＼つきとはす様な灰になつてるし、新聞だのマッチのからだの、引さいたノ
ート、丸めた洋紙、敷島の吸ひがら、夏みかんの食べかけ。

そのくせ石膏の人形だの、一輪挿しだの、柱には紅葉の造り枝や、クリスマスカ
ードや、ことに私の好きなのはスコットの水彩畫である。山紫に樹は青く、澄み渡

るカトリン湖、かとりん海に權とりし、エレンの君がおもかげや……。

久しぶりで晴れたからいろ／＼お洗たくする。シャツだの、襦袢だの、ぬれたのをつい抱へこんだまゝ竿をふいてたら淺黄襦子の帶がまつさをにくつついた。

右隣の高山さんがインキを振り／＼おかへりなさる。この方達は今日で試験がおすみになるのださうな。

『おめでたう、高山さん』

と云つて上げたら、

『清子さん人が悪いですな、僕アもうそんな事云はれると片つばしからはり飛ばしてやりたい!』

眞紅なカーネーションが二十八咲いた。先日A様のところへ伺つて、お床の間にあつた二鉢の花をみんなむしつて了つたから、今度は何かいゝ花をもつて行つて上やうと思つていろ／＼フラワールングエーヂを調べてみたけれど、どうも思はしいのが



ない。スキートビー、心こまやかな快樂？パンジー——朝顔——河原撫子——みんな駄目ね。

『オイ、すぐ飯にしてくれ！』

つて兄様、投り出す様にお靴をぬいで上つて来る。

午後から髪を洗ふ。青葉の風にかほるやぬれ髪。日盛りを三丁目まで買物に行つて來たら、くつぬぎに小ぎれいな靴が光つてる。はア小野さんだなと思ひながらお座敷へ行くと案の通り。

『いらつしやい、おめづらしいのね』

『僕アもう清子さん他家の夫人かと思つてましたよ』

『だつて貰手がないんですもの』

玻璃皿にいちごを美しく盛つて出す。牛乳とお砂糖私もそばでお相伴した。

小野さんはマーマキュリーである、悲憤の涙をふるつて帽章をむしつた當年の面影

いづこ。たゞ一個瀟洒たる若紳士、うちの兄様なんかよりよつ程あかぬけて居る。あすこのグラウンドには四つ葉のクローバがたくさんあるとかきいたけれど、まさか取つて來て頂戴とたのまれもせず……。

『英語會にはお出になりませんでしたな』

と云はれて、匙をふくんだまゝ、

『でもあまり綺麗なお嬢さん方がいらつしやるさうですから私なんぞ……』

と吾作らしいしくもやつてのけた。

兄様つてばワイフ問題について、

『イヤ、どうして僕なんか後がつかへて居るからね、まづ此方の先生のかたでもつけてから……』

笑ひく／＼デロリと私を御らんなさるにくらしさに、

『まあ、ていのいゝことを……ウソよ小野さん、來人がないのよ』

『それやこんな小姑ここうがあるからさ』

何處どこまでお口くちのへらぬ兄様にいさまだらう。いくらでも云いひ返かへしてやりたいけれど、お客きやく様の前まへでけんくわもであるまいとだまつて仕舞しまふ。

『それで清子きよこさんのお目出度めでたはいつですか』

なんて小野おのさんまでお人ひとのわるい。

『それがね、何しろ御本人ごほんにん御理想ごりきやうが高たかくつて……自分の御面相ごめんさうなんぞ棚ななへ上あげて』
『ウン、ウン、ウン、兄様にいさま、ひどいわ！』

たいどうしても高等學校かうとうがくかう三年ねんやつて來た人ひとでなければつて云つただけで御座ございますわ。洗濯屋せんたくやが來た。兄様にいさまのワイシャツと、私のオレンジのじゅばんの袖そでを出だしてやる。夕飯ゆふのおかずはオムレツとそら豆まめのお汁じゆ、炭すみつぎそへて小さなお釜かまに御米おこめをかける。小野おのさんは五時じつ過ぎおかへりになつた。

とんぼの羽はねを切きつてそつと制服ふくの背中せなかへ止とまらせて上あげたら

『あ、君』

つて、兄様つてば、つまんで取つてお上げになるのなもの。

これも日課の一つか兄様は夕方きつと電話で池田様とおはなしが始まる。おとなりの電話を借りて……。きいてると、

『大きい坊ちやんお在なすか』

串談ちやい、大きい坊ちやん、獨法三回の五尺五寸もある偉丈夫なのよ。乳母が呼ぶのをそのまゝに御友人間でニツクネーム代りにとはつて了たんですつて。

『モシ、あ、僕だ、君。今日はえらかつたよ、君だつて君！』

兄様がやさしい聲でお話しなされる時には人なつこい調子でいらぬところによ、
『それで君、だからねえ君、困るんだよ君、いゝかい君。わかつたか君』

自動電話だつたら料金で兄様のお小使ひマイナスになつて了ふ。氣の引ける程の
長話し。

御飯後散步つて出かけなさる。私はかしつまらないわ。お隣りの百合子様も湯上に
に緋博多の帯美しく、お女中をつれて出ていらつしやる。夜店の植木が買ひに行
きたい。あゝ母様、早くかへつて頂戴ね。さびしい、私。

こんな時高山さんへ行つてオルガンでもひきたいけれど……櫓に立てば肩をおほ
ひし黒髪や。

『あの大空に照る月の、かけに憧れて昔より、いくその人や逝りにけむ。あゝ海洋
の底ふかく、沈める眞珠を探るべく、いくその舟や沈みけむ。花を浮べし川波に、
映るをそれと掬へども、碎けて跡はなかりけり。道の光は淡くとも、無限を慕ふ人
の子の胸にもやどれ空の月』

花つみのする夏の夢

はすのはなぶねさをとめて

なにをながむるそのすがた

なみしづかなるはなかげに

きみのかたちのうつるかな

きみのかたちとなつばなと

いづれうるはしいづれやさしき

三ッ組にした髪かみのしつぽをつよく引ひばられて眼めがさめた。登志としさんクスわらく笑ひながら

『濱はまへ行きませうよ、従姉様ねえさま、來たてにばかり早起はやおきしたつて、この頃ころはどうしたのよ。だん／＼この比例ひれいで進すすんでいつたら歸京時分かへるじぶんには一日寝るいちにちねのね』

『馬鹿ばかにしてるわ。エ、いま起きてよ、……朝あさつばらから安眠あんみん防害ぼうがいだわ。貴女あなたゆふべころげて人をひとけとばしてちつとも寝ねかさなかつたもんだから……』

ねむい眼めをこすりく枕まくら許もとにちらばつてるピンや前櫛まへじを探さがしあて、髪かみをとめながら蚊帳かやを出でる。

薄紫うすむらさきの朝雲あさぐもたなびいて、江えの島しまのあたりは夢ゆめのやう、静しづかなる朝あしたのさまよ。蓮はす池いけの方ほうではらくと露つゆのこぼれる音おとがする。

『濱はまへ行いかなくつて、従姉ねえさま様』

『エ、く』

お揃そろひの華手はでな牡丹ぼたんの浴衣ゆふたに、帯おびも緋ひ繻子じゆすの七寸すんはう巾きんを小ちひさく結むすんで、つれ立たつて庭先にはさきの枝折戸しをりどから出でた。薄紅うすくれなひの可愛かあいい龍田たつたがたくさん咲さいてゐる。玉たまのやうな道みち芝しばの露つゆふみわけて、

みよしの、花はなの香かや、

住の江の松の風

その風がそよふきて

その花が今日かほる

春しもぞ白雪や

消えなくに出でゝ見よ

見つゝこゝ八千種の

一もとは花いかに

うれしくも樂の音や

十六夜の宵の灯に

登志さんは透き通るやうに好い聲だが、惜むらくは少しふるへる。前髪こそ出してゐるけれど、十八にもなつて、それも私より背の高い人が、いつまでお下げで通すつもりだらう。三ッにあんだごく先を一寸眞紅なリボンで止めたのがたまらなくハイカラで好い。

オレンジ色の光りを浴びて、まばゆいやうに輝く金波銀波、打つゝく白砂青松、富士の裾にもバツと薄く朝日が映じた。

老も若きも男も女も三々伍々、さまよふ中にまぢつて二人はぶら／＼一まはりして、うちに歸つたのは蟬時雨ふるやうな七時過ぎ。

『乳母、お腹が空いちやつた』

『ばアやすく御飯にしてね……』

井戸ばたで砂まみれの足を洗ひながらわめく。

滅多にお叱言も有仰らぬけれど、あまりお行儀が正しく物がたいので、何よりけぶつたい伯母様が、昨日一寸御歸京なすつたので、登志さんも大よろこび、御飯後はいつも二時間の復習だけれど、けふはどうでせう二人ともうちは片手に長くなつて、くすぐりつこしたり背中を打ら合つたり、大きな聲を立てゝ笑ふ。

お隣家の二階からまた手風琴で『己が姿を花とみて……』が始まつた。毎日／＼

根よくくり返すことつてそれが十八ばかりの中學生なのだからあきれて仕舞ふ。

十時のお茶に藤村の羊羹の折を開けたから、露のたれさうなそれを厚初にして、玻璃器の菓子鉢に入れ、二人して兄様達のとこへおしかけて行く。

はじめは此家に伯母様と登志さん達兄妹であらしたのですけれど、私と兄様とやつて来てから、兄様と武兄様は山川様のお離れへあづけられたの。いゝ氣味よ。だつて私達をいぢめてばかりゐるんですもの。でもお二人は高等文官試験を受ける御準備なので、ウツカリ行つてさわぐと叱られてよ。

お庭口からお椽の方へまはつてみると、六疊を二間通したお書齋に、うちの兄様は居ないで、登志さんの兄様と大野さんが夢中になつて腕相撲をして。

『今日はア!』

『兄様ア!』

いくら二人でクス／＼笑ひながらとなつてもきこえない。登志さんふりむいて、

あの美しい眼に物云はせて、手早くその蚊帳の釣手を外して兄様の黒メリンスの帯へつないで、はしを柱にくっつけて知らぬ顔。

『兄様ッ』

更に耳もとでどなるとびつくりしたお顔上げて、

『あゝまた来たか』

だつて、すみ分だわ。きのふも伯母様にあれほど二人をたのみますくつてくれなく云はれて、やれ女のお守は厄介だの、こんなベソ子嬢はね子姫の監督は出来ないのつて、散々恩に着せて引うけながら、一度も見舞ても下さらないで、また来たかですと。

『おめづらしくはありませんけれど少しお裾分を……』

袂のかげから羊羹を取り出すと、

『御馳走さまだね、ま、上つて遊んでお出で!』

現金主義げんきんしゆぎな方かただこと。大野おほのさんは私の顔わたくしのかほをみて、

『御無禮ごぶれい！』

つて高いお辭儀じぎ、登志としさん他方そつぽうむいてすまして、腰こしかけた足あしをぶら／＼させながら唱歌しやうかつてる。私はわたしはじめになつて

『兄様にいさま、すみませんけれど新らしい帝國文學ていこくぶんがくおあきになつてましたら拜借はいしやくな、ちよつと』

『よし』

いきほひよくお立ちたちになつたとたん、きつく後うしろにひかれてよろめいて、ふり返つて御覽ごらんになつた。

ワアつて登志としさんはにげ出してゐた。私もわたし一緒しよになつて飛び出として來たわ。

おひるには乳母はあやに手傳てつだつてせまい臺所だいどころでの大立おほだちまはり、二人ふたりともレースでかざつた料理前掛胸れうりまへかけねからかけて、後うしろは十文字もじじに袖そでをかうからけて、凜々りんりんしいでたちで

あるが、小縫を三枚に下ろすつてキャア／＼云つても、ちつとも庖丁が切れないでこれちや皮むきだつて笑ふ。

食卓にならべられたのは、眞黒こげのしほ焼きや、酢のきゝ過ぎた胡瓜もみ。でも黒焼は癪の薬だの、酢をのめば骨がやわらかくなるのつて、やまずに口きゝながらみんな平げちやつた。

長椅子に凭つて女學世界を見てると、登志さんはヴァイオリンをかつぎ出してキユー／＼やり始めた。二時頃からまた濱へ出かける。經木の海水帽まぶかに、草いきれの中を走りぬけて……。

立ちならんだ海水茶屋、見渡せば浴には數しれぬ人出、黒色、水色、時色の水泳服、黒白だんだら龜甲形のメリヤス水着、赤銅色の自然服、ブイにからんでジャブジャブやつてる女や、板子かゝへて浪乗りの令嬢、深碧の空高く晴れて、バツとくだけの浪がしら。

うちの兄様達も来てゐらつしやるかしらと探したがどうしても見當らぬ様だ。さうくきのふ私のところへ舞ひこんだ何だか妙なハガキ。

『生は貴女の文中に時々引張り出された者の友人です、目下當地に滞在してゐます。失禮と存じてお訪ねもいたしません。毎日眞黒になつて濱で泳いでゐるのがそれで御座います』

だつて、みんな同じやうな人ばかりで、どれがどれだかわかるものです。正銘の印度人は黒の下帯してゐる強力で、足のうらと笑ふとき剥き出す齒と眼の白いとこばかりだつて、化物の様だ。

濱で名代のゆで小豆、うちの兄様はね、お一人で九杯召し上つたんですつて。私が「まあ」つてあきたらもつと食いたかつたんだけれど、もうお錢がなかつたからよして來たんだつて、ホ、ホ、ホ、。掛行燈に『××名物、一杯三錢』と薄い紅筆のあと。

花ごさしいた様臺を二人で占領してたのに、登志さんの方へならんで腰を下したのは、早稻田の徽章つけた夏帽子かぶつて、皇太子式の口髷美しき白飛白の人、羽二重の兵古帯なんかしめてよく××館のあたりで見かける人で、なれ／＼しい笑顔を見せて、何か云ひかけさうに見えたので、登志さんの袖を引ばつてふいと立ち上つたら、痛快、ばたんとはね上つて、まさかころげ落ちはしなかつたけれど、アツと兩手をもかくやうにのばして、いさいと云つたらなかつた。歸途に東家の前を通つたら、二階の椽に芳子様が立つて手招きしてゐた。早速はひつて行くと芳子様も下の廊下まで出向へて、

『いまね、あなたのお兄様がお鄰りの室へ來てゐらつしやるのよ。面白いから……』
『うちの兄様が、あらさう、どんなお方なの友達かしら』

『やつぱり大學の方だわ。園池様でね、眼鏡をかけた立派なお美しい方よ』
『ちや私の知らない方だわ。みつかると叱られるからしづかにしてませうね』

廣い階段を上ると右の三番目が芳子様のお室、小母様は下階のお座敷へ話しに行つていらつしやるとかで見えなかつた。暑い／＼と兩人は汗でへばりついた後れ毛をかき上げつゝしきりに額に麻のハンケチあてゝるので、芳子様はわらひながら、水のたら／＼たれるやうな水蜜桃をむいて下すつた。此室からは濱が一目でまだまだ盛んに黒坊主や印度美人が活動さいちう。

鄰室の兄様はまもなく歸つて行つた。
そら、と欄に身をのり出して、

『兄様——ア』

と呼んだり

『百合子様の兄様ア』

と手をふるやら、兩人が下らないまねをしたものだから、とう／＼お隣室の方にもつかつて了つた。私が會釋すると駄體を返して笑つてゐらした、白飛白をみじ

かく召した背の高い後妻がよかつた。

『お百合さんの眼つきは素的だわネ』

『夢二式つて云ふんですもの。大きくて黒くつて二重まぶちで睫毛が長くつて。この目、一度閃めかば、いかなる男子といへども、いかで参らざるを得んや……』
年下の二人に散々冷評かされる。でも私はこの頃こんな人達の相手になつてるのはわづらはしくてなりませんの。

夕がたお風呂にはひる時、私が登志さんの足をふんで、思はず『痛い』つて云つたのでまた大笑ひでした。

長い袂に浴後の風を心地よくはらませて、夕飯の箸とつてるところへ、兄様方がお揃ひでゐらしつた。武兄様は帝國文學を私の机の上において下すつた。先刻の事を思ひ出すとお氣の毒になつた。

散歩に行かないかつて仰有るので大よろこびでお供する。ステッキ打振り／＼暮

の煙薄紫に、その後から私たちは浴衣のもすそつゝましう取つてつゝく。烈々たる天日は箱根山のかなたにかくれて、しづかな夕映の雲の色！

いつかまた海岸へ出た。する分知つた顔の人にも出合ふ。一々頭を下げるので首が痛い。先刻の園池様とおつしやる方にも逢つた。江の島の灯が美しくまたゝき出す。夜は波の音が次第に高くなる。

うちまで送つて下すつた兄様達を、水蜜桃のジエリーで引とめて、椽がはでいろくのお話。

ふたり
二人してさす一張の

傘に姿をつゝむとも

情の雨のふりしきり

かわく間もなきたもとな

なんてガラにもない武兄様が口ずさむ。私も一しよになつて

顔と顔を打ちよせて

あゆむとすればなつかしや

梅花の油黒髪はなぐらあぶらくろかみの

亂れて匂ふ傘のうちみだれてにおふかさのうち

登志さんとしさんはうちの兄様にいさまつかまへて、明日伯母様あしたをばさまのお迎へむかひにみんなで停車場まで行く約束やくそくした。まあ駄目だめよ、兄様達にいさまたちはおみやげのお菓子くわしが目的もくてきなんだから……。

十一時じゅういちじを報つたのでお兩兄ふたりは口笛くちふえふき乍ならおかへり遊ばす、私等わたくしたちは蚊帳かやにもぐりこんだ。床の間とこまにはほの白い百合しろうの花はながつよい香りかきをたゞよはせてゐる。月つきなき空そらに星ほしのさゝやき……。

ゼラニウム

けふは午後から松岡様へ伺る。朝氣まぐれにウキンナに結ふてみたら、いつになくよく出来て、襟元に淡紅色の刺繡入りリボンを蝶と結ぶ。ルイザより二つばかり若く見える。もう／＼帯が思ふやうにしまらなくて泣きたくなつた。行きがけに〇〇園で、燃ゆるやうなゼラニウムとヘリオトロープ一鉢買ふ。上野から山の手線電車で……。

洋傘をたゝんで三つばかりの段を上ると、杉の生垣ごしに。

『おや、百合様』

『一雄ちやまう。』

空氣草履の音もかろくはせよつて、私は一雄ちやまに飛びついた。レースでかざつた自エブロンかけて、眞黒な眼々に青いお頭、放さじとかたく抱へて頬ずりする

と、奥様はほゝ笑んで。

『一昨日父ちやまが、涼しいよ、つてこんなクリ／＼坊主になつて了ひましたのよ可笑しいわねえ。生れて初めてかみそりあてましたの』

『あゝ父ちやまは……奥様、おめでたう。一雄ちやまもお目出度う』

『は、有がたう御座います』

壁にかゝつた角帽ももうお頭にのる事はないてせう新法學士、松岡勝氏寵をあつめ顔を、バナマ帽子のにくさよ。

奥様は一雄ちやま抱き取つて、あちらの方が涼しいからと仰せ下さるまゝ、何氣なくお後についてお離れへ行つたらば、お留守だとおもつた御主人公はじめお友達ともたちの三四人、お鼻をそろへてゐらつしやるのにびつくりしよげて、そつとお様から次の間に上る。

松岡様と伊田様とが出ていらして、御挨拶遊ばした。唇まで出かゝつた御祝辭も

すつこんでしまつて、たいお辭儀だけしとく。

奥様お膝の一様様をゆすりながら、

『おやせ遊ばしたわね、貴女』

『さうですか』

『先刻お顔みるなりさう思ひましてよ、御病氣でも遊ばしたんぢやないこと……』
さうぢやないの、まアどう遊ばしたのでせう——』

『夏やせでせう、きつと！』

と笑ふと、

『いゝえ、先日からお目にかゝる度おやせなさるんですもの。あまり御勉強なさるからですよ。去年の秋頃御出京の時は、ほんとにいゝ體格であらしたのに』

お人のわるい伊田様までが、

『さうです、僕が正月お故國でお目にかゝつた時にはずつとふとつていらした

「……」

『それは私、田舎にゐると、おさつばかり食べてるからでせう』

さうおつしやる奥様のやつれ給ひしことよ。花の面影いたいたしきまでかはつたお肩の細り、お顔のとがり、なんぼもうお二人のお母様におなりなさるのだとて、これがお二十一や二と見えませうか。

しつくりと紅絹うらの長い振りを揃へて、華美な紋羽二重のお被布すらりと、御一緒に歩きましたも、つい昨日の様に思はれるではありませんか。

ヴァイオリンが得意で、指が長いからピアノもお上手、それに英語が出来て、随分キビ／＼と氣の勝つたハイカラ様であつたのが、引きつめた三つ組の束髪、やつれた頬の青白く、神経質的のお眼が一きは大きく美しい。

たつた一人の子どもにおはれて、こんな意久地がなくつては仕方がない。この頃は雑誌よむ間も手紙かく暇さへありません。たのしみは夜涼しい蚊帳の中につかれ

た身を横たへるばかりで、なんて情ないこと有仰るんですもの。女をんなの天職てんしよくつて……誰だれでもかうして苦しんで子どもを生うんで、育そだて、そして年としとつて、死しんで了しまふのでせうか。

『デカンショくで半年はんとしやくらす……』

なんていきなり伊田いださんが蠻聲はんせい張り上げて歌うたひ出す。

『女をんなつて實じつによく笑わらふ動物どうぶつだ！』

『あら』

と奥様おくさんと顔かほみあはせたら

『もつとも若い女わかをんなの身上しんじやうは笑わらふところにあるのだからな』

『一體たいそれ誰たれのこと？ 奥様おくさんにげ出だしませう、どうせ三人さんにんに二人ふたりでかなやしない。

おぼえてお出遊いであそばせよ、ホ、ハ、ハ、ハ、

一雄かずさま様は女中じやうちゆうにせをはれてお使つかひに出でたあと、二人ふたりは椽えんに腰こしかけて話はなしました。

夏崎様のお噂をきいて、私は悲しくなりました。

立派に大學まで卒業あそばしたお方でも、家のため親のためならば、是非なく故郷の草にうづもれると有仰るものを、私が女の身で我まゝばかり。女一人は打捨つたと思ふて下さいと云つたらば母様は泣いてゐられた……思ひくらべてなんだか涙がこぼれ俯いて了ひましたの。

あはれたいかりそめのおんめもじを、永久の別れとは知らざりし、今ははや海山へだてゝ三百里、いづれの日にか、またと相見る折やあるべき。あゝ夏崎様、あのエハガキも、御本もカードもお手紙も、みんな／＼おかたみとなりました。はかない青春の夢の名残でございます。十八年間の御勉強も何のため、かくなりゆきし運命とは云へ、いまさら御家庭に囚はれて了ふほどならば……勿體なう御座います、有爲の才を野に捨て……

思ひみだれて、十坪の庭をみつめたまま私は身動きもしませんでした。

先日伺つた時お机の上にあつた紅い花の鉢は、さびしく庭に下ろされて咲き残つて居りました。三寸ばかりであつたダリヤの苗も、三尺ほどに丈のびて、よわ／＼しい莖が重い花をのせてゆらめいて居ります。お手づからの紅茶のおかげんが舌だるい程甘かつたのも……アルバムを拜見してゆく中に我が送つたのをも見出して顔を紅めたのも、今は主なきこの室よ……、まだ本箱もそのまゝにおいてある。我にもあらず眼をやつたら。

「夏崎様の本箱には何か面白いものがあるかも知れませんが、引出して御覽遊ばせな」

「エ？」

「一時御歸國遊ばしてもまたすぐに、出てゐらつしやるおつもりで、荷物なんかもそのまゝにしてお立ちでしたから、あのもうとても出京はおぼつかないから、みんな送つてくれつて仰有つて……ほんとにあの方もお氣の毒でございますわ」

額にかゝる後れ毛を細い手でおかき上げになる。

『奥様とももう直きにお別れでございますわね、さびしくなつて了ひます』

心から云つた私の聲はふるへてゐました。

『えゝ何處へ左遷になるかわかりませんが、十一月頃までには……私だつて知らないところへまゐりますのは……どんなに心細いか知れません』

何のかのと云ふものゝ學生時代は室咲きの花のやうなもの、御卒業の御よろこび申上げる言葉の下からまたすぐにこの悲劇がある。奥様のお眼にもきよい白露がやどつてゐえました。

『あら一雄様、小母様のところへゐらつしやい。ね、ねほらお月様が出てゐますわきれいなものさまよ、さ、いらつしやい！』

奥様は食卓のおこしらへにおいそがしいので、一雄様抱こして外面へ出ました。ほのかに匂ふ月見草、道をせばめた雑草に露ふかく下りて、足袋の色も緑にそまり

さう』

『をば様、御飯が出来ました。百合様、百合子様、一雄と小母様』

奥様おくさまが呼んでゐらつしやる、私は一雄かずちやま抱だきしめて、月に背そむいて立つてましたの。青葉あさはをもるゝ月光げつこうは燦々さんさんとして肩かたに落おち、銀線ぎんせんの征矢せいやのやう。

お離はなれの椽えんには高い大おほきな人影ひとかげがうごく。

コスモスの頃

×

一夜非常に沖が暴れた、明くれば水天青一碧、空を流れる白い雲、水のせうらぎ風の光り、海邊に秋が立ちました。功さん（従弟）達にも秋が來た、今夜は送別の茶話會がひらかれる。

花やかなる灯影にてらされて、鉢植のゼラニウムは燃ゆるやうな色である。私はゆあみすませて、そゝいだ黒髪を冷たく肩にさばいて、絹房のうちは片手に席の端につらなつた。蚊やり香の煙りゆるやかにびいて一閑張りの食卓を二つならべてすらりと取りまいたのは、晴雄ちやんに一郎さん。右隣りの清子嬢、私と登志さんと妹の禮子。

どうせ尋常四年のお客様方が正賓なのでもの。中學五年の功さんは咳、一咳し

て今や戸隠山検談、いよいよ佳境に入る。

みんな小さな膝もくづさず、真黒な眼を擧げて、熱心にきゝ入つてゐる。隣席に座をうつした登志さんは、暗號電信で私にいろ／＼なことをいどむので、一つ大きく肩をゆすると、首をちいめて眼で笑ふ。

『功さん、お茶がはいりました。まあ一息遊ばせよ、皆さん、お一つ召し上れな、つまらないものですけれども……』

よい頃を見はからつて、かねて用意のおせんべいやおまんぢゅう、廣蓋にうづ高きを捧げいづれば、登志さんは長い袂を口にくわへて、かんばしい湯氣の立ちのぼるカヒー茶碗をみんなの前にくばる。

功さんはしきりとハンカチを袂にさぐり乍ら、

『登志さんにお百合姉さんは人がわるい、眞面目くさつて一緒になつてきいてゐるんだもの。いくらやりにくいかわれやしないせ。そら、そんな皮肉なことを云いた

そんな顔して……』

『あら功さんこそひどいわ、どうせ私たちはこんな顔で御座いますよ。だから悲観してゐるんで御座いますよ。いゝわ、功さんにはこのお菓子上げないから』

『いりませんよ、その代り、皆さん、こんどはお百合姉さん達がお話して下さるそうです』

『やあ、うれしいな、お百合姉さん、お百合姉さん、……』

『登志ちゃん姉さんもね、それがいゝ、それがいゝ』

手をたゝいて思ひもよらぬ包圍攻撃に

『ウッ、ウッ、私まだあちらに用事をしかけて居りますもの』

『私も……ホ、いゝ、いゝ、いゝ』

クス／＼と二人ともにげ出して来て、茶の間にかくれて笑ひ入つてると、まもなく晴雄ちゃん、天狗俳諧をするからいらつしやいつて迎ひに来た。各々に鉛等を

ながめながら、目をつぶり、眉をひそめ、頭を曲げて苦吟のてい。面白いつて「芋は黒こげ」だの『鯉が食いたい』だの『赤門前へ』だの、わざといろんなことを書きつけてやる。

やがて功さんが高らかによみ上げる、

『警官が、雁飛ぶ空に、狐つき』

どつと起こる笑聲

『露の朝、片瀬の濱で、ねぼけ面』

『名月や、おさんねぼけて、おまんちゆう』

『赤インキ、すみれ袴や、お茶の水』

なんて奇想天外より落下する、丁度清子嬢をお迎ひがてら見えた小母様も、あまりさわぎがえらいので感心してお、縁に腰をすゑておしまひになる。

それから線香まはしが始まつて、何でも『モ』の字が頭字につくものを云はなければ

ばいけないとある。

『毛布』だの『餅』だの『紋羽二重』なんてグル／＼まはしてる中はよかつたが、私が『木賃宿』と云つたら、秀逸だつて大喜び。登志さんは『モ、ンガア』つて功さんに渡さうとすると、そんなものはないつておし返す。あると云ふ。散々争つたら仕方なく譲歩して『モ、ンジ屋』と云ひ直す間に、登志さん

『ア、熱、熱！』

つて三分ばかりになつたのを一間も先へ投り出して仕舞つた。

こんどは茶碗まはし、手拍子取つて、

『モシモシ龜よ、龜さんよ』

清子嬢など赤髪お頭をふり立てゝ歌ふ。しまひには誰でも一ついつ歌をうたはなければならぬことゝなつて、晴雄ちゃんも眞先に「少年團結白虎隊……」

と可愛い吟聲をはり上げる。

お次は一郎さんが負けず劣らず

『霞たなびく山々の、盛りの花をながめんと、いななく駒に鞍おかせ』

『春は、春は、櫻咲く向島、ヨイコラセ、ヨイコラセ、オール持つ手に花が散る。』

花が散ウる……ウイ！ウイ！！』

功さんお得意のボートソング。

私は何もしなかつたので、立つて座敷中を三べんまはらなければなりませんでした。

『御苦勞様でしたねえ、皆様、もうお眠いでせう。おかげで面白い御座いましたわ、』

まアもう一つお茶でも召し上れな』

『これで功さんたちが歸つて了つたら、どんなにか寂しくなるでせう。ほんとにそれが思はれてなりません』

登志さんがしんみり云ふと

『我儘者がゐなくなつて、がっかりするつて顔に書いてある』

つて一郎さんがませた事を云ふので失笑した。妹は私の膝を枕にして了つた、明けはなした縁側から水のやうな夜氣が流れこむ。柱にもたれた登志さんの横顔は神神しいほど美しう御座いました。

×

『さようなら』

『御機嫌よう』

『御健全で！』

打ふるハンカチ、振りむく帽子。ことし始めて袂を人形にして、襷高な小倉袴を短かく召した功さん、晴雄ちゃんとい一郎さんは桐の帽章、可愛らしい制服つけて小さい靴をふみならし、幾度か立ちどまつては手を上げる。

私達^{わたしたち}は高い砂山^{すなやま}の上に立^たつて、夕日^{ゆふひ}を浴^あびて田圃^{たんぼ}道を遠^{とほ}ざかり行^いく晴雄^{はるお}ちゃんた
ちの姿^{すがた}をいつまでもいつまでも見送^{みおく}つてゐた。胸^{むね}に抱^かへた袂^{たもと}をこぼれて、淡色^{ときいろ}色の
襦袢^{じゆばん}の袖^{そで}がひるがへる。妹^{いもうと}の紅^くリボンがハタ／＼と鳴^なる。

『功^{つと}さん！』

登志^{とし}さんが呼^よぶ。

『晴雄^{はるお}ちゃん、さよなら』

妹^{いもうと}が幼い聲^{こゑ}をふりしぼる。

『二郎^{じらう}さん！』

道^{みち}は松山^{まつやま}の間^{あひだ}に入^いるのである。遠^{とほ}くの涯^{はて}まで音無^{おとなし}川^{がは}が針^{はり}のやうに輝^{かがや}き、萬頃^{ばんけい}の稻^い
田^ださや／＼と、葉浪^{はなみ}ゆらいで、蜻蛉^{とんぼ}の翅^{はね}に秋光^{あきか}る。

『仕方^{しかた}がないわ、晴雄^{はるお}ちゃん達^{たち}だつて明後^{あさつて}日から學^{がく}校^{こう}が始^{はじ}まるのですもの。ネ、さ、
禮^{れい}ちゃん！ねえ登志^{とし}さん』

「禮ちゃん。ね、さ」

手を執つて歩をかへせば、清く澄んだ初秋の大空に、夢のやうな新月がほの白く浮んでゐた。

×

お隣家の登志さんは美人である。私が華手好き、登志さんはちみ好き、白地モスリンの單衣に麥わら色の山吹色と、紅のはいらぬ藤色羽二重の帯をしめてゐる。頭高な、横と後をつめた第一高女式の束髪に水色リボン、輪廓の正しい細面、濃い眉高い鼻、細いけれども凛とした眼、母様の御秘藏つ子なれば、十七の年よりは幼くて、随分我まゝも云ふけれど、私まう兩袖でちつと抱きしめて頬すりもしたい程可愛くて……。

世に時めき給ふ父様をもつて、何不足ない家に生れて法科の兄様もゐらつしやれ

ば、姉様は男爵家にお嫁ぎ遊ばした。けれど登志さんは憎い／＼病魔のために、あたら勉強盛りを學校にも行かれず、この別荘に引こもり勝ちなのです。佳人薄命、いたましきおん身の上よ。

この一夏を避暑に來て居た快活な功さん達が歸京て仕舞つてから、つまらないので今まで程うちへ遊びに見えなくなつた。

紅や花色の絹絲の糸巻をまはりに散らして、熱心にお裁縫してゐます。お庭にスモスの桃色のが澤山咲く、今年は色が濃過ぎて輪も大きい。

小ぢんまりした四疊のお室、まはり縁で丸窓があつて紫檀の大きなお机に青貝入りの硯箱、ガラス戸の本箱にはまだ手ずれもせぬいろ／＼の御本が脊をならべてゐるけれど、登志さんは讀書が嫌ひ、音楽も嫌ひ、お琴にもオルガンにもちりをためたまゝ、一度も手をさへふれた事はない。

この人の一番大切なものは、箏箏の中にしまつてある——横にすると目をつぶる

金茶色の髪渦まいた、可愛い大きなお人形さんです。

『お母様』

つてからかはれてよろこんでゐる。

私は放髪おはなりの頃から、一度もお人形にんぎょうなど持つてあそぼうとしたこともなかつた。荒すみたる我がおひたちを懐おもふと悲かなしかつた。

お人形にんぎょうについて好きなのはお裁縫しごとです。お母様かあさまのものでもお兄様にいさんのお袴はかままでみんな登志としさんがお縫ぬひになる。白い顔かほを俯うつむけて、チク／＼と針はりをはこばせる。

あらい紫矢飛白むらさきやがすに燃ゆるやうな紅絹もみうらが光る。

『何なにがお出来できになりますの』

ときくと、

『私わたしのお羽織はおりよ』

頬ほさしよせて、小い齒ちひさはでブツンと糸いとを切る。

いろんなお話なかに、お兄様が出てゐました。

『百合ちゃん……』

柱によりかゝつて膝をお抱きになる。

『百合ちゃん、大學でね、ことに一高出身者の間に貴女の噂が盛んですよ。才媛男を殺すとは春秋にでもありさうですね』

『さうですか』

『強い、強いって云はれてますね』

『さうですか』

許せ、夢なる母をすら、忘れて傳ふ頬の涙、つよいんでも何でもないんだ、人主義だからです。孤獨だからです。

『いつ東京へ歸へるんです、やつぱりあつちの方がいいですか』

『よ御座んすわ。一生東京で暮したう御座んすわ。田舎へなんか折々旅行すれば』

それでたくさん……」

私が三箇月の都會生活において得たるものは、思ひ上つた氣質と電車ののりかへにまごつかなくなつたことゝ、氣取つた帶の締め方である。と云つたらお兄様はお笑ひなすた。

私はお世辭と云ふものは云へない代り、口に出しただけの事はどうしても實行しなければならぬものと思つてた。女學校へでも行くお嬢さん達は、その反對だ。お約束したことでも何でも、みんな反古にして丁つて平氣だ、つて云ふと、登志さんが、

「ちや、お百合さん、私は？」

「貴女はねえ——」

まだ肩あげのその優肩に手をかけて、莞爾顔をのぞきこむと、

「百合ちゃんはどうしてそんな登志なんかと仲がいゝんです、ほとんど奇蹟のやう

だ。登志公には過ぎ者なんだ』

『なら私、捨てられるより捨てますは！』

爪はし清い指先で私の帯どめの金釦紐をつゝきながら……。

しまつた紅の唇から、折々こんな言葉がもらされるのです、私はいつも笑つてゐると、こんな強い悲しい恐ろしいことを云つても、お百合さんは笑つてゐる泣きになる。

山に海に燃ゆるが如き鋭氣を養ひて、都をさしてかへり来る幾千の男女學生、こ
とに／＼あの本郷通りなどは、どんな活氣にみち／＼てゐるであらうと思へば、流
石に胸もをどりますけれど、母と妹と、またこの可愛い人と別れて行きともない：
……………。

エ、登志さんの御病氣？ それはあの、あまり人中へなどお出になるといけません
んですよ。脳がおわるくつてね。

そんなリボン澤山な、マガレットまがひの髪は嫌ひだつて攻撃されて、私はウキ
ンナを渦巻に結びかへました。二人は夕方になると、よくつれ立つて散歩します。
龍田山の秋草や、廣瀬河畔の夕陽や、野菊の花の薄紫、濃海老茶のわれもかう、
くさむらに尾花はわびしう人をまねく。

炎のやうな紅の雲の反射を浴びて、秋の野に立つ登志さんは、花ならば丈高き薄
淡紅色のコスモスカ、でなければ、ゆかりの色なつかしい紫苑であらう、世すれぬ乙
女、けど何とはなしに寂しくて。

X

袖を抱きて、燃ゆる彩雲仰ぎつゝ、秋の寂黙に泣く夕かな。門の柱に身を凭せて
オレンヂの夕映をながめてゐると、お隣家の兄様と登志さんも出てゐらした、月が
美しいから、今夜海岸へ散歩に行きませうとお約束した。

うれしくて、夜、手なれのハーモニカを取り出したが、すぐ捨て、縁に立てば、そよ／＼と涼しい夜風面をはらつて、玲瓏玉の如き明月中空に高く、私は心ゆくまでその光りを吸ふた。ぬれたやうにチラ／＼と松葉が光る。

枝折戸のそばまで行くと、かなめもちの生垣越しに花やかなお書齋の灯火が流れて、大きな兄様のいがぐり頭がうごく。

『登志さん、月が高くなりましてよ、お出掛なさいませんか』

『百合ちゃんですか』

『はア』

『行きませう』

パタリと読みさしの書物をおふせになる。

『登志さんは？』

『気分が悪いんださうです。もう寝みました』

と早、庭へ下りてらしたので、あら兄様だけならば、と思つたが、まさらいや云ふことも出来ず、俯いておあとに従ふ。

草にうづもれた小徑を、空氣草履の音のみホク／＼と耳について、ほう／＼くだくる葉末の白露、唧々たる蟲聲、いよ／＼照りに照り渡る月光、あまりに清ければつく息さへ、前髪の後れ毛がそよぐのである。はゝかるところはないけれど、何となく氣がとがめた。乙女心の恥かしさからではない。自重すべき我が身を思ふたからである。

ふりかへると、廣瀬河畔の松並木、枝ぶりひねた半面に白い光りを浴びて、下行く水のせうらぎの音もきこえさう。

サク／＼と心地よい砂濱をたどり乍ら

「お兄様……」

「何？」

と近眼鏡が月にきらり光る。

はるかに黒く横たはつた江の島、キラ／＼と水にうつる灯の影、遠く豆相の山々は薄すりとして夢のやう。吹きなぶらるゝ振りの袂を、ほしひまゝにまかせて、冷たい白砂にとんと膝をつくと、少し離れて兄様は兩手をくんできつとして立つ。

涼しい月、月から生れたやうな風、二人の影のみ黒く長く、どとう、どとう、と滑にくだくる金珠、銀珠……。

涯もなき大海原よ無限の神祕をたへた沖間、何だか魔物にでも誘はれさうで、泣きたくなつてきた。

『お兄様……』

と呼んだ私の聲はふるへてゐました。

『かへりますか』

『登志さんがいらつしやればよかつたのねえ！』

二人はいつかすりよつて居ました。ヒタ／＼と足もと近く金波のよするのままだはないで、見合す瞳と瞳……。

『百合ちゃん！』

『お兄様かへりませうよ』

つと身を翻へすと、懷をこぼれ落ちた桃色ハンケチの、浪打ぎわをまろび行くに小走りに三間あまりもそこをはなれた。

×

政志様、お手紙拜見致しました。

知らない方からのでは御座いましたけれど、至急親展とあるのにいさ／＼か胸さわぎもして、封おし切れば、まア思ひがけないことを有仰つて御座いますもの。政志様。

な、無限の哀愁を抱いて、もとは理想の花のかけ、クローヴァーしげる校庭を立ち去りかねた貴君のお姿が見えるやうです。

ご友人方が

『意氣地がない、わづか一年の失敗で涙を出したりなんか俯甲斐ない奴だ!』

つて有仰つたんですつてね。

何だかあすこを讀んだら、知らず／＼涙に誘はれました。ほんとにね、貴君なんかまだお若いのですもの、これからですよ。私達一高の入學試験に一度で通過する人の方がめづらしいくらいに思つてます。どうぞ來年は見事打勝ち、天晴れな御成績で御入學の出來ますやう、私はそれまで君のおん名を忘れますまい。願くば官報紙上に、甲斐あらしめて下さいまし。お奮起遊ばせ、政志様。

貴君は優しい、お氣がよいのです。自暴自棄にはならぬけれど、あまり御自分を悲觀してゐらつしやるのです、政志様。しつかり遊ばせな、世にたのむべきは

さう、私はもう姉様で御座いますもの、貴下より年が上ですもの。いつの間に、もう高等學校へいらつしやるやうな方から、姉さんと呼ばれるやうになつたかと思ふとは、笑われます。

御失望も、御悲觀も、決して卸無理ではありません。敗戦の御身を、白雲飛ぶ駿河の野に抱いて……え、おさみしいでせう。文藝の道に慰藉をもとめられるのも情的におなり遊ばすのも當然でせう。けれど政志様、女でさへ人によつて生きやうとは思ひませぬものを、見も知らぬ一婦人からの慰藉を切望してゐらつしやる——そんな事でどうなりますものか。

お察しはいたしますのですよ。丁度その頃は私も本郷に居りました。毎朝帝國大學前の通りはまるで人で造られた道の様で、頭の上を歩きたいやうでした。洋傘をたゝんでは小さくなつて、その人波の中をくぐりぬけ／＼しましたが、あの中に貴君もゐらしたのでせうね。一年間——或ひは永久に——なんて悲しいことを有仰る

たゞ自身の大なる勇氣と自信とです。他に同情を求めやうなことでどうします。私のなつかしい慰籍があつたら——と思ふて下さるはうれしいですけれど、ね、政志様、知らぬ婦人に手紙をやるのは墮落の始めではあるまいかと思ひわすらひました、つて。ね、だからもうこれからはこんな事なさらぬ方がよう御座います。

あのお手紙が、ウンかほんとか、それは存じません。けれどもいかにも眞面目で可愛らしいございました。何誰に何と云はれても決して御返事は差上げないつもりでしたが、貴下にはかりはひかされて、この一文をしたゝめました。前途多望のおん身、御自重御成功下さいまし。さらばよ、幸多く在せ。

政
志
様

百
合
子

華 嚴 行

チラ／＼と灯は流れ、ぬかるみ光る雨の夜を、勢こんでガタンと上野驛に、梶棒下ろされる。

たちまち五六の赤帽がよつて來たが、ひらりと下り立つた私は、黒毛襦子のアンペラバック肩からかけて洋傘一本の輕装。打ち合せてあつた花子さんと逢つた。すらりとした姿をコートに包んで、髭の長い束髪に白菊一輪、美しく笑んで手を取り合ひつ。二人は十一時十分發、日光觀楓臨時列車にのるのである。

汽車中では人にへだてられ、友とは背中合せに席をしめた。私たちのまはりには三井物産の社員とみえる五六人がかけてさわいでゐた。

打ち仰ぐ空は暗憺、ふりしぶく雨はたら／＼とガラス窓を流れる、明日の山路の想はるゝよ。

花子様は寢ようと有仰るけれどどうしてくねむられるのですか。向ふの腰かけでは、二人の紳士がうやくしく謠曲の本を手にもつて、

『時雨をいそぐ紅葉狩、く、ふかき山路を、たアづねむ……』

とはじまつた。こつちでは、

『力山抜く項羽でさへも、ヨートノホイ、虞氏の別れにや血の涙、イーヨートノホ

イ』

『腰の朱ざやは伊達にはさゝぬ。ヨートノホイ、人をきるとき、馬をきるとき、イ

ーヨートノホイ』

孤軍奮闘、本能寺、はては都々逸やら浪花節やら、隅々からませゝかへして、ワ

ア／＼ギャ／＼、なづけて曰く、

『洗湯列車』

と。

袋からバナ、やビスケットなど取りだすと、花子様は柿をむいて、その皮を肩としにボンと後へ投げたら、Mの字に落ちた、(それが未來の姓の頭字だと云ふので)すると氣取た若紳士が便所に立つたかへりみち、赤皮の靴でつるりと、それにすべつて尻餅ついた。氣の毒にもあり、失笑ださずにはゐられなかつた。

それでもだん／＼靜まつて、左右にゆられ／＼、一人／＼睡眠に落ちてゆく。花子様も兩袖に顔うづめて、眠つて了つた。私はひとりマジ／＼してると、薄暗い一隅ですら／＼とスケツチの筆走らして若紳士があつた。ポーアに頬をうづめてもせまり來る夜氣に齒がかち合ふ。

この時長外套にくるまつて寢入つてた華族面の若紳士が、洋傘ごと腰かけからころげ落ちた。

宇都宮につくと、みんな目をさまして顔を撫でまはすやら。おべんとうを買ひこむやら、私の隣席にゐる人は多辯で、ブツツリと後藤式にはさんだお髭の中から、

燃えるやうな美しい唇が目に立つ。霜ふりのソフトハット。二つ釦の背廣服、丸くつて黒い可愛い眼をくるく／＼させながら、

『中禪寺までおのぼりですか？』

つてたづねかける。

『はア、行けるとこまでまゐりますわ』

『お幾人ですか』

『二人です』

『えらいですね、御婦人連でさへそれだけの勇氣あれば——僕等アどうしたつて行かなければならん。いづれあちらでまたお目にかゝるでせう』

『暁深う、うれしや雲が切れて星が見え初めた。大切な前髪も何も忘れて、幾度か窓に顔おしつけてみた。』

日光暉についたのはまだまつくらなうちであつた、改札口を出るとそのまゝ、私

「私たちは一目散に電車の中へ飛びこんで了つた。」

單線で四十人のり二臺の電車は、汽車から下りた人の山に取りまかれて了つた。

お歳暮の鮎どころではなく鰯のやうにおしつけられて、もう、

「皆さん、これちやとても運轉が出来ません。もし、もし、どうぞ少し」

なんて運轉手が身悶えすれば、

「女でさへものりこむものを、間拔だからだ、君達ア氣が利かんからだ、女でさへも……」

連ののりはぐれた人達が、窓から首を出してのしつてる。もみにもまれるので羽織なんか一尺も肩をすべり落ちて了ふ。ガタン、ゴトン、そろ／＼と動きはじめたが、上り坂だから蟲のはふやう。星かげ一つ／＼薄れゆきて、鶴立ちこめし大谷川の朝げしき、直なる老杉、碎くる水、朱塗の神橋、朝嵐冷たく吹き落ちて、朝日の光りまばゆき迄輝き渡れば、草葉の霜がボタ／＼とつけ始めた。

岩^いゲ鼻^{はな}で電車^{でんしゃ}を降^おりると、こゝから麻裏草^{あまうしろくさ}履^はにはきかへつ。女^{おんな}だつてまけるものですか。有髭^{いげん}男子^{だんし}を後^{しり}にして石^{いし}でも犬^{いぬ}ころでも、け散^ちらしながら飛^とぶやうに進^{すす}んでゆく。秋^{あき}日和^{ひより}の麗^{うら}かさ。

紅葉^{もみぢ}はいまが九分^{ぶとほ}通り、ゆくてに黒髪^{くろかみ}の嶺^{いた}高^{たか}く、左^{ひだり}に大谷川^{だいやがは}の激流^{げきりゅう}清^{きよ}し。

『白雲^{しらくも}迷^{まよ}ふ山^{やま}のかひ、八百瀬^{やほせ}の岩^{いは}にくだけは

しぶきに虹^{にじ}を匂^{にお}はせて、十幾年^{いくねん}を谷^{たに}の水^{みづ}、

朝日^{あさひ}に榮^はゆる山紅葉^{やまもみぢ}、みな底深^{そこふか}く燃^もゆるかな』

馬^{うま}返^{がへ}しても休^{やす}まずに突進^{とっしん}したが、路^{みち}もないところをかけ上^{あが}らうとしたらば、夜來^{やらい}の雨^{あめ}に光^{ひか}つてた赤土^{あかつち}は、ものゝ見事^{みこと}につるりとすべつて、新調^{しんてう}の袴^{はかま}に泥^{どろ}の腰模^{こしも}様^{やう}。手提袋^{てきざく}から柿^{かき}がころげ出^だすやら、兩手^{りやうて}はべつたり。幸^{さい}ひ見る人^{ひと}がなかつたからいゝやうなものゝ、花子^{はなこ}様^{さん}と相^{あひ}かへりみて苦笑^{くせう}しながら、手^ての甲^{かう}でおくれ毛^けをかき上げる。丹青山麓^{たんせいざんふもと}に二瀑^{ふたふく}あり。東^{ひがし}なるは般若瀧^{はんにやのたき}と云^いつて西^{にし}なるは方等瀧^{ほうとうのたき}と申^{まを}す。お茶^{ちや}すゝ

りながら時計を出してみると七時十分すぎ。勇を鼓して奮道をわけのぼる。

晝なほ暗き杉木立、落ち葉にうづもれた木の根、岩かど、流石の私も思つたよりはけはしい道に息をはづませながら、はるかおくれた花子様をかまはずおいてけぱりにして、飛び上つてゆくと、そこに休んでた中學生の一群が、

『苦しいでせう、ひどい路ですよ、まだまだこんなところが一里もあるんですよ、上れますか』

だまつて莞爾うなづいて追ひこして了つたので、

『さア、行かう、女にまけてたまるものか。えらい奴だなア、女のくせに。寫眞に撮つてやれ、撮つてやれ』

またその先の學生連に追ひついたら、

『素的な草履をはいてるな、おい』

なんて云つてるので、自分の足もとに氣がついたら、なるほどまるみの龜のやう

にふさが下つて、泥まみれの足袋、紅潮した頬、今更の様にはづかしい。

紅葉のトンネるところよりこび乍ら、大平の森の中をぬけると、はるかに迅雷の如き響耳を打つ。華嚴！華嚴！ともうたまらなくなつて、瀧の茶屋まで一氣にかけつけた。

天風吹き落つ大華嚴、千仞の浪逆まきて、恨は霧と迷へるか。私の胸はたいく熱い思ひに満つるをおぼへて、無意識に岸上へかけ上つた。

巡查も住まぬか、あれ果てた交番の前から、草にすがり、小笹をつかんで、あやふく崖をふみすべり、結びめぐらした柵のこはれをくいつて巖頭に立つ。

散らし髪になつて、紫袴ひるかへして、こゝから飛び下りたらどんなに美しかうとも思つた。危岩に寄つて俯視すれば、たい轟々たる水聲、下よりとろいて、白刃を射る日光のきらめき、胸がふるへた、足もふるへた。

「あぶないく、若い女を一人そなたこへやつてはいけない。不注意ぢやないか

いかにぞ、いかにぞ」

「お嬢さん、あぶないですよ、女のくるところぢやありません、みんな心配してま
すから」

後からく下りてきた人が云ふてくれる。

「大丈夫、まさか飛びこみはしませんよ、ホ、ホ、ホ、」

と笑つたけれど、花子様に御心配かけてもすまないと思つて引かへした。

巖と巖との間から、直立落下七百尺、水烟濛々、湧き立ちかへる瀑壺の水勢、青
いゝ水の色、

「あゝ瀑壺の下まで下りて、見上げてみたい」

と我知らず口をついた。

こゝでなら私にも死ねるであらうよ。私も死にたくなつたならば、きつとこゝへ
来るであらうよ。けれど、けれど、女と云ふものは、かうして柵によつてたいなが

めるのさへ、思ふやうにはならないのもの。他の視線のうるさい故に。

巖頭の感の繪ハガキを幾組も買ひこんで花子様に笑はれた。

瑞西山中をそのまゝとさく中禪寺湖畔、湖畔の町はなつかしかつた。紅葉あやなるみづうみの、鏡のやうな面をわけて、ピカリ／＼とオールが光る。二荒神社の前で、またあの唇の紅い人に逢つた。すれちがひさま笑をみせる。私は知らず顔してゐた。洋傘の先で水面を打てば、みだれ散る雫の玉にも秋の色はうつれり。

この好景もほしいまゝにする事は出来ぬ。たゞいそがれるので、サイドにのどをうるほしたのも、立つたまゝであつた。再遊を心に期して、重たい足を引きずりながら歸途につく。

引ちがへに女學校の生徒が多勢、袴の裾をかゝげてのぼつてくる。下り坂の痛快さに、身ををどらして飛んで下りると、後から來た例の三井物産の人たちが、

「あぶないですよ、わづかのちがひだから、新道をいらつしやい／＼」

てどなつて居たが、

『おい、こんなのがいまに女權の擴張なんかと切り出すんだぜ、これだからお互に氣をつけなくつちやいけない。女天下！ 女天下！！ 女天下！！』

木のまがくれの聲のみあとに、くやしくもあり、詮方なさにふき出して丁ふ。道ばたにオーバを着た三人づれの學生が、崖の紅楓にステッキ引かけて、大きな枝をへし折らうとしてゐる、ふり仰ぐ黒い服、赤い紅葉、白い水、青い空、まるで小説の口繪のやう。

先へ行く角帽の人が、美しい紅葉の枝を肩にしてゐたが。何と思つたか道に捨て仕舞つたので『私、これ頂いてくわ』つて拾ひ上げたら、ふり返してにつこりする。襟にAの字が光つてゐた。

やつと岩ヶ鼻にたどりついたのは一時過ぎ、またしても人の黒山、狂氣のやうにおしよせる中をくぐつて、ともかくも電車に飛びのつた、花子様はと、二三度お名

を呼びながら、のび上つて車中をみわたせば、重り合つた頭の中からチラ／＼と髪櫛の寶石の光るのをみつけてやつと安心する。

幽邃の境、天の美趣、地の莊嚴、金壁燦爛の殿宇、打つ／＼朱塗の廻廊、三百年の古色蒼然として、自然の威と人工の妙とをきはめつくした東照宮は、薄暗おもく鬱々たる老杉の下に立つてゐた。ほとんどかけ足で見まはつた。

それから土産物などとのへつ／＼日光の町を歩いて、停車場に入つたのは四時半の發車前二十分。夕日まばゆき三等室のかたい座席となり合つて、ほつと息をつきながら、花子様は私の髪にとまつてた落葉などはらつて下さる。

夕風は紅のリポンを吹いてハタ／＼と鳴つた、赤ちやけた平野には、ほふけた尾花がわびしうふるへてゐる、故郷の秋や深からむ。(十月二十三日)

海こひし潮の遠なりかぞへつ／＼乙女となりし父母の家

品

子

鶴沼日記

(上) かるたのまとぬ

十月十日 土曜日 晴れ

五時に起きた。夢の様な残月はまだ薄すりと中空にかゝつて居る、手早く朝の用を済ませて髪を結ふ、もう長らく日本髪の癖が附いて居るので、何うしても丸髷にうまく行かない。終ひにはいらくして來たが、餘りいちづてると直き母様にまた廂ばかりかし氣にしているねと叱られるから、いゝ加減な處で思切つて、櫛箱をはずけて仕舞ふ。昨日のより出來が悪い。

午後から母様は諏訪さんへ行らした。でお留守居をしながら縫かけの羽織を縫つて居ると、お玄關に人の聲がする。直ぐ出て行つて見と思がけない和さんであつた

明日あしたの日曜にちえうに御親類ごしんるいの方が大勢おほぜいいらつしやるから歌留多會かちたかいをするつて、妾わたしをも招きまねに來て下くだすつたのである。まあ何うぞお上りと云つても否いへり今日はお使つかひに參つたのですからと、無理むりに式臺しきだいに腰こしをかけてしまつて、ね貴女あなたお母様かあさまにお聞遊ききあそばして宜しよろかつたら必かならずと來て下くださいましね、學校がっこうの本庄先生ほんじやうせんせいもいらつしやいますし、お優いちやんも參りますわ。ねつて仰有おつしやる。今母様いまかあさまはお留守るすだが、何外なにほかならぬ田内たうちさんの事こと。殊ことに歌留多かちたがあると聞きくものを、よしお許ゆるしなさらぬからつて何うして妾わたしが靜じつとして居ゐられよう。どうも魂たましひは天外てんぐわいに飛とんで、是非ぜひお仲間なかまに入れて頂いたきますとお返事へんじすると、きはめて御満足ごまんぞくの御様子ごやうす。ほんとに和かさんは女學校じよがくかうじ仕込こみにも似合にあはずお温順おとなしくて居ゐらつしやる。

・やが
聽て、

『では御悠ごゆくり明晩みやうばんね』

と身みを起おこして會釋成あしやくなされると高い 薰ヴァイオレットの香かほりがその 紫矢むらさきやがすり緋ひの袖そでと胸むねからバツと



立つ。お齡は妻より一ツ上だがお下げに緋のリボンを大きくかけて、まあお若くてお美しい事、東京の方は何故こうきやしいやでお綺麗だらうと、つくづく羨くなつて恍惚後影を見送つて居た。

夕方は映が美しかった。薄雲が樺色に光澤と光りを含んだ花やかさで。かう言ふ色をリボンにしたらさぞ髪の毛と調和するだらう。

夕飯の時母様に先刻の事をお願いしたら、あゝ田内さんならばとばかり、別に何とも仰有らなかつた。妻はホッと重荷を下したやうに嬉しかつた。

夜はお室に引籠つて久振に算術をさらふ。相變らず散々脳を絞つたあげく、ふと久子様は今年は縮緬の御紋付に縹珍の御帯が出来るんださうだつて事を思ひ出すともう、羨くはないが口惜くつて耐らない。尙且嫉ましいからだ。だが妻は今までも様に何か欲しいなんてねだつた事は一度もない。せがんで買つて貰ひ、ねだられて拵らへてやる様なのは母子の情が薄いのだ。何うして親と云ふものは欲しいと思

ふ當人のそれ一倍着せてやりたい。買つてやりたいと氣をもんで居らつしやるんだもの、出来さへすれば黙つて居たつて買つて下さる。その代り買へない時にや、何程せがんだつて出来よう筈はない。とまあ思つて居るが、何だつて妾には父様がな、いんだから仕方がないんだなど、飛んだ處へ考が外れて了つて、我乍ら腑がひなさに手帳をボンと投り出すと、お床の中から母様がもうお寢よと仰有る。丁度茶の間の時計が鳴り出して十一打つた。

十月十一日 日曜日 晴れ

矢の張佳いお天氣。併し朝は寒かつた。畑へお汁の實の茄子を摘りに行くと露にぬれた足の先がもうビリビリする。朝飯後髪を結びに行く。と道傍に今時分紫のすみれが二ツ咲いて居た。餘り可愛想だから摘み取つて手帳にはさんで置いた。

夫から女學世界へ短文を投書する。さあ今度の首尾は如何であらうか。母様は過日貰つた圖書切手を送つて、毎月女學世界を取つたらいゝぢやないか。何うせ小賣

店から買ふ位ならと仰有るけれど妾には惜しくつて何うしても手ばなす氣になれない。生れて初めて、懸賞文に當選して賞品を貰つたあの切手。お上手な方が聞いたらさぞ可笑しいであらうが、もう一生大切に寶物として藏つておき度い程に思ふ。

午後からは胸がワク／＼して仕事なんか手につかず、五時頃から支度を始めて、着物はあの紡績の澤山だと思つたが、和さんは平常でも銘仙なんか召して居らつしやるんだもの。妾も幾ら大切がつて藏つてばかりおいたつて仕方がないから。ぢや佳い方のを着て行かうと定めて簞笥から出す。格子のお召に葡萄色縮緬の變り裾が映て、我物乍ら今更に震ひ附き度い程佳い。悉皆着替て了つてから、妾だけ先へ御飯を食べる何だか嬉くて咽喉へ通らない。おまけに勿體ない事だが炊きたての御飯が熱くて／＼フウ／＼言ひ乍ら、やつと二膳終へて箸を投げた。あとは野となれ山となれ、茶碗も箸も洗はずに、行つて参りますとばかりで飛び出して仕舞ひ、お

優ちやんを誘つて見たら今髪をなで附けて居た。思がけない島田である。まあ何時お上げなすつて？　よく出来たわね。一寸そつち向いて御覽成さいと云ふと、くるとむけて羨しい襟足を見せる。矢はりおはまさんかしら。成る程よく出来て居るだが鬘が低くて、ちつと下すばつた風だ。何時でもだが、お優ちやんに何故こんなのが好きだらう。妻はまだ島田なら、思切つての高鬘で根元にキリ／＼と白丈長を巻いた、そして平打を一本さしたのが品がよくつて一番佳い。もつともお優ちやんに言はせたら、そんなのは野暮つたいなんて云ふかも知れないが。

島渡待ち合せて居て二人で出かける。御門内に美しく敷つめた小じやりに音立てて、輝やく様なお玄關からおとなふと。

『まあよく、え／＼先程からお待兼で御座います。何うぞ此方へ……』

小間使のまさか莞爾と出向て奥へみちびく。

皆さん丁度お風呂を召して居らした處。妻達もすゝめられるまゝに御一緒に頂い

て入湯る。

棚でも板の間でも滑り相に光つた廣い綺麗な湯殿で外はまだ暮れきらぬに、もう照り返のランプがかつくと輝いて居る。お加減はすこし熱いが、我慢してちつとしづんで、顔をしめし乍らふと見ると、まあ、流で洗つて居らつしやる夫人や、和さんのお身體の美しい事。まつ白くてきめが、細くてそれこそ玉のやう。散々海水浴でやき上げて日頃棕子を以て自任して居る妾——だつて尙且色の白い方は羨ましい。

だからこそ白粉もぬつて見のだがお優ちやんも膚のよい方ぢやないので、随分おもんで素顔を人に見せた事がない程なのに、此わりで見ると廣告なんか、十分一もあてに成るものぢやない。併し和さんやお優ちやんのムクムクと肥えて居らつしやるには驚いてしまった。妾は決して肥つて居る方ぢやないので、今も夫人にまあ貴女は今の若さにそんな事で何う成さると、叱るやうに云はれたが、何だか妾は、た

とひ肺病患者じみてるなんて言はれても、肥つて居ない方が嬉しいのだわ。

するとお化粧が始まつた。妾は夫人がお使ひ爲さいと言つて下すつたクインか何かを佳加減に——併し濃くつけてざつと洗ひ落して仕舞ふ。そして早さと着物を着始めて帯止のをバチンとしめ乍ら、大きな妾見の前に立つとくつきり映つた我姿、髪ふつくりと露を含んで水のたるやうな桃割のあでやかさ。うぬぼれらしう、しばらく鏡の中を見詰めて居たが、ひよいと氣がつけば和さんは、帯がひとりで締こなせなくて困つて居らつしやるから、手傳つて結んで上げる。

と、もう何度もお禮を仰有るいつかの女學世界のお嬢さんの初旅の中に丁度こんな處があつたつけ、と思ひ出して妾は微笑んだ。

懸て三人打連れてお座敷へ行くと、もうお客様は揃つて居らつしやる。大抵初對面の方ばかり、手軽く御挨拶をすませて座につく。小野瀬さんも來て居らした。重なる鬱憤、やり羽子のうらみ思はず白眼みつけてやりたかつた。まづ世間話しが二

ツ三ツの中に皆さんのお名前なども伺ふ。熊谷さんは中學校、中山さんは一高の學生、工科大學の沼川さん、早稻田の森田さん。鶴沼の小學校教師の本庄さん。

讀役はいつもの通り夫人で、妾等は源平に別れた。學校の先生なんてわりにちつとも取れないのよ。歌留多にかけたら妾の方が餘程上手だわ。小野瀬さん相變らずお口が達者でお人が悪い。妾こんな方大嫌ひ、だが高い聲ぢや言はないわ。だつて……ホーお優ちやんに憤られるから。

いく度か組をくみ直して戦ひ、分けかへてあらそふ。勝つたのだから負けたのだからで夢中であつた。

和さんは今年のお正月から大變御上達成すつた。第一敏捷いのに閉口して仕舞ふ。それよりお上手なのは熊谷さんだ。丁度妾と互角の相手——とは言へ、一騎打ちの勝負では大分骨が折れさうだ。中山さんもなかなかお上手だが、何だか氣ののらぬ様な取方爲さるので妾は嫌ひ。もう全精神を火と燃して眼中歌留多の外何物も

ない位でなけりや眞の歌留多の味は知れぬのだ。

一番お拙手な沼川さんと本庄先生は僕等はコンマ以下だからと自ら云つて隅の方に小さく爲つて居らつしやると、夫人の發言に皆さん大賛成で東が和さんに妾。西が熊谷さんと中山さんとお優ちやんとして一ツやつて御覽爲さいと云ふ。少し無理だとは思つたが、二人共瘦我慢張つて承知して、さあ一生懸命である。

眼をみはり札をねめつけたまゝ、お互の心臓のひびきはさながら蹄の音と亂れる

『はッ失禮ッ』

『御免ッ遊ばせ』

『參つた』

『失禮ッ』

不意にさけぶ聲あやしくかんばしつて、妾等は自分乍ら可笑しい程、絶へず指先がぶる／＼打震へる。齒がガタガタ鳴る。

かくて立つゝけての三番勝負に見ん事二度まで、相手を敗つたあざやかさ。皆さ
んはヤンヤとばかり口をきはめてお褒め爲さる。妾は和さんと顔見合せて得意の微
笑をきんじ得なかつた。そこで、暫時休息と爲る。その間にそつと座をぬけて便所
へ立つた。

障子を開けると清い外の空氣が水のやうにざつと流れこむ。まだ雨戸を明け放し
である。お縁側に月が美しくさして、木の影が入りみだれたお庭も、全で晝の様、
熱し切つた頬を冷やかな夜風がはらふ心地よさに、妾はしばらく手洗の側に立つて
居ると。何處かで蟲が鳴いて居る。ジジ、ジイと地の中へでも引入れられるやう
な聲だ。黄ばんだいてふの葉は絶へず梢をはなれて、ヒラ／＼舞つて来る。もう秋
と言ふ感がひしひし胸にせまる。折からわつと起こる笑聲。見返せばお座敷の障子
には花やかな灯影あか／＼と。

こゝのみは秋のあはれも外なれや

歌留多に更けし館のともし灯

室内へはいると急にまぶしい程紅く明るい。

歌留多もう一番やりませうつて熊谷さん。先刻の名譽を恢復したいもんだから、しきりに膝を進めて仰有るけれど、餘り遅く爲つてもと思つて妾はたい笑つて居ると、何時の間にやら夫人はまさに手傳はせて茶菓をお運び爲る。柿やみかんやお煎餅廣蓋にうづ高く――。さあ何うぞ――つて進められたが、流石歌留多場裏の女將軍も、食べる事にかけては戦場の勳ほど活潑にはゆかず、つひもじ――と御遠慮ばかりして居るので、わざ／＼林檎をむいて下さり、別に紙へお菓子を包んで下さる。そしてお茶を頂き乍ら愉快にお話する。皆さんのお國自慢やら失敗談、湧くが如し。

夫人も和さんもまだ引留める氣で居らつしやるし、内心残り惜しくつてたまらな
いが、兎も角もお暇申した時には何誰の時計も、もう十二時まはつて居た。

夫人と森田さんと沼川さんとで家まで送つて下すつた。月はいよ／＼玉と照つて草葉の露にきらめき、影法師長ひ曳く四人の下駄の音に蟲の音が、ハタとやむ。ぞつとして襟を引合はすと夫人はかゝへるばかりすりよつて、その和らかなお手を妾の背にお加へなさる。この美しく優しい夫人、和さんとは作さぬ中に聞くが妾は耐らず懐かしくて縋り附き度く思つた。

遠くテラ／＼する我家の窓の灯をのぞんで、森田さんが、貴女はあんな處にお母さんと妹さんと只た三人で住んで居るんですか。よく淋しくないね、女ばかりで——實にえらいもんだと、さも感心したやうに仰有る。

そりや父様が亡いと随分氣が強くなるものだ。妾だつて舊はこんなにお轉婆ぢやなかつたが。

門前でお別れして家へ駆け込むと母様もまだ起きて居らした。御挨拶し乍らすん／＼と茶の間に通つて、ふと見上げれば、家の時計は遅れて居る、十二時に餘す事

十分。

《中》 秋 高 し

十一月一日 日曜日 はれ

六時起床、一昨日結つた挑割の根が、つれて／＼堪らないので手早く直して花壇の菊を、冷たい露のまゝ一輪さし、例の通りお優さんを誘つて裁縫に行く。

しばらく束髪にしなかつたので、稽古場にはいると皆が珍らしがつて人の頭ばかり見て居るだが、矢張日本髪の方が似合ふさうだ。から廂にすると、何だか看護婦じみてるつて評判だ。侮辱にしてゐるわ。

お優ちゃん綿入は十時過ぎ美事に出来上つた。今度も亦、御自分のお羽織をお縫ひに成るんだつて。紫紺縮緬の三つ紋に白羽二重の裏は、なか／＼振つたもの。まあ／＼いゝね、いゝね、と皆が口も利けずに羨むのを、こんな物しようがないわ。

お母さんがいけないと言ふのを無理に買つて仕舞つたんですもの、まだね長橋様もこしらいて貰ふの。ほんとに温順しくて居ちやきりが無いわ。だから私何でも無やみにねだつて、おどかして遣るのよ、なんて笑ひ乍ら氣樂な事を云つて居る。お晝の休み時間にも、

『鳥渡、これはね私のお友達よ。昨日寫眞を送つて下すつたわ』
とそつと私の袖を引く。

見ればプロマイドの半身。帝大の制帽制服、眉の濃い鼻の高い口もとのしまつた凛々しいお方、角帽も一寸悪くはないねと恍惚見いつて居ると、

『オホ、お氣に召して、その方は文科で居らつしやるのよ。嬉しいでせう。だが文學士、なんか厭だわね。年中ビーク風車で銘仙一枚むづかしいんだわ。私なら實業家へ嫁きたい事よ。オホ、』

まあお優ちやんの十八番で弄ひかける。お優ちやんは私がなけなしのお小使を、

小説と雑誌にばかり、つぎ込むのを冷笑つて、その癖自分はおしろいや白粉や化粧水の選擇に、笑止な程氣をもんで居ながら、私の事を、文學狂ひだと云ふ。それはまあいいが、私何時文學士の處に嫁きたいなんて云つた。私はいくら好きだからつて、自分が詩人や文學者の妻になられるとは思はないわ。海軍オホ、可いわ、どうせ理想は、かないものよ。その美しい影にあこがれて居る中が花なのだから——あゝ不如歸の武男さんの様なのがいいんだわ。私こそ商人なんか大きらひ。お優ちやんは實業家々々つて口ぐせの様に云ふけれど。

四時に裁縫をしまつて藤澤へまはる。

何より先にまづ中央舎へよつて女學世界を買ふと、今まで待つて——待ちこがれたのであり乍ら、いよ／＼手に入つて見るとまた一種不念な念にもおそはれて、我知らず顔が熱くなる。がそれも時の間、矢張り堪へ切れず通を歩き／＼そつと短文の部を開くと、えええ今度も賞に洩れた。口惜しい。耻かしい。

家へは何と言つて歸らうかしらと、何か非常な過失でもしたやうな氣がする、もう歩くのも厭だ。この本をそこらへ投げつけて遣りたい。こんな事ばかり思つてふら／＼足も地につかず、買物をすませて町を出るとお日様は西におしづみ成すつてしまつた。驚いて淋しい山路をかけぬけて、ホツと息つけば、五日あまりの月がさやかに銀色の光をはなち初めた。

夜はもう夢中になつて女學世界を讀む。一番面白かつたのは『苦勞を知らぬ娘の日記』翠子さんはまあ何時もどうしてこんなにお上手だらう。わけて今度のなんかまるで私の心を見すかされたやうで耻かしくなる程である。して見ると輝く前途を夢み、甘き理想にあこがるゝ、盛春の乙女心は誰もこんなものかしらと思ふ。すればお優ちやんはさしづめこの中村さんである。

同じ裁縫の師匠に通ふ生徒三十七人。何れも農家の娘ばかりで、鍛持たぬ家のは私とお優ちやんだけだから、無理もないのかも知れないが、まあ一同の品性の下劣

な事、嗜好の野卑な事。こんな人達とは口を利くのさへ耻のやうに思はれる。たゞ其の中で語るに足るのはお優ちやん一人。それすら氣性が違ひ趣味が合はず、まだ眞の友の味と云ふもの知らぬ私と、同く文學の花の香に酔ふて居る方を、かぎりなく慕はしく、しばし魂は體を飛んだ。

二日 月曜日 晴

まあ朝の寒かつた事。いくら十一月に成つたからつて、かうまで現金でなくつたつて宜さうなものだ。もう冷たいと云はうより、足の裏がビリ／＼痛くつて堪らない。おまけに今朝は髪が出来損ねて、散々疳癪をおこしておそく一人で出かける歌など考へ乍ら静かに歩くと、半里の道の物の苦にならず、切角湧いた興趣を途中で破られるのが惜しくて、一層先生のお宅が、もつと遠ければよいと思ふ。

葱畑、菊の花、梢に赤らむ柿。色づく蜜柑。さては大根の干してあるのも稻をこいで居るのも、一つとして詩と歌の種ならざるはなく、

億兆の雀肥へたり稻の出来

はかなさは人も同じか桐一葉

今日ば妹の袴を一日で縫ひ上げて、大得意で家へ歸る。と、木村さんからお手紙が來て居た。流石にまだ私の事を忘れては、下さらなかつたかと思ふと、嬉しくて抱きしめて、そと懷に深くをさめた。

夜はこのお返事を書くため、お部屋へ引こもる。今宵は松の琴も聞えず、訪ふ人もなき小窓に落葉のみ音づる。静かな夜である。お手紙をまたくり返し讀んで見る『お千代さま其後文學上の作物、さだめて名篇續々御脱稿の事と察奉り候。思想の豊富なる趣味の高尙なる實に感佩の外これなく……』

なんて厭におだて上げて——憎らしい、散々お冷かしなすつた事もある癖に。ランプを明るくして墨を濃くすつて、奇麗に書き始めたもほんの五六行。それからもう甘へたり、我儘やお怨みやら、筆に任かせて書き下し、ふと氣がつくと巻

紙は、已に机のはしをたれて四尺あまりも長く疊に曳いて居る。不足税なんか餘り色けしだから可い加減な處で切り上げて、俳句を二つばかり書きそへた。

まあこれを裁縫の一同が知つたら何と云ふであらふ實に田舎者の氣の狭いにも困る。少し男子と口を利いたり、まして手紙のやりとりなんかしようものなら、直ぐ妙な關係でもあるやうに思つて仕舞ふ。私はまた見聞の狭い、口の多い嫉妬深い女友なんかより、異性の友の方がどんなに頼もしいか知れやしない。たとひ何百里の海山は遠くはなれて居ても、せめて御手紙での御交際ばかりは、一生決して絶すまいと一人で定めた。先方では私の事なんが忘れておしまひなさるかも知れないのに木の葉がしきりに雨のやうに兩戸を打つ。こんな晩に心行くまで、物思ひに耽けりたいと思つたが、母様から度々ながされて仕方なく床に入る。丁度十一時。

十一月三日 火曜日 曇後はれ

妹にせめたてられて早く起きた。まあ情ない今にも泣き出しさうなお天氣。東京

ぢや團子坂なんかさぞ人が出さかるであらうに、せめて今日一日だけは降らし長くはない。尙ほ鵠沼沼尋常高等小學校においても、今日、天長の佳辰を卜して、運動會を開かれたのである。

私も生徒の父兄としての招待を受けたので、お優ちやんをすゝめて十一時頃からのぞいて見た。四海にあまねき君の稜威にさしも空一面をおほつて居た雨雲さへはらはれて、嬉しい青空が顔を見せ、和らかな小春日和となつた。何處の軒にも黒ずんだ日の丸がヒラリヒラリ。場所は學校の運動場。まはりには見物の人山をきびきお定まりの萬國々旗が蜘蛛手に張り渡されて、日章旗竿頭高くハタリ／＼羽ばたいて居る。

左手に瀟洒なよしずはりをしつらへ白布をかけたテーブルをすへて、二個の花瓶に菊花があふれ賞品うづ高くお頭の禿げた校長さん始め、村長や村の名譽職なども羽織袴でひかへて居らるゝ。

折々空に轟く合圖ののろし、りよう／＼たる音楽隊の奏樂を聞くと、私でさへ胸
 がをどるのに、まして生徒の心は何んなであらう。今尋常四年生の妹は、黒キヤラ
 コの筒袖紋付の襟に級長の徽章の白リボンをからませて、蝦茶袴を胸高う、靴音が
 るくそこらを飛びまはつて居た。お午にはお辨當が出る。午後から數十番の遊戲競
 争、中には生徒と同じく夢中になつてゐる親姉兄もあつたが、私には別に珍らしいも
 のもないのでつひ見物人のあらばかし搜すやうになる。と直き傍に立つてゐる、豫て
 見知越の養蠶教師の娘、草色の紐つけた、小紋縮緬の被布とだけでは、何となく伊
 香保の浪さんと思ひ出されるが、これはまた異様な高様美人まあ前髪を出したも出
 したもまるで、笠をかぶつて様で日よけのつもりかは知らないが、眼の上へおつか
 ぶさつてさぞうるさからう。皆なもう目引き袖引きこの娘を見ては笑ふ。私もふつ
 と失笑し度く成つてつとお優ちやんの肩をつくと、振りかへつて笑ひ乍ら小聲で、
 『ほー何でせうあの風は。まるで淫賣婦だわねえ』

お優ちやんの評語も餘りだが、兎に角みつともない。私もこれから餘り廂は出すまいと思つた。

どうしても鳥渡目を引くのは女生徒の遊戲に體操である。クワドリール。球竿體爭。萬國旅行、みな見事な出來榮であつた。殊に尋四女生の蝶逐競走。何れが蝶かや、下げ髪のリボンひら／＼と紅白のたすき勇ましく、咲きみだれた花のやうに可愛く美しかつた。

終りに尋常一年女生の破鈴がある。てんでに紅葉の様な手で、いくら投げつけでも／＼一つとして命中するのはなく、只赤白の毬が中空に入りみだれてとんで居るばかり。その中白の組が勝利を占めて、銀の鈴がバクンとわれると、ハラ／＼降る色紙の中から美しいゴム風船が二つ、長く／＼尾を曳いて雲井はるかに舞ひ上る。手を叩いて萬歳とさけんで何時までも何時までも行方を見上げて居る無邪氣さ、誰だつて心から微笑まずには居られまい。お優ちやんは運動會を見に來たのか、人

の服裝を見に來たのか、それとも自分を見せに來たのか、絶えず標をつゝいたり、振りをそろへたり、結立ての髪を氣にして撫でたり、お尻を撫でたり、でなけりや恍惚何處かを見て居るから、その視線を遂ふと必と自分より美しい人。服裝の勝い人でとまつて居るお優ちやんにも似合はない！ 人格を下げるわ。

やがて校長の閉會の辭あり、萬歳聲裡に會を閉ぢた。時、日は早く西山にうすづき初めたので、妹をうながして大急ぎで歸途につく。すると母様へのお土産だつてわづかなお小使ひの中から、少しばかり金米糖を買つて、學校で頂いた菊桐のお菓子と共に大切さうにハンケチに包んだ。私は何だか胸が一ぱいになつた。

貴女御褒美はと妹はお優ちやんに訊かれて、

『私ね、競走はしなかつたのよ。學課ならだけれど競走の御褒美なんかそんなに欲しくないわ。そして若しも級長がまけると耻だから』

と妹は例の眼をバチ／＼させ乍らこんな生意氣な事言つた。家へ歸つたのは灯と

もし過ぎ、くたびれ切つて居るので直ぐお湯に入る。一日立つめも苦しいもの、足が棒の様になつて了つた。

あゝ今宵この菊の香高き夕、花の袂や羅の裳ひるがへして舞踏に明す貴婦人達もあるであらう。私は早く寐た。頬をうづめた黒天鵝絨の夜具の襟にも寐白粉の御そめの香たゞよふて、春の花野を遊ぶ思ひ快く夢に入る。

《下》 初春三日

一月元旦 水曜日 曇

東天紅とあかつき告ぐる鶏の音も高らかに、やがて出づる朝日と諸共に私は目出度くここに明治四十〇年を迎へた。

つるべ竿におく劔のやうな霜をしごき乍ら、ふと見下すと、初若水の井の底にくつきり寫りし初島田、思はずは笑ひと、平打がキラリ光る。

若水やつるべ重げの初島田

と鳥渡自讃して見た。

あゝあのいき／＼とした妙齡の娘達が、高島田になんか結つて包かゝへて裁縫のけいこに通ふのは、可愛らしくて實にいい。この子も早くあの様に成つたらばと、よく私の髪を撫でゝは仰有つた父様に、今日のこの様をお目にかけてたい。と初涙。お難養を祝ひ納めてお化粧に約一時間、お召かへに一時間、それもいゝやうに母様のおもちやにやつて居たが、お前は餘り背が高いからもう可笑からうと仰有るのを、無理にせがんで帯はやの字にして頂いた。

對のお召に襦袢の襟も白を重ねて、髪は髷白丈長、すつかり令嬢風につくつたつもり。只この胸に光つて居るブローチが、いくら私だつて一金貳拾錢なにがしのガラス玉入りでは情ないわ。

やがてさや／＼と勝色裾を白足袋にさはていよいよお玄關に立出づると、かねて

用意の重ね草履がちやんと揃へて置かれてある。これは孝さんの春着を縫つてあげた御褒美に、坂本の叔母さんが下すつたのだから、私には過ぎ物だ。九文何分と云ふこの足ではくのは耻かしいやうである。さぞ緋鼻緒が泣くでせう。

お優ちやんはお待兼のあまり霜柱をさくさくと、出かけて來たのに途中で丁度行逢つた。

『あらお早う……まづ明けてまして』

『昨年中は失禮ばかり致しました。相かはらず……』

今日ばかり双方がシヨールまで脱つての御挨拶、そして顔見合すやもうおさへ切れぬ笑はうら若い頬にさつと流れる。

番茶も出花と歌はるゝ花十八の春姿を、ましてやこれは評判のお優ちやん。あたは初島田に昨夜枕を許してか、緑の鬢づら少し亂れたが清和源氏の流をくむ、奥床しい笹龍膽の御紋付の小豆色襲で、胸高にしめた帯は金糸の刺繍あるお納戸博多。

家の母様は私の緋繻珍を御自慢だが、お優ちやんの、方が餘程當世風だ。

『濟まなかつてよ、大變おそくなつて……お待遠さまでしたのね』

『否え、さうでもなかつたわ』

葡萄鼠の絹絲と白の獅子毛とは、つと肩をならべて歩き出す。二人はこれから縫の先生へ、御年始の御禮に行くのである。雪もやひの空低くたれて身を切るやうな筑波風し。學校の式から打つれて女生徒達が、各々に頬ツペたを薔薇や林檎どころちやなく、紫色にして震へ上つて歸つて來る。もつとも今日はまだ田の氷が、厚く厚くはりつめて居るもの。

先生のお宅ではお花さんお春さんの先輩を始め、もう拾四人の下駄がぬぎ散らされてあつた。お互にお定りの御祝儀を申のべてそれから一同へお屠蘇とお重詰が出た。とお優ちやんは何うしたはづみか、なみくくと受けた手をすべらしてその晴の縮緬の膝へ、はつたりお屠蘇をぶちまけてしまつた、流石に一座は急に白け渡る。

三々九度のお盃でもしはせまいし、何だつてあんなに震へたのと、歸りに散々弄かつてやつたらば、でも何うしても手がかじけて、お盃なんか持てなかつたんですものと云ふ。その筈よ、お優ちやん。その中指のルビーが自慢でこんな寒いのに、手袋も嵌めなかつたからだわ。

御年始がてら方々遊び歩いて家へ歸つたのはもう四時半過ぎ。

『まあお前、今まで何處を歩きまはつて居たんです。ほんとに身體の毒ではありま
せんか。まだ御飯も食べないで——』

元日早々母様から、お小言頂いた。實はつひ朝の御馳走を過ぎ過ぎて、晝餐にはちつとも欲しくなかつたのだが、こう叱られて見ると先刻の——今晚盛んなカルタ會を開きますから、貴女も必とお出遊ばせな。是非、必ずね、と田内さんで和さん、何度もく念をおしてわざ／＼御門の外までついて来て、お操り返しなすつたあの事も願ひ難く、獨で氣をもみ乍ら夕飯の時やう云出すと。

『否、女の子と云ふものは夜分なぞ、さう無やみに出歩くもんぢやありません。』
してお前には、お父様がないんでせう』

思ひがけなくきつぱり言はれて押し返すべき言もなく湧き上る悲しさを涙と共に
ぐつと堪へて、見られまじとランプに面を背けた。けれどもまた若しやくと空頼
みのお迎ひもとう／＼來ず、半ば自暴氣味で夜は早く床に入つた。が今頃は興酣
で、定めし花々しい勝負を戦かはせて居るのであらうと思ふと、只羨ましくて羨ま
しくて、許して下さる母様の口惜しく恨めしく、小さい胸は引むしられるやう。
どうしても寐つかれなかつた。あゝ霜牙ゆる極寒。饑に泣く子宿るに家なき人もあ
またあるものを。

二日 木曜日 快晴

今日は昨日に引かへて、まぶしい程の好いお天氣、鏡のやうにはりつめた、氷の
お池には朝日が美しく輝いて、後れ毛を撫づる風さへ和かい。

旗に吹く風もゆたりと御代の春

約束を違へずお優ちやんが誘ひに見えたので、九時頃から藤澤へ出掛けた。昨夜は田内さんへ行らしたんでせう。面白かつてと訊くと、點頭て笑つて居る、私は厭な氣持がした。

電車に乗る。流石は初春の、人みな新らしく美しく見るからに心地よく、車内は高い香水の香、衣擦の音に満ちつ。やがて藏澤終點で吐き出されて人波の中を。ずん／＼押されて行くと何だかごた／＼飾り立てた初荷が通るし、諸商店では賣初めと云ふので大福引だの景品進上だのと仰々しく、そのまた店は慾にぬけ目のない人間の黒山をなして居る。私もいろ／＼買い度い物もあつたのだが、こんな人達と一緒ににされて堪らないから止して仕舞つた。

お優ちやんに引張られて町を散々歩きまはつた末、樂隊で客をよんでる觀工場に這入て見る。

こゝでも五十錢以上の買物には福引をひかせるのださうで、それこそ芋を洗ふやうな混雑。私等は『女學世界』と『女子文壇』を手に入れて早速のがれ出た。

ぞろ／＼群をなして押し歩いて居るのはムク／＼した顔にはげる程白粉を塗つて手織の銘仙や地絹の小紋を着た近在の娘さん達。そんな中故、都ぶりの私等二人はいちじるしく視線を引いて、道行く人はみな振りかへつて呉れる。満更悪い氣持でもなかつた。

二時過ぎに歸る。下谷の伯父様と本郷のきいさんから年始狀を下すつた。此方からも出さねば澄まないが、もう懶ぐさく何をするのもつまらなくてごろ／＼してると、夕方田内さんからお使ひが來た。云ふまでもなく歌留多のお迎である。私ははつと胸を突いて言ひがひなき涙は、早くもまつ毛を溢れつ。堪らずついと椽側へ出てしまふと思掛けなくも、今日は母様が許して下すつた。まあ夢に夢見る心地と云はうか、夕飯もそこそこ夢中になつて飛んで行くと、夫人はもうお玄關に待ち兼ね

てゐらして、おゝよくと手を取らぬばかり。戦は已に開始されて居た。皆さんに一禮して譲られた座についたが、見ればおなじみの顔は、和さんとお優ちゃんきり。あとは二分苅り、三分苅チックでビカ／＼分けたのもあるし、みんな角帽や白條やそれからあの、まるで蠟燭を打違にしたやうな徽章ねと弄かつて茂さんに怒りつけられたその慶應の帽子だのが載りさうな頭ばかり。私何だか間が悪くて無やみに顔が熱くなる。かふと氣がつくと向ふの端に例の小野瀬さん冷やかな突をふくんで意地悪く私を見て笑つて居る。

可笑しいや、みんな紺飛白や紡績の中に只だ一人。光つた羽織なんか着て居て――必と男子でクラブ洗粉の愛用者は、小野瀬さんが元祖だらうと思はれるわ。和さん今日はお久し振で日本髪。水のたるやうな唐人髷に結ふて被居つしやる。もとよりあの御縹緞でお毛もよし悪からう筈はないが、でも何方かと云へば廂やお下げの方がお似合なさる。何故かしら？

美しいメリンス友禪の座ぶとんの上に小さくなつて、つゝしんで皆さんのお手並を拜見してゐる振してこんな事思つて居ると、これですっかりお客様もお揃になりましたと、夫人も座におつきになる。

さあ私もこれから一方のさいはいを取つて戦闘は刻々激しくなつて来る。私こんな時には夢中になつて了ふ性分だから餘り一生懸命で、何にもよく覚えて居ない。只お優ちやんのベテンと小野瀬さんにいちめられたのは、口惜しくつて忘れられぬ。其外の皆さんは東京の歌留多會でみがき上げた腕前だもの、烏なぎ里の蝙蝠の私なんか、敵しやうわけがない。もう散々の大敗北であつた。併し自分より強い相手と戦つて美しく破られたのは、實に嬉しい。負けても名譽だわ。

何しろ卑怯未練な振舞が一番駄目だ。潔く勝ち、奇麗に負ける。私はすべてこの主義よ。

一體お優ちやんの口實ではないが歌留多でも——何でもこんな事には矢張り男子

が交^{まじ}らなくちや、不可^{いり}ないわ。別^{べつ}に氣^き取るの澄^すすのと云^いふわけぢやないが、双方^{さうほう}自^じづと禮^{れい}儀^ぎを守^{まも}つてつゝましく美^{うつく}しくゆく。女^{をんな}同^{どう}士^しだと餘^{あま}り遠^{えん}慮^{りよ}のなさ過^すぎる故^{せい}か、先^{せん}達^{だつ}お節^{せつ}句^くの日^ひ先^{せん}生^{せい}のお宅^{たく}で、家^か族^{ぞく}合^あせや、指^{ゆび}環^わ送^{おく}りした折^{をり}には、眞^ま實^{じつ}驚^{おどろ}いたつけ、この正^{まさ}しく秩^{ちつ}序^{じよ}ある様^{さま}を、同^み輩^なに見^みせびらかしてやりた^い。あゝ教^{けう}育^{いく}ある人^{ひと}となひ人^{ひと}との會^{くわい}合^あは、こ^こうも違^{ちが}ふものなのであらふか。

かくて此^{この}團^{だん}樂^{だく}は一時^{いちじ}近^{ちか}くまで催^{もよ}ふされたが、なか／＼に興^{きやう}はさめず名^な残^{ごり}はつきず、かの道^{みち}信^{のぶ}朝^{あさ}臣^{そん}ならなくも、なほ、恨^{うら}めしき朝^{あさ}ぼらけかなの色^{いろ}は誰^{たれ}の顔^{かほ}にもあらはれ乍^なら、惜^をしいこの座^ざを立^たつた時^{とき}、半^{はん}か一時^{いちじ}が、リーンと鳴^なつた。

おゝ夜^よ風^{かぜ}の寒^{さむ}い事^{こと}、シヨールに埋^{うづ}めた頬^ほもちぎれるばかり。落^{おち}々^くたる星^{ほし}は寒^{かん}天^{てん}にまたゝき、コロンカランと霜^{しも}と冴^さゆる下^げ駄^たの音^{おと}は大地^{たいち}にこほりつくやうである。

けれど皆^{みな}さんに送^{おく}られて嬉^{うれ}しく歸^き宅^{たく}した。

母^{かあ}様^{さま}は寒^{さむ}かつたらうつて熱^{あつ}い葛^{くわ}湯^ゆをして下^{くだ}さるし、着^きかへの寢^ね衣^{まき}もあたゝめられ

て——あゝ、勿體ない。今更にお情が身にしみて昨夜の心地を思出すと、ミシミシ慚愧の念が湧く。いろ／＼お話など申上げて床に入ると二時を打つた。

三日 金曜日 快晴

昨夜の疲れにぐつすり寢入つて朝目の覺めたのはもう七時過ぎ。お情深いお日様はうら／＼と枕もとまでのぞき込むで被居つしやる。吃驚して飛び起きたがあゝ頭が變だ。今日は精神をぬきさられたやうで何事も手につかず……一種不安なやうな、物悲しいやうな、絶望の淵にしづんだやうな、また何か持つものがあるやうな氣がして、一日心が安まらぬ。眞に夢の様であつた昨夜の名残がまだ覺めやらぬのであらう。

それにお優ちやんは横濱へ行くと云つてたし、田内さんへも——和さんだけなら宜いけどあんなにお客様がいらつしやるのに、遊びに行くのもきまりが悪い。仕方なし本ばかり読んで居た。

年始狀は續々来る。年始狀でも暮の中から出したり版にすつたりする人の氣が知れない。あんな物なら貰はなくつても澤山だが幸ひに私の許へよこすのに、そんな人は決してない、誌上で私の名を見たからつて。今年から交際をもとめる者あり、一二度かりそめの歌留多の席で相見た方が、よく忘れずに下すつたのもある。併し女の方のは一人もなかつた。何、誘惑……何のそんな事が——自分の心さへしつかりして居れや、たとひ何んな人と交はつたて少しも後めたい事はないわ。が考へて見れば女の癖に——私はあんまり出過ぎてるかしら。

午後からは無理に妹に引張り出されて追羽子をする。

私も去年までは盛にやつたものだが今年は髪に氣兼をして一度も羽子板持たなかつたら、ちつとも出来ないで餘り落してばかり居るので、姉様は厭よと、とう／＼除者にされた。

あ、三ヶ日も今日でお仕舞だ、鵠沼の松の内はほんの三日きりである。四日には

僧住そうぢやうが年始ねんしに來るつて早速さつそく門松かどまつを切り上げてしまふ。何も年中松原ねんぢうまつばらの中に住んで居て門松かどまつなんか珍らしくもなささうだが、でもこれを取り拂はれると急にお正月しやうぐわつがにげて行つたやうで、六日年越かとしの七草ななくさのと矢張り遊びはするけれど、もう氣がぬけちまつてる。あゝお正月しやうぐわつなんて本統ほんとうにつまらない、とは云へ可愛相かあいさうに私わたしだつてまだ、お正月しやうぐわつをつまらながる程ほどの齡としぢやない。つまりお正月しやうぐわつそのものがではなく田舎住居ゐなけぢやうの境遇きやうぐわいがつまらないのだらう。あゝ厭いやだわ。一體田舎たいなは何處どこでもかうか知らないが此地こちの村むらの人達ひとたちたら見聞けんぶんはせまし趣味しゆみは低ひくし、歌留多かるたなんか見た事こともなく追羽子おひはこの術すべ一つ知らず、風たぎは五月ごごのお節句せつくにあげるものときまつて居るし、外ほかに娛樂ごらくの方法はうもないのでお正月しやうぐわつには金銭かねをかけて、ホツ引びきとか云ふ賭博とくぱくに類るした事ことを盛さかんにする。女をんなも若いしゆも車座くるまざに入りみだれて風俗上ふうぞくじやうの害がいあるはもとより言げんを待たず、まあ何なんと品性ひんせいの卑いやしいのであらう。裁縫おはりの同輩どうぱいだつて御多分ごたぶんには漏もれぬ。何なにより證據しやうここの月つき此頃このころ此村このむらを通つたつて、娘子供おすうこどもの影かげは見られない。それもその筈はず。みんな巡

查の目を避けて、物置や蠶小屋の薄ぐらい片隅で、例のを夢中になつてやつて居るのである。

これにつけても思出さるゝは嬉しかりし——あゝ浪音しづかな春の宵、青春の血氣然ゆるばかりの人々が、笑ひかはした歌留多會——。實に永久の私が紀念とすべき、榮ある一夜であつた。

藤田さん森川さん尾瀬さん若山さん。袖振合ふも他生の縁とやら。私は何時までもいつまでも、忘はしません。御身御大切に必ず御成業遊ばせよ。

茂さんと達夫さんへの御返事を書き、夜もお湯に入つて早く寝る。楽しい昨夜に引かへて今宵は隙も風も冷たく、またゝく燈火さへ物悲しい。あゝ明日よりは……。

虚榮の都へ

×

私、東京にも久しく御無沙汰してしまいました。えゝ、去年の三月、墓参のため一寸上京しましたつきりよ。都の花も見ずに我が十八の春も暮れて了つた……と云ふわけなのでね、今度はわづかな用事を口實に……けれど私、ほんとに悲觀しちゃつたのよ。だつて私、モスリンの外によそ行の單衣が一枚もないんですもの。今まで着物物の事なんぞ一切無頓着で、女らしくもないと笑はれて、またそれが得意であつた私もこの頃痛切に——欲しいんぢやない、必要を感じます。

帯は叔父さまに頂戴した羽二重を先日仕裁たんですけれど、どうしても締めて見る氣になれませんのよ。厭なんですもの、あんな色合！ エ、エ、左様よ、私どう

せお母様のお譲り頂いてよろこんでるやうな方とは人間がちがひますわ。つまらぬものでも自分の趣味に合つたものでなければ、承知出来ませんの。ほら、この襦袢の袖御らん遊ばせ。私時々いたづらにこんな工風しときますとね、皆様がめづらしがつて大さわぎなさるんですの。一體女學校の方なんか、應用智識に乏しくつて被居しやるのね。あら、これはつひ失禮——何でしたつけ、帯の話でしたね……で、母様に唾を返してまで、その羽二重は願ひ下げました。そして淺黄縞子を締めました。

何しろ三日間の豫定。なるべく時間を活用しなげやならんと破天荒のくはだて、朝は一番汽車、上りかゝつた空氣草履引すつて、ステーションへ駈けたのは、六時の發車前十五分。切符を切らしてプラットホームへ出る。朝の汽車は比較的にこみます。大船のおべんたうのよく賣れる時間です。

ふと見まはすと人中に横濱一中の制服つけた脊のひくい振つたスタイルの生徒が

黒の手襦子の書物を抱へて立つて居る。私のお活花の先生の息子様ですの。顔を合せて黙つてゐるわけにも行かないから、

『お早うございます』

と云ひましたの、

『つひ御無沙汰いたしましたして……先生もお變りはゐらつしやいませんか』

『え』

と靴の先をみつめたまゝ身體ごと横に、向く。馬鹿にしてゝよ、中學の五年生にもなつて何の事でせう。私も澄まして、

『失禮、先生によろしく』

つと放れると、始めて顔を上げて見送りました、その風……ほ……。

乗りこんだまゝ横濱までは立往生でした。電車だと直ぐ席をゆづつて呉ますけれど、汽車にはさう云ふ親切者も居ないと見えます。足が棒の様に成つてしまつた。

新橋で下り立つた中に、ふと私の目を射たのは、花やかな参謀肩章つけた海軍大尉、おはづかしいわけ、私は短剣下げた人を今初めて見る。思つた程のいゝ姿でもありません。

淺草行にのる『お乗換は?』と聞かれて『なし』と答へるのが、私ほんとに氣が引けて……。

叔母さまのお家は〇〇で降りますのよ、そして△△の横町はいつて行くんですか、朝な夕な高等工業の生徒がよく通りますこと。

『御免あそばせ』

つと洋傘を傾げて酒屋の店へ入る、帳場にちび筆耳にはさんで、帳面しらべの叔父さまがびつくりして。

『ヤア、これは入らつしやい、五尺二寸』

『まア、叔父さま相變らずねえ』

叔父さまは私のことを、五尺二寸、五尺二寸と、お弄かひになります。すつと奥へ。

『叔母さま』

と手をつく。

此家では叔母さま御夫婦に、店の者や女中ばかりで、従弟妹はないし、つまらない家庭、私は叔母様をお氣の毒に思つてゐる。

母様の御口上のべて、用件を切り出し、それで今度の役目はすんだのだ。何だか氣がせく。が、叔母さまにたのまれて裁物を二三枚した。お晝に鰻の井を出され、嫌ひだと云つたら、田舎者だつて笑はれた。田舎者田舎者つて、田舎者が何恥でせう。いくら東京でも叔母さまなど、牛乳は臭い、牛肉は親の代から頂いたことがない、なんか、あんまり御自慢にもならないぢやありませんか。

さア午後から何處へ出掛けませうか。うるさいから幸夫さんとこへは行かないわ。

明日は綾さまと森川町……。竹田夫人はどうしやうかしら、伺ひたいわ。上りたいわ。静ちやまにお目にかゝりたいわ。あの竹田夫人はネ、お手紙に『晴子おばちやま』と書いてきて下さるのが、ほんとに嬉しくつてしやうがないの。姉様や兄様おありの方は、早くから叔母ちやまと云はれるけれど、私なんかほんとに年とらなれば伯母さんにはなれないんですもの。静ちやま。いつまでもいつまでも小母ちやまと呼んで頂戴よ。ホ、ホ、ホ、いまだに静ちやまがお父ちやまのやうに、角帽かぶつて赤門通ひする時分は、小母ちやま達はよいお婆さんねえ、その時分はたとと冷かして上げることよ。エ、静ちやまですか、今年生れたのよ、まだお寫眞頂きませんの。

上野歩きに行つて、圖書館へ入る。男子の席は澤山居りましたけれど、婦人室はからあきの有様、袴の女が二人、一心に何か書きうつして居る。私は小説を借りました。あの、こゝで咳嗽やくしやみすると、グワーンとひびきますのね、びつくり

してよ。それから、借出しに行く時、一同の中通つて行つて、しばらくあすこに立つて待つて居るのが、何だかきまりが悪くて仕方がないわ。よくすべる床！　こゝでスケートやつたら、どんなものだらうと思ひましたけ。

電燈が頭上に輝き初めたのに驚かされて、てく／＼歸つて來ると、あの石段の傍に客待ちしてる車夫が、姉さん御都合さまで如何です、お安く参りませうとしつこくついて來る。一寸悲觀しちやつたわ。私、姉さん？　お嬢さんとは見えないのでせうか。

夜、叔母様が、明神様へ行かうかと有仰る、よろこんでお供する。

町の兩側には、往來、せばめて縁日の店がずらりと並んで居る。幾百の裸火の焔、見世物の囃子、競賣の掛聲、油煙の巷、人はぞろ／＼。

叔母様は御病氣で少し足が悪いくらい。それでお手をとつて上げると、人ごみの中におされ／＼呉服店の飾棚に食ひ入つて了つたり、おもちや屋の前に根が生えて了つ

たり、活動寫眞の繪看板を見上げてらつしやる風たら……それが私の片腕にしつかり縋つて、おみ足を引すりながらなのだから、たまらない。みんな人がふり返つて行く、『イヨウ』なんてどなられる時のつらさ、つくづく泣きたくなる。

氷屋へ入つて休む、叔母様は氷小豆を三杯召しあがりました。

×

綾さま、綾さまと、思ひつゝけて夢に入り、今朝はばつちり目が開きました。うれしい、とひとり勇んで飛び起きる。ああこれからお訪ねするのだ、胸に浮ぶはあの眼……あの聲……。

私、例の高齒に結げたのですけれど、本郷あたりへ行くのに目に立つて仕方がないから、髪結を呼んで貰つて桃割にかへました。ところが下町風の油べつたりもう氣持がわるくつて、思はずいやなく顔して了つたけれど、我家でないのだから我

慢しました。それから近所の小間物屋へ行つて、造花のかんざし買うとしますと、ちつともないんですの。云々さが。

『當節は造花は流行ませんものですから……へい』

だつて。どうせこゝらの人間は話しにならない。叔母様今年はじめてしぼりの洋傘御らんすつたつて、感歎してゐらつしやるんですもの、冷汗が流れますわ。

『では叔母様、また秋にでもなりましたら、御厄介に上りますわ、どうも有がたうございました。いろ／＼失禮……、さよなら』

私のお叩頭は高いつてよく叱られますのよ。だが考へたつて足で歩く疊の上に口や鼻すりつけて、一山三銭のやうな大安賣、ばかな真似は出来ませんものね。學生さん達の御挨拶は簡短でいゝわ。流石の私にでさへ二度も二度も繼足をなさる方がある、以て察すべしでせう。ホ、い、い。

身は電車にゆられ乍ら、魂は飛んで天外、不意に驚かせて上げやうと、くだらぬ

事を目論んで、わざとおしらせしなかつたが、もしや今日はお差つかへでも……お留守ではないかしら、などいふ今更しきりに不安の念も湧く。

△△から三丁あまり、かねて承はつておいた道を行く。黒板塀に細葉檜の生垣、冠木門、雨にやつれし標札に上原とあつたのを見出した時のうれしさ。

打水のあと新しき石だゝみをそつと歩いて玄關に立つ。浪立つ胸を抱へて……。
「あの、綾子様お出あそばして？」

「御在宅でございます」

「晴子ですと有抑つて下さい」

「は」

手をついた小間使ひが立上つて姿の消るや、

「まあ晴様」

襖おしあけて、なつかしの綾さま。

『おゝ』

『うれしい』

とばかり、私は和らかいお手にとられて、お座敷へ、

『綾さま』

『よくねえ』

共に、しきつめたカーベットの上に、びつたり手を揃へました。感かんきはまつてホロ／＼と涙なみだ流るゝ。

根上りのルイザ巻、書いたやうな襟足で、水色がかつた山繭入りのお召物、餘計にお色が白く見える光澤美しき御頬のあたり、才はちけた黒いおん眼。今更ならず、まあ何と云ふお美麗な方なうでせう。お如才のない御應接ぶり、今日はお嫂様お留守、優子様は學校、お母様は一昨日から大磯の御別荘へお出掛あそばしたんですつて。

『けれど貴女とお話するには、人なんか居ない方がいいわ、ねえ、晴さま、ほんとによく入らして下すつてねえ』

またしてもルビー輝くそのお手を、私の上にかお重ねなすつて、美しい瞳をうつむかせて……。

綾さま！ あゝかつては高根の花とのみ、空に憧れまゐらせし花ちる里の君、その君より、求交状受取つた時の私は、うれしさに震へました。

君は有名な学校の御出身、地位あり名譽ある方の立派な御令嬢、とても私なんぞが同席で語られるやうな御身分ではないのですわ。けれど、けれど、綾さま、二人の間は、弓矢八幡？ 否××先生も照覧あれ、變へじかはらじの永久のむつみよ……。櫻の青葉涼しげに、私の大好なくづ餅を美しく盛つた菓子鉢、立のぼる玉露の香りも床しう。ガラス戸開け放したお縁に立てば、花畑には、いまダリヤとひなげし、パンジーや、カーネシヨシ、いろいろのものが咲いて居たけれど、私よくは

名を知らない。お池には睡蓮が浮いて居る。松に掛つた凌霄の花、まだ朝の程の花やかな日を一ぱいにうけて、露のきらめく葡萄棚、黄金色に輝いてる枇杷の見事さ。

あら！ 食べたかつたんちやありませんわ。

折々お二階に咳嗽のお父さま、何處かへお出まし遊ばすので、綾さま『一寸御免あそばせよ』と立つていらしたが、いそ／＼お召替のお手傳ひの御様子、おやさしいお父様のにまじつて、ホ、ホ、と美しいお聲も起る。

嗚呼、御兩親おあり遊ばす方みると、嫉妬を起さずには居られません。

『まア晴さま、長いことお待せいたしました。失禮！……』

輝くやうなおん笑顔、チラリ金齒の光りお可愛らしさつたら！

アルバムや寫眞ブック拜見する、まア揃ひも揃つて、お嫂様、綾さま、優子様、引ぞわづらふ花菖蒲、何てお美しい方ばかりなんでせう。ことにお嫂様が、ルイズ巻で、黒の御紋附召したのは、何とも云へぬマダム振り、綾さまのお島田、云ふだ

け野暮よ。お兄様も御立派な方、軍人なんかにはや勿體ない御縁緞、お生み遊ばしたお父様お母様、どんなお方でゐらつしやるんてせう。

私はピアノをお願した、かくれなき名手とは、誰云ふとなく耳に入つたものを：
：、笑つてはうけがひなさらなかつたが、強ひておし返すと、

『では』

と西洋室へ御案内下さる。

お廊下の突當り、カーテンなど程よくしぼられて中央には小形の卓、色うるはしい椅子が五六脚、金色燦爛たる置時計、袋に藏められたお琴が二面、窓に對つた洋琴の上には美しい盛花が置いてある。

水色緞子の長椅子のはしに腰かけて、

『さ、綾さま、何か伺はせて頂戴な。ね、ね、お願ひでございますから！ まアどうしてお厭それぢやあんまり』

『だつて』

私の肩をおゝさへ遊ばしたが、

『ではね』

とにつこり、すらりと立つて樂器の前へ、風かほる青葉の窓に、繪のやうなおん姿の曲は名高い月光曲でした。樂譜にその鈴ばりのおん眼をやつては、キーボールの上を走らす御手の冴、前後左右へなめらかに動くおん指目にもとまらずさながら白魚の水を潜るやう。

一音ひいて一音ついく。高くひく、清しの音は、庭の木立ちを掻い潜つて外へとひいき渡る。

妙なる樂に酔はされて、恍惚となつて了つた私は、一曲終つて立上られた綾さを、少し身を退つて迎へたばかり、感謝の言葉も口に出ません。

お晝餐には綾さまと一つ食卓で頂きました。お女中も下げて了つて、御手づから

のお給仕。けれど先刻からうれしさに胸がつまつて、折角の御馳走も綾さまを満足させる程には平げられませんでした。

食後はまたもお庭を散歩たり、唱歌をうたつたり、語りつ問ひつ、罰はつきぬ、名残もつきぬ、歸りなくなつた、厭だつた。綾さまがまた、一生懸命にお引とめ下さるんですもの。

とうとう二時頃思ひ切つてお暇つげた。途中まで綾さまは送つて下さいました。兩の袂を胸に重ねて。

『晴さま、ぢやお氣をつけてね……』

と有仰つた、お聲なら、お姿なら、今でもありくと浮びます。

森川町へは故あつて久しく打絶えて、今日五年ぶりの對面、復姉もよろこんでくれました。叔父様は御出張中のお留守。叔母様と呼んで居るのが従姉なのです。ふつくりと前髪を出した8巻にして、肉附ゆたかな、色白の、これで母様とは一つち

がひ、水のたるやうな奥様ぶり。笑ひながら、

『まア晴ちゃん、貴女は何故そんな髪に結つてゐるの。せめて夏だけ日本髪はお止しなさいよ。さぞまアどんなハイカラさんだらうと思つたに……かう前髪をたくさん出して水色リボンか何か——きつと似合ふわ。いくらお母さんがやかましいたつて、そんなに溫和しくして居るものはないぢやありませんか』

『でも……』

『でも何なの、ホ、ホ、ホ、』

『兄様？』

一雄ちゃんがやつて來た。私をみて手をついて莞爾する。可愛い子、大切な一粒種で、尋常三年生だ。兄様と云ふのは叔父様の遠縁に當るとか、私は始めて遇つたのでした。滅法脊の高い眼の涼やかな——だまつて高い、お辭儀！ も憎くはない私はこの人に一高の帽子をかぶせてみたいと思ひました。

すゝめられたお風呂にはいつてさつと汗を流し、鏡臺貸して貰つて縁側へ持出し、髪を撫でつけてると、

『ア、晴ちやん、晴ちやん、そんな手つきしちやか、かんじんの髭も何もだいなしになつて了ふわ……』

『だつて私、つひ後に眼がないもんだから』

『蛙さんぢやあるまいし、誰だつて後に目はついてない。ま、一寸……』

叔母さま櫛をとつて叮嚀にかき上げて、それから大きなポットに何とか云ふバリ製せいの粉こな白粉おしろいつけて、お化粧けしやうのみだれを直して下さる、ついでに帯おびも引ひばつて、一つポンとたゝいて、

『晴ちやん、あなたね、兄様に案内して貰つてそこら見て來るといふのよ。晩には私も若竹へでも行きませう、ね、兄様、この人をつれてつてやつて下さいな』

『えゝ、行きませう』

もう立上つて下駄を穿きかけてる、氣の早い人つたら！

『すみませんのねえ、では叔母様』

襟をかき合せ乍ら

『雄ちゃんもいらつしやいな』

『お止しなさいよ、足手まとひだわ。それよりお二人でぐんぐん蹴沙して行らつしやい。駆け足でも何でもして……』

『ホホ、、そんなら』

二人は門外へ出た。

『何處へ行きますか、貴女』

『私、何處でもいゝんですけれど、あのね、一高の傍へ連れてつて頂戴、まだ見た事ないですの』

『高等學校……だつて女は門内へ入れませんよ』

黒い眼でちつと見返る。

『エ、門外からそつと見るだけでいいの……』

バチンと開けた。バラソル肩に、お後に引そつて歩をはこぶ。

バンドをしめたお茶の水、美の字の徽章つけたのは幸子様のお仲間、紫紺、お納戸、紺、海老茶、ねすみ、紫、さまざまなお袴召して、ぞろ／＼通る。振ひつきたいやうなスタイルのもある。インキを下げた若い角帽さん、サツサと歩いてゆく一高生、観察も刺戟もあつたものでない、私の心は浮づ／＼了つた。口惜しい、妬ましいと思ふ念が胸一ぱい……。

『こゝが一高です』

と兄様、我にかへつて見上げた。そゝり立つ向ヶ岡の自治の城、一きわ高く秀でたる時計臺、幾年の風雨に黒める門表、もう／＼熱い／＼涙が湧き上る。

昔、私がまだ十三三の頃、矢吹さんや磯野さんなんかは、一高の二部に居ました、

その頃から女のお友達と飯事なんぞ大嫌ひでお轉婆の本領發揮。この人達が夏休みでやつて來た時などそれは大へん、かくれんぼ、鬼ごっこ、子を取ろく、まア夢中になつてさわぎましたつけ。その人達も學士になつて、かつてはかちりついた首つ玉に高いカラーつけて八の字髭ひねつて、コムバや賄征伐は誰がしたと云ふ顔。たい私、あの頃、肺を病んで、春をも待たずあへなくも散り失せて了つた田中様だけは、今でもなつかしうございます。嗚呼頂いたお國名産姫路皮の筆入れは始終つかつて居ますのに……

『君』

どんと肩をゆすつて外國語學校の三人づれが、よろけ掛つてわざと二人の間を割つて通り、そして笑ひながらふり返つた。私はハツと氣がついて、

『もうようございますのよ、兄様』

『いゝんですか、これだけで。ちや……』

引返す道で兄様のお友達らしい方と行遇つた。

『や、君』

とか何とか立話が始まつた。しばらく後に待つて居たが甚だ手持無沙汰、先行つて了ふわけにもゆかず、仕方がないからはしへよつて、その唐物屋の飾窓を見たくもないのにながめると、

『晴子様、晴子様』

兄様はもう十間も先で手をたゝいてる、

『はア』

びつくりして駈けて行く。

『大學の構内通つてみた事あるですか』

『私？ 否』

『行きませうか』

『どうぞ』

『一雄ちゃんをつれて來なくてよかつた、途中でオウチ歸らうなんて云ひ出される』

と……』

『ほんとに御迷惑ねえ、飛んだ御案内願つて……』

『否、なか／＼ハイカラな見物ですよ。ここから池の端へ出ませう、そして上野を』

通つて歸途は電車で……』

『はア』

私は兄様に氣の毒でなりませんでした。成るべく放れて歩いて居たが、何か話しかけられると、つい／＼肩を並べて了ふし……。

『貴女も一高の腕白坊ちゃん好きですか』

『はア』

『白二本筋、誰にでももてるんですよ、こう云ふわけです』

笑つゝ居る。まア罔にはおけない人、

『お人の悪い、知らないわ』

『だけれど實際……男らしいんですね。僕ア二部が好きだ』

『アラ左様、私もよ、一部は無論でだけれど二部の甲も好きなのよ。兄様。もし遊ばせばなに？ 當てゝみませうか、え、電気？ 造船？ 採鑛冶金？ それとも駒場の方？ 私なら一部の政治か獨法……』

調子にのつてしやべつたが、あゝいくらこんな空想したつて……。美しい、美しい、果敢ないわ、人にふまれて捨てられて、さうして果てるのが女と云ふものゝ運命なんでせうか。もう何でもいゝ、思ふさま腕が振つてみたくつて……。

赤門からはいつて無縁坂口の鐵門へと出た、いつか沼川様つかまへて

『私ねえ、赤門々々て夢にまで見たのですよ、そしたらまア實際ははげつちよろけてきたないのねえ』

と云つて上げたら、

『だつてあれはもう古いんですもの、そして正門ぢやないです』

『正門はなほきたないわ、オホ、、、』

『門はきたなくつても構内へはいれば立派ですよ』

と有仰つたの、まつたくな。

聳ゆる時計臺を見返り勝ちに池畔へと下りる。觀月橋の石の勾欄に身を凭せて、

二人はしばらく足を休めました。

碧の蓮の葉、朱い辨天堂、折から夕榮の雲紅に水に浸して、『あゝ美しい』と思は

す云つた。

袖ふりはへて遅々として歩み遊ぶ人達も少からぬ。

清水堂へも上つてみました。黄昏れし朱の欄干に腰かけて物思はしげな小倉袴の

學生、何處やら中山様に似たやうな……。S子様がそこらに見えはせぬかと思は

された。

博品館へ入つてみませうかと云ふ、えゝと答へて足を向けた。電氣の光りまばゆき館内大變な人出、ふと小間物屋の店などに立止つて、一寸人にへだてられると、直ぐ兄様は晴子様！ 晴子様！ て呼んでる。いくらオノボリサンだつて、迷子になつたら森川町へぐらゐ歸れますわ。何店もすん／＼素通りして出て了つた。

廣小路でひらり電車に乗る、ならんで腰を下したが。

『晴子様くたびれたでせう』

『えゝ、兄様は』

この問答を眞正面にかけてる二人づれの女學主が、笑ひたいやうな顔して居るの
で私はむつとして、うつり行く市街の方へと眼を向けた。

夕といろき、花やかな活動のちまた、軒並ガスや電氣で彩られて、いよく學生
の通行多き本郷通りを歩きながら、兄様はこんな事云つた。

「晴子様、貴女は何處の學校へ行つてゐるんですか」

「私？ 何こへも學校なんか行きませんのよ」

「申談でせう、何處です、ほんとに」

「いやアね、學校へなんか行つてやしないのよ」

「ぢや、あの、小學校へでも出して居るんですか」

「オヤ、オヤ、さう見えて？ まア、オホ、、、」

ホ、、、失笑して了つてよ。奇抜だ。まア私が女村夫子……。

家へかへると叔母様は待かねてゐらして、これから若竹へつれて行きますよと有仰る。大急ぎで御飯いただいた。叔母様、錆納戸の夏羽織召して、白麻布のハンカチに香水をしませながら、私にも頭からふりかけて下すつた、兄様は何時の間にか小倉袴つけて來たので、

「まアいやだ、兄様は、そんな窮屈袋穿いて行くんですか」

と叔母様が笑つても、

『えゝ』

と澄ましたもの、後からついてく風は丁度書生と小間使ひの様だらうと可笑しくなつた。

寄席と云ふところ私は始めて見た。高座とかつて高いところへ出てお叩頭して、羽織を脱いで扇子バチクリ。いくらパンの代だからつて落語家なんて厭な商賣もあつたものねえ、またどれもく人間らしい顔して居るのはありやしない『人八化二』ぐらゐなところだ。見まはすと、お客は大概學生と廂髪、日本髪は丸鬘婦人が二三人。なか／＼ウキンナ卷のハイカラ令嬢も在します。あら、川島様によく似た人が居る。特色のある八ッ頭みたいな頭、短かい三分刈にして、お近眼鏡かけて、横顔の口許などはそつくり、どう見てもく川島様だ。あ、あの俯いて笑ふところ！ 氣のついてか、向ふでも度々ふり返る、これが男同志なら、よし人違ひであらうとも、聲

をかけてみるのだけれども……。氣になつて／＼たまらず、しまひまで眼をやつて
ばかりか居たが、とう／＼かへりの木戸口の混雜にまぎれて了つた。

×

朝、叔母様はまだおやすみ。早いやうだが起きて了つた。さつとお化粧して二階
の窓に凭る、直ぐ眼の下に下宿屋がある、下女がカンガールの餌をあさるやうな風
して、椽側の雜布がけしてゐる。ローマに結つたハイカラ令嬢が、アームチェーヤに
腰かけて新聞を讀んで居る。あの家の止宿人なのかしら？

兄様と一雄ちゃん、學校へお出掛——高師の附屬へ行くのです。

私はお墓まゐりにと家を出ました。

青葉若葉の谷中の里に眠ります、墓石の主は父さまにお兄様、兄様だつて私は三
つで別れたのだから、チツとも兄様のやうな氣はしない、お花とお線香手にして生

籬の間を縫ふ。

かへりに芋坂のお團子を買ふ。さて今日の一日はどう云ふ風にして費やさうか。神田様へも伺ひたいし、竹田夫人へは静ちやま抱きに……午後は幸子様と約束がある。私は長つ尻だから、どうも他家へ上るのがおつくうで仕方がない。いろ／＼考へながら、乗換貰ふ時つひ『本郷三丁目』と答へて了つた。

午後は日比谷だ。時間早めに、公園で電車飛び下りて豫定の山の上、まア随分ベシに掛けてる人がある。噴水の水をながめて、ハンカチで襟に風を通し乍ら、しばらく木蔭を歩いて居たが、て／＼肥つた女學生の傍に腰を下す。色は白いが、ら豆に目鼻つけたやうな顔で、ホ、ホ、三枚櫛が二百三高地の壘壁をなして居るつてのはこの女のことよ、巻いた毛の中から、油じみた根の打ひもが顔を出し、大きな／＼髷櫛さして、折角のあみ上げ靴も何もあつたものでない。チンと澄まして何を待つて御座るのか。

もう何時かしらん？ 私ほんとに時計が欲しいわ。先日綾様のかけてらしたあの可愛い銀の首かけが……。

『ヤ』

と向ふから白つばい小倉袴つけた白飛白の書生さんが美しい齒をみせて、立上つた。つか／＼近附いて帽子をとつて。

『しばらく』

『あら、何誰でせう……何誰でゐらつしやいませう？』

『え、晴子さん』

と笑つて居る。

『まアほんとに、ほんとに何誰で被居しやいましたつけ、私、つひ……』

『僕は本田です』

『あれ、まア、どうしたらいいでせう、まア！』

私、袖を顔におし當て笑ひ出して丁つて、

『いやだ、ほんとに本田様でゐらつしやいましたたつけねえ、まア』

『ねえとはひどいぢやないですか。餘り冷淡だ』

『ホ、ホ、ホ、ホ、』

『お母様は御丈夫ですか』

『有がたう……』

『いつ當地へお出になつたんです？』

『はア一昨日！ 私、本田様をお見外れ申すなんて、よつ程どうかしてるのねえ。ど

うしませう、ホホホ、ホ、ホ、』

『お齡のせいかも知れません』

『まつたく！ オホ、ホ、ホ、でも決して忘れたんぢやございません、お見外れ申しましたのよ、ですから』

『いつも御盛ごさかんですな』

知らないわ』

少し座ざをゆづつて

『まアお掛遊かけあそばせな』

『よく氣きがつかましたね』

『あらずの分ぶんねえ』

肩かたをならべて袂たもとを探つて富士ふじとマツチをとり出だしながら。

『晴子はるこ様』

『はア』

『僕ぼくの友達ともだちだね、是非拜顔はいがんの榮えいを得えたいと云いふ熱心家ねっしんかがある、水谷みづたにと云いひます、其その奴貴女つあなの土地はうへ避暑ひしょに行くかも知しれませんよ、よろしく』

『オヤ、左様さよう？ 本田ほんだ様は何處どこへお出でかけ』

『僕、今年は故郷へ歸省ます。試験前に病氣しちやつたんで大へんです、これから
猛烈に勉強だ』

『あら、貴下も試験延期ね、屹度さうでせうと思つてたのよ』

『何故』

『法科の方はみんなさうなんですもの、苦しい／＼つて云ふのを、一種の虚榮にし
てゐらつしやるのよね、ホ、、、』

『申談ぢやない、だつて貴女、實際ですもの、身體がたまらん、事實法科は苦しい
んですからね』

『筆記萬能大學、一名病人收容所！ホ、、、本田様はいつ御卒業？——』

『それや知れませんが、此さき何度落第するかわかないんですもの』

『オ、嫌だ、知つて、よ、來年脱線？ ね、さうでせう』

『これや猛烈だ。晴子様、貴女はひどい、大分いゝんな人がモデルに使はれるやう

だが、何だつて僕の本名なんか出すんです、僕ア女達に冷かされてやり切れない』

『あら、さう』

思はず熱くなつて。

『どうもすみませんでしたのね』

『今日は何ですか、お一人ですか』

『はア少し……あの、お友達を待ち合して居りますの』

『さう』

とあたりを見まはしたばかり、流石一緒に散歩しやうとも有仰いませんでした。
私はホッとした。けれどこのまゝお別れして了ふのは、何だか意氣地がなくつて、
こうした場合何とか彼とか、相手の胸にしみ入るやうな、痛烈な言でも云つてやり
たい!!と氣が急ぐ。

併し、

「や、ではこれで失敬します、お母さんに宜敷」

『まあさう……お大事に……』

御勉強あそばせよと云ひたかつたが駄目でした。ちつと目送して。俯くと、

『晴ちやん……』

桔梗色のバラソルたゝんで、駈けよつた幸子様、無意識の中に握り合つた手は、二度三度つよく／＼打ち振られた、指環が痛い。

『まあよく』

お互に口をついて出た言葉はこれでした。

入学のため御上京の途次、立よられて泣いて別れを惜しんだは、つひ先日と思ふのに、もう立派な式部に成りすまして居る。紫紺のお袴ひくめに穿いて、銘仙にクリーム色の襦袢の袖を重ね、髪はわざとかミツシヨンスクールくさいまき方。今日はフランス形のお靴ではなかつた。鹽瀬表の重ね草履。

『少し歩きませうか、ねえ』

高くひくき二人はしづくと花壇の方へ行く。光澤の強い桃色と紫の小さい草花を、ひし形や三角やいろいろな植られたのが、強烈な日光に輝いて居る。何しろ暑くてたまらない、汗をふきく日比谷公園の御道遙？　あら、女詩人は違つたものだつて？　よくつてよ。小高い藤棚の下に休む。そこらはクロージュアで一面、私クロージュア大好き、御存じなくて？　一高百景、クロージュアの床。お、なつかしい花よ。匂ひよ。白いその花を胸に挿す。

私達と對ひ合つたベンチに、稲の角帽さんが一人、相引の五寸もほころびてる袴つけて、一心にノートを讀んで居たが、ふと立上つた。見ると足に大きな毛蟲がはつて居る、が、また腰かけて了つた。

『あら、幸子様、オホ、、、、』

『え、何どうしたの』

『だつて、だつて、ホホ、』

鉛筆出してカードの裏へ走りがきしてみせると、幸子様も笑ひ出した、今更のやうに上を見上げて、

『厭ねえ、退きませうか、落ちて來ると大へんだわ』

『え、さ、行きませう』

こゝを去ると二人は一時に失笑して丁ひました。随分無神経な人、自分の身體を歩かれてるのに氣がつかないなんてよつ程どうかしてる。氣になつて仕様がないわ、あの毛蟲何處まで旅行をついけるでせうか？ でも幸子様は、

『何か一心になつてたんですよ、だからよ』

とたのまれもせぬ御辯護、感心してよ、ほんとに幸子様は早稻田狂ひ、だまつてきいてればいゝ氣になつて、洋傘の先をツツツと輪にくりながら

『此間ねえ、こゝで早稻田と一高とテニスやつたのよとして一高はね——、ホ、』

、、可愛想に撰手はみんな泣いたのよ。學習院ともやつて、やつぱり一高が敗けたのよ』

なんて美しく笑ふ。

『貴女どうして牛込派お氣に召さないの、彌生が岡の方が好きなのねえ』

あんまりだから、

『無論よ、比較問題ぢやないわ』

と云つてやつた。私の早稻田を嫌ひなのも一つはあのMさま、私がいつか女學世界で富枝様は、あの方によろしく、と言云つたばかりで、大へんな事になつて了つた。

あれは如何なる御ころもでもものせられ候ものにや、誤親切はまこと有がたくは候へども……だの。生にとりてはまことにおだやかならざる文字……まこと世の口ほど恐ろしきのもなく、いかなるうたがひの雲かゝるやもはかられず……、流石

の小生も頭は漸次に下りて、散るや時ならぬ紅葉の雪よりも赤き黒き耳朶までも火の如くにして……なんて何だかまるで私がラブレターでも上げて、弾ぢかれたやうな體裁、晴子こそまことにもつて汗顔の至り、それこそ散るや紅葉の……ではんに耳朶までもあつくなりました。

今まで随分、懂がるゝ式のものも書いたけど、こんな事云はれたのはこれが始めて。Mさま、貴君も運動界にはその人ありときこえたる撰手、もちつと超然主義をおとり遊ばせな。何も何百人の早稲田にMさままで方は貴方お一人ではございますまいに、あんまりお氣が小さくてゐらつしやる、お笑止にぞんじ上げますのよ。これだもんで、どうもね、柏葉宗の大信者は、早稲田の蛙さんはあまり好きませんの。御一緒に寫眞でも撮りませうか、と云ふと、幸子様、それよりお願いだから私の宿まで来て頂戴な、と手を握る。エ、何處へでも行きますわと相談一決。花やかなバラソル行きちがふ花園捨てゝ、電車で新宿へと向ふ。

赤阪見附から二人の御令嬢がのりこんだ。幸子様がつと袖ひいて、

『ちよつと、學習院よ』

『エ、』

とは目に云はせてうなづく。一人は分の厚い前髪でウキンナ巻に海老茶のお袴、一人は白丈長の唐人まげ、大きなべつかふの前ざし深く挿しこんで、お納戸カシミヤの裙長う、斯う少しお襟をぬいて、お扇子手にして、え、雜誌向き……だか何だか真白くお化粧してね。ある家の塀の内に瑠璃色の大きなく紫陽花が咲いて居るのを見て、私、あの花大好きよ、とつい口をすべらすと、左様でせうよ熱烈な方は何でも濃厚いものをお好き遊ばすと、力一ばい脊を打たれた。紅葉様の多情多恨の柳之助にすつかり同情しちやつたと云つたばかりで、みんなが冷かして仕様がないの。

幸子様のお宿は柏木だ。ギユツ／＼ときしむ階段を上りながら、これはまるで暗

夜に蛙ふみつぶしたやうな音、と云つたら、それや貴女のめかたが重い故だわと幸子様、なかく敗けて居ない。まあ素敵なお室、奇抜ねえ、A様のお頭のやうなデコボコ盛、アラ随分よと笑ひ出して、ですから實はね私、今日此家を引はらふんですよ、それで貴女にも手傳させやうと思つてそれで來たのよ、だつて。まあ驚くわ、それちや私はペテンにかゝつたやうなものだ。わざと立腹た風でふんぶんしてやる。お轉宅たつて手輕なものだ。二人で着物はぐんぐん行李へおしつめ、布団や何かは宿の人に荷造りして貰つて、市内配達にたのみ、私は机の物やお化粧道具をとりあつめ、小わきには蛇の目の傘抱へてバンジの鉢植を持ち、幸子様は大きな風呂敷包、新聞紙にくるんだ下駄を下げるやら、まだしも洋燈と紙屑籠ぶり下げないのがめつけもの……笑ひくづれながら電車の一隅に席をしめる。中村屋——ほら、パソ屋の黒光女史の家ね、アラと思ふまに走り過ぎてた。夕方だから労働者やら何やら、乗てく、ギューくとすしづめ、丁度私等の前の釣皮につかまつた學生がある、

上下動、左右動、なか／＼はげしいので、故意か自然か、此方へばかりゆれ掛つてうるさくてたまらない。白飛白の袂がチラ／＼と顔にふれる。無遠慮にちつと見上げてやると、まはりへ黒麻をまいた丸帽子、マーキユリーだ。

オホ、ハ、ハ、可笑しいわ、可笑しくつて仕方がない。

それからね×先生がね、晴子さんはかくしちや居ますが、あれは非常なお轉婆です、モウ眼中無人。箸にも棒にもかゝらない、霸氣の強い女ですつて有仰つたんですつて。ホ、ハ、ハ、非常なお轉婆が氣に入つた。流石先生はお目が高くつてゐらつしやるのよ、私、自分ではそれ程のお轉婆さんのつもりぢやないんですけれど随分電車の中で暗號の悪口云つたり、男學生の品さだめしたり、長上の人には直ぐ仇名を奉つて了つたり……島田の手前もありますから、ブランコだけは止めましたし、それで電車の飛乗だけは、こはくつてどうしても出来ないんですけれど……。

だつてね、大學生のお友達一人ないやうぢや、友達に對して肩身がせまいんです

もの。え、三田ですか、嫌ひぢやありません。秀人様や三郎様、慶應へ行つてますのよ。普通部四年……いま振つてる盛りでせう。

あゝこの天がける駒のやうに、自由な尊い、少女てふ時代を、空しく過して丁ひたくないんです、出来るだけ花やかに、甘い追憶をつくつておきたいんです。

ブラウドは貴女の生命だつて、罵られたこともありました。まつたく左様かも知れませんが、ブラウドが私の生命なら、うぬばれば男子の弱點よ。ね、おほゝゝゝ。須田町の乗換、ちつとも三丁目行が来ないんでせう、焦れつたい、焦れつたい。二人はそこら飛んで居ました、シトロン、とサツボロ、が消えたり、ついたり、乗客はだんぐたまつて了ふ。灯に輝いた活動の町はほんとうに美しい。

やつとの事で、おし返されつゝ乗つたはいゝが、兩手ふさがつて居るので、皮にぶら下がる事も出来ない、でもやう／＼傘と鉢植だけはわづかな透間へおいて貰つた。ところが三丁目について、ドヤ／＼と總立ちになつたとたん、子供をしょつたお神

さんがよろけてその鉢植をころげ落して、けとばした。

『オヤ／＼、オヤ』幸子様が眉をひそめると、左側に居たベンの徽章の人も、氣の毒さうに苦笑しながら降りて行つた。仕方なく、そのまゝ捨てゝ來て了つたが、幸子様は残り惜しさうに、

『あの學生がね、いつそ自分で持つてゝくれゝばいゝのに……折角氣にして絶えずかばつてゝ呉れたのにねえ』

それでは、あんまり蟲が好過ぎます。

幸子様の行く家は西片町だと云ふ、私、こんなもの持つてそこまでお供するのは厭だから、無理に森川町へ引ばつて來た。

『まアいつまで何處を歩いてたのですよ、どんなに心配して、いまでも兄様を見せにやらうと思つた……』

頭からお小言頂戴、恐れ入つて幸子様を御紹介して、この方今夜一晚とめて上げ

て下さいなとおねがひする。御飯頂いてお風呂に入る。

九時頃叔母様、帯を締め直しながら、諸君は何がお好き？ とおきつになる。私は無論、

「私、お汁粉！」

「兄様は」

「僕も！」

「オヤ／＼、これは情ない」

と大笑ひ、けれど、多数決、多数決、とさわぎ立てて、三人ぞろ／＼ついてお汁粉屋へ行きました。

あのね、兄様は六杯召上りました、私と幸子様は二人で六杯よ、叔母様はお雑煮を二つでした。男の癖にお汁粉屋へ入つて人みると可笑しいのねえと云ひかけたら、兄様が失笑した。ほんとに悪かつた。

歸途に雨がふり出しました。

×

兩人ともぐつすり寢坊して丁ひました。飛び起きるとうれしい。昨夜の雨は心地よくあがつて、青桐の葉に名ごりの露がさら／＼。

幸子様のお髪あげ、二人が念入のお化粧！ 九時頃此家を辭した、幸子様の荷物は夕方まであづかつておいて貰ふことにする。

『兄様、さよなら』

つて云ふと

『や、おかへりですか』

と手をつく。

二人は相談して、淺草ときめました。日曜だから電車の混雑こと／＼。雷門で下

りる時、兵隊がよろけてあの一尺五寸もありさうなボテ靴で、いやと云ふ程私の足をふみつけた。

来てみれば面白けれど、何だか浅草と云ふと厭で仕方がない。仲店をぬけて、觀世音菩薩のお堂へ上つて、それから池の端六區へ出る。活動寫眞見るつもりかつて？ そりやこれも社會觀察のためですもの、オペラ館へはいつたのよ。何しろ大へんねえ、電気館、富士館、大勝館、三友館やら何とかダンス、キネヲラマ、我劣らじと盛んに音楽を吠え合ひ、いさゝか遠い様な私の耳でさへ鼓膜に皺がよりさう。つんぼてものはこんな音でもきこえないてせうか。

二階へ上つて行くと、風船玉の化物みたいな改良（？）服着た束髪（？）の若い女がいきなり人の腕を引つかんで案内する、覺悟はして居ながら面食つた。

まア、ハタ／＼とみんなの使つてる屍子が大きな蝶々の飛び舞ふやう。どうも暑いことわ／＼。

悲劇『人と人』と云ふのだつた。この女學生が赤沼學士に大氣饒浴びせるところ『私、眼中には男子なんてないことよ』なんかする分痛快ね。ホ、ホ、盛んな拍手、そして私等の右に居た四十あまりの田舎風のお内儀さん、音楽部で癡猛なヴァイオリン（セラ）こすり始めたのを見て『ア、あんな大きい琵琶を持ち出した』だつて『まあ素敵よ、幸子様、大きな琵琶を持ち出した』と口眞似したら、どつとまはりの人がふき出しちやつたのよ。

歸途に梅園へよつて二人で二十七銭はらひました。

三時頃には三越のお客でした。食堂へはいつてお鮎を注文してアイスクリームを食べながら、鏡の前の花を見るふりして、衣紋などかき合す。ここの給仕女、いのねえ。お揃で銘仙がすりの品のよいのに、まつ白な胸當、髪もルイザの令嬢風、みんな可愛い顔してますこと。

束髪そくはつの白い花束を見立たり、褐色メリンスの襦袢の袖を買つたり、ふと目につい

たのは札をみれば三圓なにかし、幸子様が、まア御一緒にこれが欲しいわ、と云ふ。私も同感、早速なけなしの底をはいたので、二人の財囊はカラッポになつてしまつた。汽車賃が足を出しやしないかと冷汗が出た。

無やみに心ぼそくなつて、妹のみやげを買ふつもりだつたのも、それどころではありません。

つひに新橋のプラットホームを幸子様に送られて、五時半發國府津行の列車にのりこむ。

帝劇の樂屋

×

いつもく更けて圖書館の歸途に、電車の窓から華やかな輝きを、よそにのみ見
過した帝國劇場！　今までみんなからそのことを話かけられる度に、

『私はまだ存じませんもの』とは笑む。

『まあ貴女！』と驚かれるのが、何となく心よかつたのでした。

けれども今日は、とうくその誘いを捨てました。そのはかない心やりを……。
電車を下りると、折から宮城の森にかくれんとする夕陽の、血の様に赤く大きな
つたことは、お月様の化けたのぢやないかとぎよつとした。どちらの入口からはい
るのか、伺つておかなかつたので、一寸ためらふたけれど、つと正面のへ行つて、

『ラノ』のり踊ラテンラタ

(上方寫眞右より土井氏のヘルマー、振事劇のお七三、東儀氏のシヤイロツク、松井氏のノラ、)



青つばい燕尾服を着た男の一禮する間もあたへず、『特別席の○番にかう云ふ方が來てゐらつしやる?』つてK先生のお名前を告げると小首かしげて、

『いゝえ、まだ手前どもの方へは何とも……少しお待ち遊ばしては?』

と椅子をすゝめてくれたので、そこへ腰を下したものの、場なれぬ不安さ、強いてバラソルの先で、一生懸命に石だゝみをほじくる。いろ／＼な人がやつて來る。續と腕車がのりつけられて、オーバを着た角帽や、傲然とした貴婦人や、潰島田の仇者や、夫婦づれ、三四人づれ、子供づれ、紳士、令嬢、絶まもなしにあらはれては、あるものは階段を上り、あるものは地下室へ下りてゆく。

かうやつて見てゐれば、いつまでも飽きはしないけれど、先生はどう遊ばしたのせう、少し心配になつてきた。四時までに必ずと云ふ約束、來てゐらつしやらない筈はないものを。あつちへ行つて聞き合せて貰はうかと考へ乍ら、ふと顔をあげたとたん、つか／＼と場内から先生のお姿が……。

『あら！』

と思はず立ち上つて、私、お袖に縋りたいほどうれしかつた。切符頂いていそいで北口の車寄の方にまはる。

青い上草履とはきかへて、白エプロンの案内人に従つて、定め席にみちびかれ、傍には先生がゐらつしやるし、法科大学のYさんも。やつと安心してほつと人知れぬ吐息をついたのでした。

白晝のやうな明るさ。天井にはあまたの天女が、身もかるやかに舞踏して、飛び立ちさうな白鳩や。正面の孔雀の彫刻や、何處もかしこもきら／＼と輝くさまは、舶來のシャボン箱の中にゐる様だつてまつたかね。だつて私はお芝居と云ふものを生れて始めて。何だか氣を飲まれて了つて、よくお話も出来ないんですもの。きつと先生にトンチンカンなお答ばかりしてゐたでせうよ。

筋書頂いて讀んだけれど、よく頭にはいらないんです。場内をみまはせば、照り

はゆる黒髪くろかみのつや。衣きぬすれの音おと。紅紫こうしさま／＼。丁度ちやどこ五彩ごさいの花はなをむしつて散ちらしたやう。黒い改良服かいりやうふくに、白エプロンの女案内人をなんないもうつくしい。ボンネットの羽根はねや花はなや、わりあひに西洋人せいやうじんが多くつて學生風がくせいふうが少すくないやうであつた。

パツと見物席けんぶつせきの電氣でんきは消えて、舞臺ぶたいのみの世界せかいとなつた、私の胸むねはいまさらの様ように大波おほなみを打うつ。文藝協會ぶんぎけいかいの劇で、イブセンの『人形の家ドルスハウス』

ピアノやら、綺麗きれいなひちかけ椅子いすやら、鏡かがみが光ひかつて、中央まんなかに丸テーブルがあつて、大きなストーブにめら／＼と紫むらさきの炎ほのほが燃えつゝ。あたゝかさうな室へやの様さま、こゝへ明あ日のクリスマス祭さいの買物かひものをすましたノラが、

『ラ、ラ、ラ、ララララ、ラー』

と何か快活たいくわくに歌うたひながらかへつて来る。

松井まついすま子様さま。丸まるい無邪氣むじゃきなやうな可愛あいい顔かほである。私の想像わたくしさうぞうしてゐたとノラはたいさうちがつた風采ふうさいであつた。

『うちの小鳥さん……』と夫のヘルマーの口癖。

それにちがひない、西洋の家庭とはあんなものか。夫に甘へたり抱きついたり、

『お金！』

つて飛びつくところなんぞ、どうしても三人の子のお母さんとは思へない。幸福

な女だわ。

『千姉様』

つて、後から、やんわり肩をおさへられた。びつくらしてふりむくと、まア思ひが

けない桃代様。

『あら、どう遊ばして』

とばかり、お話したいことも胸一ぱい。あまりの思ひがけなさとうれしさに、後へ首をねぢむけて、しつかり手を握り合つたまゝ、いつまでも、お顔みつめてゐたので、

『さ、そつちよく御覽あそばせよ』

と心づけられる。

ノラのところへは、昔友達のリンデン夫人が訪ねてきてました。

雲雀のやうに愉快さうなノラと、孤獨の生活につかれはてゝ職業を求めに來たり
ンデン夫人との對照は、春と冬とをならべてみるやうであつた。私はリンデン夫人
の言葉が、一々身につまされて……あはれすさび行く心よ、あゝ私達はみづから生
さねばならぬ。他をかへりみる餘裕はないのですもの。唇邊にのぼるは、餘義なく
されての笑ばかり。薄色の服をきたノラの胸に、首がざりがきら／＼とゆれる。
東儀先生のクログスタット。土肥先生のヘルマー。森氏のランク。私には批評な
んか出來ませんけれど……すま子様をみてつく／＼思ひましたの。藝術のため、好
きな道のためならば、かうして思ひ切つた女優にさへなる方があるものを、私、私
は意氣地がないのだ。普通の女の行くべき道よりふみ出しかねてゐるのだもの。あ

まりにおのゝきやすい性質であるゆる……。

二幕目のをはりに、ノラがヘルマーの手紙を見やうとするを一刻でもおくらさうと、タランテラ踊の稽古にかこつけ、ランクにピアノをひかせて常着の裾をひきとけ、仕舞には物狂はしう、めちやくに踊る。苦しいのでせうね、ノラは、ノラは。あゝその小さな胸の中は……。

×

満場急にざわめき立つ、三十分間の休憩時間。私も先生やYさんにうながされて桃代様に心を残しつゝ食堂へ行く。油っこい臭ひがムツと鼻を打つた。私たちのすぐ傍の長方形のテーブルに、藤子さんのお姿がみえたので、我知らずうき腰になつて、

『あらッ』

と口走つて了つた。先方でも氣がついて靜かに會釋なさる。

桃代様もお父さんとはいつてゐらしたので、直ぐ立つて行つて、此方へいらつしやいつておすゝめしたけれど、後で、くつてむかうの方へ陣をとつてお了ひなすつた。先生が改めてY様に御紹介して下さる、はればつたい様なお眼つきの、肩つきのがつしりした、誰かに似てゐらつしやるので、一生懸命考へたが思ひ出せない。たしかこの方だつたのねえ、弓の折みたいな櫻のステッキ持つてゐらつしやるのは。さうぢやなかつたかしら？あとで聞けば擊劍の名人ですつて。

料理の皿は運ばれたけれど、何だか胸がつまつて、些とも頂けない。サイドばかり飲んでゐた。

チキンライスを食べる時、すくつたスプーンの手をすべらして、御飯粒をバラバラ膝の上に振りこぼす。仕方がないからそつと拾ひとつてたら、先生つてば、

『二十世紀の女將門!』

ですつて。随分な、人の氣も知らないで!!

大きなビフテキの肉をもちあつかつて、俯いてハンケチで口をおさへてると、あの皿をもつて來たボーイが、まだ食べかけてるものを、ついと下げて行つて了つたので、少々拍子ぬけのてい。

『これはあんまりだ!』

なんてYさんまで有仰るので、いよ／＼きまりが悪くつてたまらない。

大いそぎに紅茶飲んで座を立つ。

ほんとに文明式のいそがしさつたら、私はもう少しそこいらでも歩いてみたくて――。

席へかへつた時には、もうあのノラが、その夜二階でもようされた、假裝舞踏會から、夫につれられてもどつて來たところであつた。青や赤や黄や白や色彩めざましき裾高な、タランテラン踊の衣裳のまゝで、踵の高い薄色の靴をはいて、惜しげ

もなくあらはした眞白いふつくりとした、腕や胸やの美しさ。十六七の小娘のやうにみえる。

いよ／＼最後の覺醒の場でした。同じ會のかへりに、それとなく暇乞のため立ちよつたあの心ばえのやさしく悲しいランクも立ち去りました。郵便箱は開かれたのです。ヘルマーは、

『おやすみよ、家の小鳥さん』

と云ひのこして手紙をもつて自分の室へ行く。後でノラは狂氣のやうになつて、長いドミノ上衣を着て、すつぱりと頭から頭布をかぶり、家をはがれて一と思ひに水死しやうとする。

『あゝ、もうあの人には遇ふことは出来ない！』

『小供、たちにも、もうあへない！』

と胸を抱いて泣きました、途端にノラ！と一喝して戸を開いたヘルマーは、恐ろ

しい見舞で妻をのしりました。他事ながら私はハラ／＼した。

そこへクログスタットから詫状と證文を送ってくる。飛び上るほどよろこんだヘルマーは、ノラを抱へるやうにして、

『私は救はれた、ノラ、私は救はれた……』

嬉しがつて縄りつくべきを、ノラはかたくなつて返事もしませんでした。ついに少しふるへ聲で、

『人形の衣裳をぬいできます』

つてつと奥へはいつて了つた。

ヘルマーは愉快さに堪えず立ち上つて、室中を歩きながらとけさうな笑顔して話かける。

衣服をあらためて、濃小豆のスカート長うきたノラは、驚く夫をしりめにかけて、椅子に相對しました。胸から下げた時計の金鎖をまさぐりながら。ノラはいま八年

來の夢が醒めた。夫は必ず身を犠牲にして、自分の愛に酬いてくれるであらう。さうすれば自分はまた死んで申譯をしやう。それが人情と人情、犠牲と犠牲の美しい奇蹟だと信じてゐたのに、夫はさう容易に犠牲になつてはくれなかつた。今まで愛されてゐたのは、人形として愛されてゐたので、人間として取り扱はれてゐるのではなかつた、女の人格や權利と云ふものは、全然みめとられて居なかつた。女も妻であり母である前に、まづ人間にならなければならぬ。まづ自分を教育してはじめてほんとうの結婚も奇蹟もなり立つ。それには今夫や小供のことなぞ思ふてゐる場合ではないと云ふので、人形の家を出やうとするところ。

ヘルマーは或ひはいかり、或ひはあきれ、ついには膝下にひざまづかんばかり、せめて今夜一夜だけでも思ひ止つてくれと哀願したけれど、

「見ず知らずの他人の家にはとまれせん！」

とまで云ひ切つて、鏡の前に立つてさつさと帽子をビンでとめる。

ヘルマーが

「それではモー私のことは思ひ出しもせぬのか」

とたづねる。

「貴郎のことや小供のことは時々思ひだしましやう」

と答へてホロリとした。

* *

* *

* *

「二人の中がほんとうの結婚にならなくつてはなりません。さようなら」

ツーと上手の戸口から出てゆく。

よろ／＼となつて、椅子にすがつたヘルマーは、

「もう居ない、行つて了つた」

「あゝ奇蹟！ 奇蹟！」

と頭をおさへてさけぶ時、閉め切つた大戸の音がどしんと響く。しづかにカーテ

ン……われる様な拍手の響き。

はつと我にかへつた私の眼には、涙があふれるばかりたまつてゐました。

「どうでした、ノラは？」

お眼鏡がこちらへ光る。

「ハイ」

つてお答へするつもりだつたけれど、よく聲が出ないでしやくり上げて了つた。
何が悲しかつたんだらう。右手は和らかい桃代様のお手にとられて、片手にショールを握りしめたまゝ立ち上つた。

廊下へ出て、先生に桃代様を御紹介する。

それから二階の食堂へつれてつて頂いて、十二ヶ月の壁書をみながら、紅茶と林檎を食べました。先生のむきかけなすたりんごの一片がどぶんと紅茶々碗の中に身を投げた。

桃代様はいつにかはらず、花やかな可愛い顔して、いきくと元氣がい。輝く電燈のもとにふさはしい乙女である。根上りの束髪にかざした黒地に紅もやうのリボンがいたく人の目をひく。

紋羽二重のお羽織振をこぼす紅うらのなまめかしさ。つゝましろナイフ取る手に、露をふくんだ野いちごの粒の様なルビーが光る。

「ノラは、ノラは？」

つてお二人からしきりにきかれる。私はいほゝ笑みにのみ受け流しました。ものを云へば泪のこぼれさうなものがおそろしつて。

私にはノラのやうな真似は出来ません、えゝ出来ない――。

あゝ人形の家を立ち去つたノラは、何處へ行つてどうするつもりなのだらう。いまこそ氣が盛つてゐるからあんなことを云つても、良人こひしさ、子の可愛さに、戀しさに――こがれ死んで了ひはしないだらうか。いくら奇蹟の夢が醒めたからつ

て、一朝一夕でさう女の心機が一轉するものですか。

たいかりそめのうたゝねの夢に見てさへ、一日二日は忘れられぬことさへあるものを。

人形ならば手も唇も冷たからうが、人間ならば、人間ならば、あたゝかい血が通ふてゐやうもの。あのランクに葉巻の火をつけてやつた時や、乳母アンナの首に手をかけて、それとなく小供達のことをたのんだ時の、女らしいノラが好き！

ノラの心持はわかつてゐる。わかりました。けれどもその心強さに涙がこぼれて取り残されたヘルマーの方が可哀想でたまらなかつた。

男は『名譽を犠牲には供しない』と云ふ。しかしそれを何百萬の女は犠牲に供してゐる。それがどうしたと云ふんでせう。女ですもの、女ですもの、女ですもの。それが女の美點ぢやなからうか。愛が生命の女と、外に動く男子とはちがふ。

×

寒山拾得やお七吉三の振事は、私にはよくわかりませんでしたけれども、拾得は何だかおばアさんと小供の化物のやうで可笑しな氣がした。背景が雪舟のかけちでやぶれ衣にはげ頭。

緋毛氈の床の上には、すらりと黒紋付でならんだ長唄連中、袴のひだを正して扇をかまへる。

『出たわ〜、お月どのが出たわ……』

『萬年昔の山々は今も見る山々』『萬年昔の溪々は『今も見る溪々』『萬年昔の月影は『今も見る月影』『ハ、、、』『おば、、、おのしは何處からこゝへ、父は何者、かゝはたれ』『とゝは鎌、かゝはかつちり燈石、とんだ火花が『ぬしか『おれちや『おれちや『ぬしちや』『ハ、、、』。

足をあげたり、飛んだりする度、カッ、ン〜と木のくつが心地よい響を立てた。汚ない（と云つてはわるいけれど）あとでのお七吉三はまた目の覺めるやうにきれいでした、元祿風（？）と云ふやうな高島田、鹿の子の帯をだらりと結んで、華手な白茶地の友禪に白を重ねたもみうらの裾さばき。

『けふぞ知る、世のうきことをうばたまの……』

黒羽二重や並べ紋、抱へた小袖とのうつりもよく、坪内さんのお嬢さんの可愛かつたこと、桃代様のオペラグラスを拜借して目にあてる。

吉三もそれは〜美しくつた。桔梗納戸の振袖、金と青と市松のやうな袴、紫の足袋、白い顔、月の眉が後の金屏に榮えて繪の如き二人は花にもつるゝ蝶のやうに舞ふた。

『時をまてとは、それや氣が長い。人の心もしらがのうばと、みともないまでこちや生きうより。盛り一時眞夏の晝を。燃ゆる緋げしと散らすもの』

先刻からせつせとエハガキにペンを走らせてゐらした先生は、この一幕が閉ぢられると共に、つと椅子を立たれた。誰かと酒卓へでも行つて氣焰を吐きなさるのかもしれない。引ちがひにいつか居なくなつてたYさんが見えて、

「あゝ何處かへ行きましたか。僕歸るです」

ときよろ／＼。

「千代十様」

と藤子さんが傍へいらして、そつと手招きなさるので、うなづいて立つと、

「何誰」

つて桃代様が私をみあげる。

いつお目にかゝつても、藤子さんのお美しいこと。お髪はローマ、白梅のお裾模様召して、お大鼓に結んだ白地に大きく花をぬひとり九帯のお品のよさ。細い／＼金ぐさりか、すらりとした襟元をまはつてきらきら輝く。

扉によつてしばしの立話を、傍に一團二團たゝすむ人達は、めづらしいものでもみるやうにちよい／＼と眼をやるので、ほんの御挨拶ばかり、何にも云はすにお別れして丁ふ。桃代様と三階へ行つてみる。

桃代様は妹さんたちへのお土産につて、おモチヤ屋の前に根を生して了つた可愛さ。そうしてお父様から入物ごと拜借して來たつて、懷から、大きな財布を引ぱり出しておはらひなさるので笑つてしまつた。

手を引き合つて階段を下りてくると、人ごみの中に先生の後姿をみつけたので、

『おや』

と云はうとすると、ばつたり玉子さんと顔見合せた。

『あらつ、まア玉子さんは』

飛びついて了ひました。

『だつて、あんまりなんですもの、私くやしくて』

蕉園式のお丸髷にしつとりと黒縮緬のお羽織召した松江の奥さんが、傍に笑つてゐらつしやる。私は御挨拶も忘れて了つて……：……はんとにきまりが悪かつた、けれど、つかんだ手は放さずに、肩をおさへて二三度ゆすぶつたら、小づきまはすだつて、随分だわ。

何時のまにか肩あげ下ろして、髪にもリボンはなく、紋羽二重の肩のあたり物さびしう、

『すつかり夫人ぶつたスタイルね』

つて背中をたゝいて上げる。この方のお口の悪さときたら、奇想天外より落下して全くたまらない。

女權擴張論者の主領でゐらつしやいます。年は上でも私なんか頭から叱りつけられて了ひます。さんくお泣きになつたんですつて。さうでせう、玉子さんは私より新時代の女ですものを。

我云はす、人も語らず、しばし主人はかたまり合つてたい顔見合せてゐました。四邊の人々はだん／＼ドアの中にかくれて了ふ。行くにも行かれず、桃代様と私は上草履で床をこすり乍ら俯いて了ふ。

X

席へもどつたら、エニスの商人の幕は開いてゐた。

法廷の場、真紅の服、白髭の公爵、白面の貴公子、憎ていなシャイロツク。若き博士に假装した花のやうなポーシャ姫、つと壇を下りて來て、

『さてしばらく』

と少しふるはせた聲をふりしぼる時や、この一幕はお伽ばなしをみるやうで、妹にもみせてやりたかつた。

拍手のうちに防火幕が下りた。人々は花園のくづれるやうに動き出して、總立と

なり、おとめしたけれど、桃代様もお先へつて出てお丁ひなすつた。今少ししづまつてからにしませうと、落ちつかぬ身を椅子にさへる。

まだく出口にはなだれを打つてゐた。

うつとり立つてると、人波にもまれおされて、とうとう足袋はだしになつちやつた。

ずらりと打ちならんでたお迎ひの俵は、西に東に星かとはかり飛び去り、群集はみな電車の方へとおしよする中をぬふて、私はこれから樂屋へつれてつて頂きましたの。

あたゝかい場内から、急に冷たい夜氣にふれ、ぼうつとなつて了つたので、どんなところへ出るのかと思つて夢心地でした。

たい先生のおあとについて、右手の車寄の前を通つて、少さなくいりをはいつて少し歩いてくと、明るい階段の前に出ました。東儀先生も土肥先生もいま風呂に

召してゐらつしやると云ふ。逍遙先生、抱月先生、丁度おかへりになる。先生は何か挨拶していらしやる。上草履とはきかへて、その長椅子に腰かけてしばらくお待ちしてゐました。急ぎ足に早稻田の角朝制服の人が下りて來かゝつて、お互ひに、

『ヤア』つて先生と立話し。

私は何時だらうと少し氣になつてきた。こんな晩には東京中の時計を、みんな八時頃でとめときたい。夜が明けて了ひはしないだらうか。

やがて二階の東儀先生のお室へと通された。天井の高い廣い部屋！何だか氣おくれがして、障子の外にためらふたを、先生に

『さア貴女もおはいりなさい』

と云はれて、そつと敷居ぎはに膝をつきました。東儀先生つてば『どちらの奥さんですか』

には驚きましたね。いつかは臺町の下宿のお女將が、M様の夫人とまちがへまし

たし、俵夫でも何でももう『お嬢さん』とは云はないんですものを。この頃は平氣になつて了ひましたけれど、年はとりたくないものね。私、ぶつてるわけでも何でもありませんのに。

間もなく土肥先生もタオル地の湯上り召してはいつてゐらつしやる。

樂屋へ来るなんて云ふことは、もう生涯のうちにあるかないかわからない。よく觀察しておきませうなんて思つたけれど、とても駄目です。私は氣が弱いのですものを、顔も得上げぬほど意久地がないのですものを。せめて玉子さんほどなら！

土肥先生は思つたより若い方でありました。東儀先生は手早く洋服をつけたがら、今夜はテンブラを食つたのでテキメンに聲がどうかかうとかつて有仰るので可笑しくなつて了ふ。天ぶらなんか口がすべつてなほよくはないかと思ふのに……。先刻ベニス法廷でうやうやしく公爵に捧げた法律書は英語の廣告の本でした、でも金ぶちの皮表紙で大へん立派なもので……、東儀先生は大いそぎで巻莖を召しあ

がりながら、シャイロックになつてかゝんでた。お腰が痛いので伸してゐらつしやる
お暇しやうとした時、土肥先生はお袴に片足つゝこんでゐらした。東儀先生と三
人御 緒に電車通りの方へ出ました。みんな外套やマントに深く顔をうづめて居ら
れるので、わからなかつたけれど、左の方へ別れかけて其のお一人に、

『おい／＼公爵、今夜は居眠りをしなかつたね』

なんて云つてらつしやるので、何かと思つたら、あれがエニス公爵になつた方、
お暇だもんだから毎日舞臺で居眠りをなさるんですつて。まさかねえ。

曇つてはゐれど、降りもせず薄きいろな月がむらがる雲を色づけて、薄すりと下
界に光りを投げてゐる。長き影を地上に印しつゝ、女の足のともすれば後れがち。

電車は折よく本郷三丁目行が來た。

小川町で皆様はおのりかへ。先生は姉崎博士と行きあつて何か笑つてらした。私
一人ばつちとなつて了つて、のり合は多くあるけれど、泣きない様なさびしさにお

そはれた。私はいつでも歡樂のあとの寂寥を、しみじみ味ははなければならぬのが
悲しい。あゝ私、私は、もうく弱い女には生れて來ないことよ。うれしさには
かなさに、苦しさに、小さな胸の安まるひまはないものを。

お七の文句ではないけれど、

『さりとはせまき世の中、常夜の國もがな』

花やかにたのしかりし一夜はとこしへに明けざらましを。

ホネームーン (終)

大大大明明明明明
 治治治治治治治
 正正正正正正正
 二二二二二二二
 五五五五五五五
 年年年年年年年
 三一十五四一十十
 二二二二二二二
 月月月月月月月
 三十五十七
 日日日日日日
 十十三十五再發印
 四三二一版版版版
 版版版版版版版
 發行發行發行發行
 行行行行行行行



印 發
 刷 行
 所 者 兼

本一ムーン真附

定價金六十五錢

郵 稅
 外 內
 國 國
 十 六
 二 錢

河 岡

勝

水 谷 景 長

博 文 館 印 刷 所

東京市小石川區久堅町百八番地

發 賣 所

東京日本橋本町三丁目
 (銀手貯金口造 東京二百四十番)

博 文 館

千 藤 内

ス トー トー 木 一 ム

全一册四十六判洋裝紙數一三四頁

正價金六拾五錢郵稅六錢

收 載 目 次

ス井ートホーム
小 女 の 戀
ハ―モニカ
お て ん ば 娘
嫁 が ぬ 人
天 女 降 臨
松 風
夢より醒めた女
も ゆ る お も ひ
ホネームーン
紅 筆

昔は加賀の千代女あり
俳名天下に治ねく人み
なその大才に驚く、後
一百五十年にして、明
治文界の單調寂寞を破
れるもの内藤千代
子あり、未だ一日も
校門をくぐらず、文章
の師につかずして天性
の鬼才よく、妙齡にし
て潑瀾たる名文を草す
まことに聖代の奇蹟な
らずや
處女作ス井トホー
ム、ホネームーン

見よ好評嘖々たる才女が快著を

著 子 代

ホネームン

全一冊四十六頁洋裝紙三三八頁

定價金六拾五錢郵稅六錢

收 載 目 次

若き日の戯れ
華族集
逝く春の乙女
學生の都會
花つみの夢
ゼラニウム
コスモスの頃
華嚴行
鵠沼日記
虚榮の都へ
帝劇の樂屋へ

の二著發刊日猶淺きにも拘らず好評湧くが如く重版、また重版、その底止する處を知らず都下の女學生は其の初版を珍藏し「千代子式」の文「ス井トホーム」式のスタイルなど新流行語となれりと云ふ、反響の大なりし事以て知らるべき也女流に天才なしと嘲る人々よ、乞ふ來りて卿らの活眼を開き本書の第一頁を繙かれん事を

新たなる一葉わが讀書界に現はる

岡田八千代女史編

● 閨秀小説十二編

● 博文館發行 ●
 全一冊四六判洋裝美本
 紙數三一〇頁
 定價金四拾五錢
 郵税金六錢

▼女流作家の肖像寫眞版挿入▲

宮子……………與謝野晶子　おはま……………森田しげ女

四十餘日……………水野仙子　モデル……………國木田治子

其一幕……………長谷川時雨　路傍の人……………生田嘉子

妹の縁……………尾島菊子　多事……………小栗壽子

機運……………田村とし子　行末……………木内錠子

實家……………岩田百合子　同居人……………岡田八千代

源氏の大作枕の草紙の雄篇現れたる平安朝は知らず才媛の輩出近時の如きは蓋し未曾有の事なり殊に筆を小説に染むる園秀に至りては未だ今日の如き盛観はあらず本書は現時の傑出せる作家より殊に十二篇を撰びたるもの鋭敏にして感情の優婉に觀察の微細なる別に一境地を拓けり就中個々各異彩を放つの感覺で紅紫爛熳たる處近時出版界の美觀と云ふべし。

故一葉樋口夏子女史著

●博文館發行●

一葉全集

全二冊

菊判上製函入美裝紙數八五〇頁

正價金壹圓七拾錢小包料拾貳錢

▼女子の肖像と其の筆跡寫眞版二

葉挿入▲

後

收載目次

菊判上製函入美裝紙數五九〇頁
正價金壹圓貳拾錢小包料拾貳錢
▼女子の肖像とその書簡寫眞版二
葉挿入▲

前

收載目次

編

○若葉かげ○わか草○筆すまび○蓬生日記
○しのぶぐさ○道しほのつゆ○よもぎふ日
記○塵の中○塵中日記○つゆしづく○日記
ちりの中○いはでもの記○水の上○水の上

日記○書簡文範

編

○にこり江○われから○ゆく雲○やみ夜○
大つこもり○経つくろ○曉月夜○うもれ木
○闇櫻○たま輝○五月雨○わかれ霜○雪の
日○琴の音○花ごもり○軒もる月○うつせ
み○この子○十三夜○わかれ道○うらむら
さき○たけくらべ○かれ尾花○棚なし小舟
○森のした草○隨感錄○流水園雜記○ほと
とぎす○そよるごと○棹のしづく

故樋口一葉女史の諸作は明治文壇の光輝也。女史が遺せる所の日記四十四巻は、女史が晩年六年間の記録にして、操持不撓なる一女性の立志傳なると共に、感情熾烈なる女作家の忠實無き告白録也。人生に對する偽らざる觀察點也。亂調なりし當時の文壇裏面史也。増訂一葉全集は、從來刊行の女史が諸作に加ふるに、此比類無き秘書と女史が小説及隨筆の未だ公刊せられしことを救む。前後兩篇合せて千五百餘頁、此稀世の女作家の眞面目な江湖に紹介するに於て遺憾無からん敢て薦む。

第七高等學校教授

文學士 鴻巢盛廣君著

● 博文館發行 ●

 口譯 おちくぼ物語

|| 口繪彩色刷四枚挿入 ||

全一冊洋裝菊判上製頗美本
紙函入紙數三三〇餘頁
正價 金八拾五錢
郵税 金 八 錢

落窪物語は落ち窪んだむさ苦しい部屋に押籠められて種々の困難に遭遇してゐる中納言の姫が左近少將に知られて漸々立身し遂々太政大臣の北の方になるといふ波瀾ある生涯を寫したもので平安朝小説中の傑作である。描寫精緻、筆路の暢達してゐることは他に其類を見ない。殊に滑稽趣味に富んでゐる點は此物語の大なる特色である。かくの如き名篇も讀み難いので現代人には殆ど顧みられないのを慨いて現代口語を以て譯出したのが即ち此口譯落窪物語である。原書の味ひを出来る丈其儘傳へる爲めに一々語を逐うて譯して發に省略してはない。これ一は古文研究者に對して直ちに註釋書たらんことを期したからである本書は又家庭に於ける善良な讀物たるを欲したので譯者は又此點にも周到な注意を拂つてゐる。